
OLFEED ~ギルド職員の仕事~

藤原無穂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

OLEED ～ギルド職員の仕事～

【著者名】

藤原無穂

N7196W

【あらすじ】

オルフィード大陸に広く存在する仕事斡旋機関、ギルドに就職した1年目の新人、リキッド。忙しい仕事の日々……なんて全然無かつた。暇だ暇だと呪文のよつに唱える毎日。トラブルが起こる中、浮浪児を育てます。

ギルド等の設定をオリジナルでお送りしています。

第一日 ヒマな仕事（約8000字）

海に囲まれた広大な大地、オルフィード大陸。地図で見ればひし形を少し歪めたような大陸。東西南北にそれぞれ大国があり、大陸の中心にエクセリアという大国があつた。エクセリアの東端に位置する街、リザリア。ここにもオルフィード大陸全土に張り巡らされた仕事斡旋機関、ギルドがあつた。

ギルドはありとあらゆる仕事を対価とともに引き受け、これをギルドに登録している者に受けた対価の一部を報酬に斡旋する。言わば、何でも屋の仲介業者である。どんな仕事も仲介することから、傭兵の斡旋やアイテム探しに人探し、収穫の手伝いなどは当たり前、その組織ネットワークの大きさから情報の売買も行い、果てはならず者への宿の貸し出しもしていた。

ともすれば、犯罪者やならず者の巣窟のように誤解を受けそうだが、公共機関のような厳格さがそこにはあつた。その一つとして、犯罪者に懸賞金を掛け公布するのもギルドの役割だった。もちろん懸賞金には国の公金や被害者遺族からの献金で賄われている。

ギルドは魔法通信システムという独自の技術を使っていて、斡旋業の補助や賞金首の照会に情報の販売も、この魔法通信の端末を用させるほどの技術力をもつている。

ともかく、情報力という点において大国ですら並び立つ事が無いほどであった。

中央エクセリア国東端、リザリア。

エクセリアと交易の最も多い、東の大団イーリアとの国境に程近い街。両国の交易業者が頻繁に立ち寄るために宿と厩舎を提供する者が多く、繁華街が大きく夜にもなれば騒々しいほど賑わうが、昼にはせせこましく商隊が大通りを行き交う。だがそれ以上に目立つのが町全体を覆い隠すように大きな防壁が囲んでいる事だ。また軍

が駐留するための基地があり、防壁の効果も手伝つてか治安がよかつた。

物流の中継点、商人たちが立ち寄り休息をする場所を求めるのだから、治安は良いに越した事はない。だが、日に入れ替わる人の数がこれだけ多い街で、治安が良いというのは珍しい。

もつとも治安のためのよりも、東のイーリアへ睨みを利かせているという背景が強いのかもしれない。実際、軍備もそれなりに大きく、至る所でエクセリア軍人を見ることが出来る。

リザリアは商人のオアシスと呼ばれている。

リザリアのギルドには商人がよく訪れる。毎日違う商人が出入りする。

商隊の護衛を雇うことは、中継点であるリザリアでは滅多に無いし、この街で一番の顧客である商人が求めるようなサービスや道具は、専門店が立ち並んでいるから、ギルドで商人がする事といえば情報を売り買いしていくくらいだ。

魔法ネットワーク端末、台上的操作パネルの上部に位置する青い魔法立方体からキューブと呼んでいる。このキューブで商人が情報を閲覧する。情報を売っている商人もたまに見かけるが、キューブを使った魔法通信で行うので、実際に僕たち、リザリア在中のギルド職員がする事はほとんどない。今も何かの情報を売った商人風の男に銅貨を三枚渡したところだ。ハツキリ言つて、暇だ。

お金といえば、キューブで情報を買う時にキューブに金貨・銀貨・銅貨を入れるんだけど、内部に簡単なセンサーがあるだけで、後は重さでそれぞの硬貨と判断するらしい。サイズと重さが一緒なら同じ鉱物って事なんだろうけど……とにかく、暇だ。

「はあ――――――」

銅貨を渡した商人が出て行ったのを確認して長く大きなため息を

吐ぐ。今ギルドには職員しか居ない。

「仕事しろよ、リキット」

すぐさま、このギルドで唯一の相棒が皮肉った。

唯一の相棒と言つても、僕に友達が少ないわけじゃなく、ただ単にリザリア東、ギルドには、僕と相棒のレー"デしか職員が居ないだけだ。決して、友達が少ないわけじゃない。

「仕事つて言つても、今みたいに情報代渡すか、キューブのお金を銀行に持つてくくらいしか、することないじゃん」

顔を膨らませながら両肘をカウンターにつく。

「ははは……まあ、確かにな」

苦笑いしながら、管理用キューブに先程の商人の情報代の受け渡しについて入力するレー"デ。

管理用キューブというのは、仕事の登録や顧客・ギルドメンバーの照会、報酬の受け渡し状況なんかを閲覧入力するためのキューブで黄色い魔法立方体がついてるので、僕たちは単に黄色とか、黄キューブとか呼んでいる。僕たちのような末端の職員用のキューブだ。逆に、客用のキューブは青いので、青キューブと言つ。

「ん。……やつぱり、商人じゃなくてハンターだつたか」

入力をしていたレー"デが、黄色の管理キューブを見ながら言った。商人とかハンターというのは、ギルドメンバー、つまりギルドに登録した斡旋を受ける人の、系統の事で、斡旋を受ける際に重要な要素の一つ。

外では、自分はハンターだとか、商人ギルド所属だとか、言つみたいだけど、実際にはギルド組織は一つで、それぞれギルドが認定した系統の、許可されたランクまでの仕事しか斡旋されないだけで、系統ごとに商人ギルド、ハンターギルド、学者ギルド、クラフトマン技巧士ギルド……。なんていう風にギルドの建物が立ち並んでいたりはしない。

「別に珍しくも面白くもないよ~」

格別リザリアでは人目を引き付ける為の商人の格好の方が、修道士や冒険者を装うより、よほど目立たないため、そうしている人も

いる。

仮にハンター系統のギルドメンバーだったとしても、情報の売買のためだけに最低のハンターランクを得て、クエストを受けず商いをしている人も多い。商人系統のライセンスには所在地が必要で、旅商売をしている人はハンターのライセンスを得ているのだろう。

ちなみにクエストというのは、ギルドが受けて紹介する仕事の呼称で、設立当初ギルドがエクセリア王国立地図製作委員会と呼ばれていた頃。オルフィード大陸の地図製作のついでに未開地の開拓余地を測つたり、魔窟への進入といった探索を主とする作業を一般から募集していた事を起源としている。ハンターと言つのもこの頃の名残だ。

当初、地図の製作は数世紀はかかると推測されていたらしいが、今ほど発達していなかつた魔法通信を使用した製作は、あまり正確ではないにしろ、通常の使用に問題の無い程度の地図を、たつたの五年で完成させた。正確な測量による大陸図の製作は、ギルド設立から半世紀経つた今でも専門チームによつて続けられている。

もつとも、仕事の引き受けと紹介が十分な事業になるという商機が大きかつたことから、クエストの引き受けと紹介を事業として独立させる結果となつた。名を新たにギルドとした上、本懐であつた地図製作を国から引き継ぐ事で準公的機関という立場を確立した。更にエクセリア王国とは別に、魔法通信の研究開発に非常に力を入れ、独自の通信システムを瞬く間に作り上げた。半世紀前には、術者同士の思念会話のようなものを魔法通信と呼んでいたが、今では、魔力を原動力としたデータ通信の事をいう。革命といって差し支えないほどの変化と言える。当然各國、ギルドの魔法通信システムを導入している。

ギルドが準公的機関という立場とネットワークを柔軟に利用して、他の追随を許さないほど巨大な組織に急成長したのは事実だ。だからこそ僕は、ギルド職員になつたことをステータスだと確信できる。

しばらく、沈黙が続いたので田を閉じていると。

「ああ……また止まつた」

そう、四日ほど前から黄キューブが止まつて反応しなくなるのだ。といつても一〇分ほど置けば、また普通に動くようになるので、暇なギルドには大した影響は無かつた。でも一応、メンテナンスを要請している。ギルドの特殊技術だから、開発部だか技術部から専門員がやってくるのに結構時間がかかる。その上、青キューブや魔法通信には異常が無いために、後回しにされてるのかも知れない。

「また？ 暇なのに、更に……暇にいなつた～」

わざと最後ゆっくりと伸ばして言つ。黄色キューブは暇な時、クエストやギルドメンバーの情報を閲覧するという大事な暇つぶしに使えるのだった。まあ、良識ある使い方ではないよね。

「リキッド……お前、だらけ過ぎだぞ」

怒気も無く、先輩風を吹かされる。まあ、確かに一つ年上で、一〇ヶ月先輩だけど。

「とは言つても仕事が無いし」

それでもレー^デに対して敬語を使わるのは、僕が礼節を重んじないからじゃなく、ギルド職員になる前からの知り合いだからだ。

エクセリアでは幼少時、少年時の教育を経て社会へ出るのが普通だけど、僕の家は割と裕福で、更に上の教育を受けられた。そうして入った学院、エクセリア王国立経済学院で知り合つた。レー^デは一年留年していく、最初はそうとは知らなかつたから、そのままズルズルと敬語を使わず話していた。レー^デも口調を気にしない気さくな性格で、年上と知つた後で改めて敬語を使ってたら、逆に皮肉の一つでも言われていただろう。

学院を卒業した後、僕は更に上の経済研究学院に入つて、一生安泰と言われるギルド職員になつたという訳。

一方、レー^デは学院卒業後、研究学院に入る金もないし商隊に入

つて世界を見て回ると書いて、僕とは違う道を進んだ。

結果的に、同じギルドの二人しか常駐しない、僕の初めての職場である、ヒーリザリア東ギルドで再会する事になったのだから、世間は狭いと思えてしまつ。

「そういうえば、お前エリートコースだつて？」

妬みも羨ましさも感じない世間話のよつたな口調で尋ねてくれるデータ。

「…………ああ？」

ギルド内を見回した後、両手を軽く上げ答える。

「はははっ、本当にわからなくなるな」

「他人事だと思って」

愉快そうに笑うデータを余所目に、両手を頬に付け目を閉じる。今度は口をへの字に曲げて。

本当は、一年の間に複数のギルドに赴任した後、試験があつてそれに合格すれば晴れてエリートコース確定。となる筈なんだけど、こうじう仕事の少ないギルドに配属されている現状。これは暗に試験勉強しろと言われているようで、逆にやる気が起きない。

仮に、嫌味な上司や性格の悪い同僚のいる配属先で仕事に忙殺されることを考える。友人と仕事の少ない今の配属先については、比べるべくも無く良環境なのは間違いない。むしろ、かなりの優待遇なんじゃないかと思う。

そんなことを考えていると、来客を知らせるドアベルがカラカラと鳴つた。

いつものように一瞥し、軽くお辞儀をしようとしたが、出来なかつた。明らかにこの街の雰囲気とそぐわないその少年の姿が、何気ない一連の仕草を躊躇させてしまつたのだ。

軍製品のような機能重視でどこか重苦しい印象を与える、黒を基調とした制服のような服装は、袖口から先が千切れで無くなつてお

り、泥の乾いた後もある。ほとんど黒一色なのにやたら汚れを感じさせるほどボロボロの状態だった。その服装とは対照的に顔立ちは幼さを残しながらも整つており、何より白い肌に、燃える様に天に向かつて伸びる赤い髪が印象的で何かの美術作品かと思わせた。年の頃は一五くらいだろうか。

その綺麗な印象を与える汚らしい少年は、こなれたように青キューブを操作し始める。そのいつも通りの光景に自分が飲まれていた事に気が付く。同時に、少年が腰から伸びて地に着きそうなほど大きな剣を帯剣している事にも気付いた。完全に雰囲気に飲まれていたらしい。

リザリアでは滅多にお目にかかれないと、遺跡や魔窟に程近いギルドならばよくある光景なのではないか。などと、勝手なイメージをして現実に戻った僕は、レーデの方を見やる。

レーデもまた僕の方へ向きなおそうとしていた。お互いの視線が交わる。レーデの顔が呆けている様に感じた。

それがひどく滑稽思えて、思わず吹き出しそうになり、慌てて両手で口を押さえた。

レーデはレーデで僕の行動が可笑しかつたのかクスクスクと笑い始める。

にやけた顔をさせたままレーデが、いつの間にか直っていた黄キューブで閲覧者の情報をすぐさま表示させる。僕もそれを見ようと横から覗くと、表示された情報に一際興味をそそられるものがあった。

そこにはハンターランクとあった。

ランクは資格系統にもよつて三つ六種類あるが、ハンター資格のランクは最高Aから最低Fまでの六種類あって、全系統の中でランク数が一番多い。というのも、ハンターの仕事というのが、他の系統に当たはまらない仕事……つまり、何でも屋のよつた仕事が多いから。単純に仕事の数も、登録者の数も最も多い。

最低のFランクは正直、誰でもなれる。報酬こそ少ないが、主婦

だろうが浮浪者だろうが、誰でもやれるような仕事だ。従つて、商人ライセンスを得られない人もハンターライセンスを得て情報売買したりする。それ故に一番多いのがFランクハンターだ。逆にEランクからが本当の意味でハンターと言える。

もつともEランクとDランクは同格というのがギルドの見解だ。Eランクは知識を、Dランクは体力を必要とする要素が大きい仕事と、性質の違いで仕事を分けているだけ。

何でも屋という性質上、上位のランクを得るために、知識、戦闘力、判断力、適応力とあらゆる能力を要求され、どうしてもクエストをこなすまでの総合力が必要とされる。

そして、この少年は既にCランクハンターだつて事。Cランクともなると、要人とまでいかないまでも旅の護衛や、規模にもよるが賊退治なんていう、実力者向けの危険クエストも含まれるランクだ。こんな子どもがとも邪推がよぎってしまうが、汚れきった服装もクエストの勲章かのように、見る目が変わってしまう。というのもCランクハンターなら選り好みさえしなければ、クエストの報酬だけで暮らしていける。プロのハンターって事だ。

ひとしきり青キュー^ブを眺めていた少年は、さもつまらなさそうな顔を一瞬浮かべ、思案する素振りをみせる。どうやら氣に入るクエストが無かつた様だ。それはそうだろう、リザリアのCランクのハンタークエストはここ一週間で、急ぎの行商護衛クエストと、国境付近の山賊討伐クエストの二件。どちらもクエスト進行中で、残つたクエストも数少なく、誰もやりたがらない様な内容か、怪しさが伺えるようなクエストだったと思つ。

基本的に、リザリアは行商が休息に立ち寄る場所で、行商途中の商隊ばかり。リザリア発の商隊も計画的に護衛を雇うならば、定期間雇う相手をギルドを介さず決めている事だろう。ギルドに制約を受けないように、手数料を払わないようにするつてのは一理ある。

ギルドのクエストでは、登録メンバーの管理とランク分けがある。その為、依頼受諾者が裏切ったり、能力を詐称ために積荷を守れなかつたというのは、あり得ない。逆を言えば、ギルドへの手数料は、安心を買う代金と考えれば高くは無い。その代わり、手数料と報酬は必ず前金で全額だ。

その制約が無いと依頼者は別の者を雇つてしまたつり報酬を踏み倒すというトラブルが必ず起る。従つて、全額前金制度は絶対に必要だ。もちろんクエスト受諾者、ソルバーが決まらなかつた場合は、手数料としての一部以外を返金する。ギルドでは、問題を解決する者の意を込めて、クエストを受ける人をソルバーと呼んでいる。行商人でもギルドを利用しない人もいる。中には、護衛を全く雇わず、賊に遭わない事に賭ける商魂逞しいツワモノもいると聞く。それがあるから、賊もなかなか減らないのだと思う。

奪われた事への報復に討伐依頼をするくらいなら、最初から奪われないように護衛を雇えばいいのにと、現在遂行中であろう討伐クエストの事をふと考へる。

少年が面倒臭そうに立ち上がり僕たちの居る方へ近寄る。
「クエストを受ける」

ただそれだけをカウンター越しに言つ。随分と無愛想な子供だと思つが、ソルバー無しにクエストは達成しない。故に代金を払う依頼者と同等と考え、解決者と依頼者を巧く取り持つのが僕たちの仕事。つてことで、営業スマイルで応対する。

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

言つて黄キュー^{ソルバー}ブを操作して、少年が登録したクエストを照会する。

「……こちらのクエストでよろしいですか？」

黄キュー^{ソルバー}ブの反対面にクエスト情報を表示させて、事務的な確認をするが、それとは別に本当にこのクエストでいいのかという疑問の意味を込めて語尾が強まる。

そのクエストには覚えがあつた。事件というほどの事はなく、そういう事もあるのだと、働き始めたばかりの僕が憶えるには十分のトラブルがあつたクエストだ。一見、ただのアイテム収拾クエストなのだけど、失敗報酬が〇%のクエストなのだ。

失敗報酬とはその名の示すとおり、クエストを失敗した時のソルバーへの報酬で、クエストの内容で分類されるギルド規定以上であれば、何%にでも設定できる。アイテム収拾はその中でもクエストの成否がハッキリとした形で判断できるため、ギルド規定に則つて失敗報酬を〇%を設定できる。

まあ、失敗報酬は誰でも規定丁度で設定するから、そこは問題じやない。問題になつたのは、ギルドで受け渡しを行う前に盗難にあつた事だ。その時のソルバーは、依頼人が盗んだ犯人だと主張した。しかし、ギルドとしてはアイテムを持つて来れなかつた以上、失敗とする他は無かつた。

その時は、新人なりにも精一杯対応したのだけど、怒鳴られながら詰め寄られた。その記憶は、今思い返してもイライラしてくる。まあ、生活が掛かってるのだから必死になるのも当たり前というもの。しかし、それ一回きりではなく以前にも同じことがあつたと、今はギルド本部勤務の先輩に教えてもらつた。どう考えても、依頼を果たせなかつたのが原因だけど、問題の潜伏しているクエストであることには間違いない。

「ああ」

その生返事に、このクエストでなければ感じなかつただろう、不快感というか苛立ちを覚える。この少年ソルバーに忠告をする事にした。

「こちらの薬素材収拾クエストなんですが。素材アイテムが盗難に遭つたり、狙われる事がありますので、お気をつけください」

「……」

無視。

「あ、あの。聞いてますか？ このクエストの素材アイテムは」

「だから何だ？」 盗まれる奴が間抜けなだけだろう？……」

つい、その通り。と口を滑らかせたりになつて、少し気分が晴れ

「早々ハシマリハヅカ?

「早くしてくれないが？」

「ださい」

- 1 -

青キューで、クエストの受諾と情報を確認すると、やはり無言で出て行ってしまう。本当に無想像だ。

「どうかしたの、レーデ？」

「いや、なんでもない……あんなナビもが儀式場跡地に行くんだから、世も末だと思つてな」

リサリアから南に程近い場所に、邪教集団が何かの儀式に使っていたらしい廃墟がある。そこは負のマナが漂っているらしく、普通ではお目にかかれないモンスターと植物の巣となっていた。その中に薬の素材となる植物が生息している。

「でもあの子も『ランクハンター』なんだし、大丈夫でしょ」
「……そうだな、それでもモンスターが怖いって思うんじゃないのか? つてな」

「そうだけど、さっきの子供の場合、モンスター相手に眼を付けて、一そ
うかな？」

「……だといいんだが」

「レーテつて子供好きだつた？」

「ん? どうかな……嫌いではなかつたが」

「子供が欲しいなら、まず彼女を作らないと！ 大雑把でがさつな
レー『には、細かいところに気の利く娘がいいと思うよ』
「……お前こそどうなんだ、彼女作る気ないのか？」

「あ、あるよ」

自分で振つておいてなんだけど、この話題はダメだ。誰の得にもならない。

「お前は頼りなさそうなところがあるから、引っ張つていつてくれる姐御肌な人がいいと思つぞ」

「う、うん」

痛いところを突かれ、たじたじと返事をしながら、レー^テに笑顔が戻つていいくのが感じられたので、今日のところは良しとしよう。

第一日 ソトな仕事（約11000円）

今日は朝からクエスト品の配達をしている。依頼人の希望で運搬を委託することはあるけど、本来、品物の運搬はギルドの仕事じゃない。それでも配達をするのは、依頼人がエクセリア東部地域の権力者で、遠い親戚にあたるため。その上、直接配達を頼まれるものだから断れる訳がない。

技巧士のソルバーによる銀製の壁掛け細工を渡し、ひとしきり細工について語つた後、世間話に突入する。かれこれ、一時間は経過していた。話自体もなかなか面白いので、消閑の訪問といえば、それらしくもある。

「そういえば、今日の夕刻には嵐になるという事だ。十分気をつけてまえよ」

とある政治家の裏話も山場を終え、僕がお茶の三杯目を飲み干しかけた辺り、依頼人がすっと立ち上がり窓の外を眺めながら言う。この人は話はメリハリも効いてて、切り上げるタイミングも心得ているようで、スッキリと話を聞ける。僕でなくとも見習いたいと思わせるだろう。

「リキット君、次の配達もお願いするよ

「はい、またお話を聞かせてください」

そうして別れると、空を見上げる。東の空には重く暗い雲が広がつており、天気が荒れる事を予告しているようだった。離れて、頭上よりやや南の空には、燐々と街を照らしている太陽。光の塊には、白い雲が軽く架かっていた。

もうお昼、ほどよくお腹の虫が鳴いたような気がした。レーデには悪いけど、先に昼食を済ませて戻ろう。

リザリアを南北に分断する、東門から西門まで、真っ直ぐ伸びる大通り。そこまで出ると、段違いに騒がしくなる。人通りはもちろ

ん、馬車の往来。通りの端には露店商が至る所に、日除け天幕を垂らしていた。耳に届く以上に、見た目にも喧騒を感じることが出来る。

東門へ近づくと喧騒も薄まり、いつの間にか反対側から歩いてくる赤髪のシルエットを見つける。昨日の少年だとすぐにわかつたが、先に東ギルドへと入つてしまつ。それを追うような形で、僕もギルドへ到着する。

木製であつて重厚感を漂わせる扉を開けると、予想していた通り、少年がカウンター前で何か訴えているようだつた。クエスト失敗かと思いきや、カウンター奥に見慣れない男女三名と一人掛けのソファほど場所を取る大きな器具や床にも小さな工具が所狭しと並べられたのを目にして、それとは違つことが伺えた。

「リキッド！ ちょうどいい所に戻つてきた」

言つや否や駆け寄つてくるレー＝デ。話によると、僕が配達に出ていった後、黄キューブのメンテナンスにやつってきたカウンター奥の三人組。彼らの検査によると、原因らしい原因が見つからないので、本格的な調査と代替え用のキューブの設置をすると決め。キューブとマナを切斷したところに少年が来たので、マナの接続を待つか、別のギルドに行くようだと説明していたとの事。

実にタイミングの悪い話だ。僕が知る限り、青キューブの増設の時でも、マナの接続は一〇分そこそこの短い間だつたと記憶している。

「すぐ終わるなら、待つてもらえばいいじゃない？」

「それが、何かが良くないらしく。……かれこれ一時間切断したままなんだ」

どういうわけか接続出来ないでいて、黄キューブが使えないって事。それは、青キューブで情報の閲覧する以外の事は何もやれないつて事。つまり、少年はいつ終わるとも知れない接続を待つか、別のギルドへ行くかの話をされていた訳で、僕が丁度良く来た。とい

うことは、

「なるほどね。じゃあ、案内してくるよ

「頼む！」

東ギルドと同じように、西門近く大通り沿いにある西ギルドなら案内する必要もない。けれど、近い方の中央ギルドは入り組んだ場所にあった。別段わざと分かりにくい所に建設したんじゃなく、都市機能や要所が変わる毎に、奥まつていつただけだろう。その証拠に、中央ギルドはいい感じに古臭さを漂わせる酒場のような内装に、石造りの建物自体も結構ボロかった。

そんなどうでもいい話を差し込みながら、少年を案内する。……はずが、少年の足が異様に速い。僕はかるりうじて歩いていると言える様な早足を強いられた。案内役が少年の後ろを付いて歩くという、なんとも情けない状況。その中で、普段運動することの少ない僕に、話をしながら「行くなんて余裕があるはずも無く。

「は……はあ……ちよ、ちよつと待つて……」

無言で振り返る少年。

「君、足速いねえ……」

「ああ、追つてくる奴がいるんで、つい。な」

目を細めて、面倒臭そうに答える。

「えっと、僕は案内をしようとしてるだけなんだけど……」

「お前じゃなくて、後ろのフードのガキだ」

言われて、くるりと振り返る。人ごみでハッキリとは見えなかつたが、確かに離れた所で小さなフード姿が露店の影に入つていいくようにみえた。赤髪の少年より小さかつた気がする。

「この植物を盗もうとしてるんだる」

どうしてかと、質問する前にあっさりとした回答が返つてくる。確かに僕はクエストアイテムの薬素材が盗難に遭う恐れがあると言つた。けど、あまりに安直な思考というか、自意識過剰というか。たまたまフードを被つた子供が、後ろを歩いていただけかもしけない。むしろ、それ以外を考える要素が全く無い。

「気のせいだよ」

「……さつさと案内しり」

無愛想なだけじゃなく、態度も言葉遣いも悪い。それ以上に、年上を敬うこと教えられなかつたのかと疑問に思つ。早く案内し終えて戻るひ、イライラする。

「じゃあ、このまま真っ直ぐ行つて三つの角を右へ、その後にあら二叉路を左へ……」

言いつつ、歩き出した僕の後ろをゆつくりと付いてくる少年。なんだ、意外と素直なところがあるじゃないか。

僕が歩くペースが遅いと感じるのか、この街が珍しいのか、時折り立ち止まつては、首を回して色々なところをキヨロキヨロと見回す赤髪の少年。その姿を目にすると、鶏が鶏トサカ冠を振つているようで、少し愛らしくさえある。

そんな感じで進んでいたので、息切れのため中止していた、どうでもいい説明を語つていた。少年は全く聞いている様子は無かつたけど、この調子で無言のまま進むのは逆に息が詰まりそうだったから。

話も終わつて、入り組んだ路地を奥へ奥へと進んでいくけば、人気が無くなつていつた。随分と寂しくなつてきた。中央ギルドはもう近く、これといって話す事もなかつたので、静かに案内を続ける。この道が一番近かつたんだけど、この街に初めて訪れただろう少年には、大通りをなるべく使う道を通るべきだつた。なんて今更ながらに後悔していたりする。元はと言えば、少年の態度の悪さが招いたことと勝手な理屈をこねる。案内した後、大通りへの出かだけ教えればいいと算段をつける。

「もうすぐ中央ギルドに着うわー！」

真横に突然、いななく馬が出現した。

正確には小さな十字路。建物が死角になつていて、脇に停められていた馬が、急に現れたように感じたのだ。だけど、そんな事は僕の驚き具合には関係ない。

僕は馬の反対側後方へそのまま後ずさる。というか、コケる。お約束のように、少年にぶつかつ……たりはせず、そのまま地面に尻餅をつく結果となる。

恥ずかしい。正直、恥ずかしい。が、ここは敢て笑顔で、「は～ビックリした～！」

「……」

無視。

やつぱり、そうきますか、恥ずかしさ倍増です。

少年は特に笑うでもなく、馬鹿にするでもなく、ただ僕に手を差し伸べていた。といつても、少年は馬の方を見ていて、片手で馬が暴れ出さないよう押さえていた。そのついで程度に、僕の方に手が伸ばされていただけ。

恥ずかしさは消えないものの、このまま尻で歩いていくわけにもいかない。差し伸べられた手を握るうと手を出した、瞬間。

フードを被つた子供が少年の後ろを走り抜ける。ちょうど目線の高さが腰辺りだったので、少年の腰に軽く巻かれた布袋を、フードの子供が引き抜いて行つたのが見えた。布袋を盗まれたのだ。

「……泥棒！」

「……ふう」

赤髪の少年はため息をつくや否や、脱兎の如く駆け出していた。

小さなフード姿は追いつかれまいと、速度もそのままに角を曲がつてしまつてしまつた。少年も逃すまいと凄いスピードで角を曲がる。僕も慌てて立ち上がり、一人を追う。

少年たちを見失つた十字路に差し掛かると途中、ガシャーンと何かぶつかる音が聞こえた。二つの曲がり角に出るとその先に、フードを被つたままの掴み上げられた子供と、左手で子供の胸元を握

り上げる少年がいた。野次馬の視線を一身に受けける少年に駆け寄つて声を掛ける。

「はあ……はあ……取り返したの？」

「布袋ならそこに転がっている」

「ふう……中にクエストアイテムが……？」

「いや」

布袋は膨らみを持たず、紙切れのよつに地面にへばり付いていた。

今度は、子供の方を向いて。

「えつと、君。盗つた物はどこへやつたのかな？」

「……そこに落ちてる」

「落ちてるつて、薬素材が入つてないじゃない」

「……知らない」

「君ね、嘘はよくないよ？」

「こいつは嘘は吐いてない。最初から布袋には何も入つてない」

赤髪の少年が答えた。

「はい？ 何も入つてない布袋を盗まれて、それを盗り返すためにここまで走つたつて事？」

「少し違うが。まあ、そうだ」

「どうして何も入つてないの？」

空だつたとしても違うより中央ギルドに急げば良かつたんじや？ それに、狙われてるつてどうして知つたのさ？」

「……質問の多い奴。……黙れ、説明する」

「第一に俺は、夜明けに南の廃墟を出た後、コイツがつけて来ていたのに気付いていた。次に、そんな事をする「イツに聞きたい事があつた。で俺は、腰につけていた布袋を空にした。わかつたか？」で、布袋を囮に子供を捕まえたと。そういう事はもつと早くに教えてくれてもいいんじやないかと思うんだ、お兄さんは……つと精神的にだんだん圧倒されてきた気がする。

窓から顔を出していた野次馬以外にも人が集まり出している。入

り組んでこるとは言え、流石に中央区、周りが騒がしくなつてきている。

「誰に盗むように頼まれた?」

そんなことお構い無しに詰問が始まった。ギルド職員が子供に暴行しているように見えるこの状況は、僕にとっては大問題だ。

「ここじゃ何だし、とりあえず、中央ギルドに場所を移そう」周りを見渡すよう顎を出して促す。

「答える」

続けられる尋問。相当まずいかもしれない。もしかしたら、放つて置いて戻った方がいいかもしない。

「ほ、ほら、エクセリア軍が来るかもしないし」

「……ちつ」

流石に思案に至つたようで、一度ゆっくりと口を開じる。間も無く、子供の腕を掴み引っ張り歩き出す。

「行くぞ」

助かったと思いつつ見ると、相当な力を込めて掴んでいるのだろう。子供は痛そうな顔をしながら、それでも声を出さないよう我慢しつつ、引きずられるようにして歩いていた。可哀想としか思えなが、状況が状況だけに、何も言えずに先頭に立つ。本当にすぐそこだからと、早足で案内する。

中央ギルドに着くと、自分が東ギルドの職員である事。キューブ故障によりソルバーを案内している事。盗難未遂に遭つた事を伝えた。少年の要望により、犯人の尋問をするため、奥の部屋を借りることに成功した。

場所が変わつても異様な状況であることに変わりは無い。尋問が再び始まろうとしていたが、僕はこの子供の言葉を一言しか聞いていないのを思い出した。もしかしたら何も言わないんじゃないかと、少年に耳打ちをしたら、少年は、だろうな。と、さも当たり前に返

した。なので、再び幼児虐待が始まらないように、僕から別の角度からアプローチすることにした。幸い、話は出来るようだから。しかしなんで僕がこんな目に、と思わずにはいられない。

子供は椅子に座っている。その対面の椅子に僕も腰を落として、質問を始める。

「君、名前はなんていうのかな？」

「……カラス」

「えーっとカラス君? 偽名かな?」

「……違う」

まあ、いいけど。呼び名があればとりあえず、それでいいと思った。

今まで案内したらそれきりと考えていたために、少年の名前を未だに聞いていなかった。後ろに立っている少年にも尋ねる。

「そういえば、君の名前聞いてなかつたね?」

「デュライだ」

「……彼はデュライ。僕はリキットって言つんだ、よろしくね。カラス君」

「……」

「この部屋の空気は、外の一〇倍は重いと思った。

「ん~、カラス君の顔が良く見えないし、この部屋ちょっと暑いから、そのフード取つてもらえないかな?」

フードというよりは、ボロ切れを被つただけのようだが、そのボロ切れは大きく子供の全身をスッポリ覆い隠していた。それを頭の部分を両手で掴み引っ張り上げる様にして、脱ぎ去る。すると、これまでボロ切れで出来たような、元の色がよく分からぬ半ズボンと半袖のような物を纏っていた。髪はボサボサで、何箇所か変な束が出来ていた。薄い茶色の髪は、切つてはいる様で短い。顔は痩せこけていて、骸骨とまでは感じないが、子供とは思えない衰退感だ。ちなみに、僕の服装はギルドの制服で白を基調としたローブの上に、黄色のケープ型飾りをつけたもので、青のラインが入っている。

所属や地域なんかで色や装飾に差があるが、ギルド職員の制服はローブだ。髪型は前髪が短めに左右中の三方向へ流し分け。後ろはミディアムの長さ、癖つ毛で軽く波打つてゐる感じ。明るいとも暗いとも言えない中間的な茶色の髪。顔は別に悪くないと思つてゐる。

「デュライは昨日と全く同じで汚れた黒い服装、天に向かつて伸びる赤髪と、整つた顔に白い肌。夜明けに廃墟を出たという言葉からも、昨日そのまま儀式場跡地へ向かつて、昼頃に街に戻つたと推察できる。という事はつまり、寝ていないと云う事だ。

「いいね！そのケープ無いほうがカッコいいよ」

「……ん」

「カラスはどうしてデュライの布袋を取つていったのかな？」

「……売るから」

「取つた布袋はどこに持つて行くつもりだつたのかな？」

「……お金くれる人のとこ」

「お金くれる人はどこにいるかな？」

「……」

「ん~じゃあ、お金くれる人はデュライの事を知つてゐる？」

「……」

「じゃあ、布袋に何が入つてると思つてたの？」

「……よく知らない」

「カラスがデュライの持ち物を狙つたのはどうして？」

「……コイツがお金になる物を、持つてゐるつて教えてもらつた」

「どうも、答えてくれる質問とそうでない質問があるようで、まだはつきりとは言えないが、この子は嘘を吐かなさそうだということ。ある程度口封じをされているんじゃないかということが考えられる。クエスト品を売る相手についての質問に答えないだけではないか。などと考えていると、デュライが割つて入つてくる。

「お前がアイテム売る相手と、俺の事を教えた奴は同一人物か？」

確かに、カラスの返答に含まれる情報が少ないせいか、取引相手と狙わせた者を結びつけるような事は何も言つていない。僕も先入観から同一人物と思い込みそうになつていていたところだ。

「……」

しかし、カラスは「デュライを強く睨むだけで、答えを返そうとはしなかつた。

「随分嫌われたな」

それはそうだろう。カラスの右腕には掴まれた後が真つ赤になつてまだ残つてゐる。下手したら痕が残るんじゃないだろうか。とは言え、その質問には一理あるので聞いておきたい所だ。

「コイツには教えないから、僕にだけ同じ人だつたかどうか教えて欲しいな」

「……違う、別の人」

椅子から降り、僕のそばまで来ると、口に両手を添えて小さな声でそう耳打ちした。

「そつか」

子供は僕に心を開いてくれてるのか、そうでなく単純に根が素直なだけなのか、今までのところ悪印象を受けなかつた。

「このガキ、どうするんだ?」

デュライは答えが早く知りたいのであるうか、カラスの処遇のことをへと話を移す。

正直、カラスのこの後については、何も考えてはいなかつた。例えは、無罪放免としたとして、カラスにとつて何が変わるだろう。そのまま戻れば、いずれ餓死しそうだ。

だからといつて、軍に引き渡す事が正しいとも思えない。軍が嫌いな訳でも、信用してない訳でもない。むしろ、好印象すら持つてゐる。それでも、子供の処遇を組織に委ねてそれでお終いというのは、間違つてゐる気がする。

「じゃあ、僕に一体何が出来るのか。考えても何も浮かばない。

「よし、乗りかかった船だ。僕の家に来るかい? カラス」

僕がこんなにお節介焼きな人だつたとは知らなかつた。

「……ん？」

「三食昼夜付きの家事手伝いのクエストかな。もっとも、ご飯以外に報酬は出せないんだけどね」

「……ご飯食べれる？」

「もちろん。ただし、これはクエストだから。ちゃんと働いてもらうけどね」

「……クエスト？ それ、する」

我ながら、なんて面倒なことをと思ったが。クエストを知らないというカラスの発言に、もしかしたら想像以上に、面倒を見なくても済むかも知れないと、淡い期待を抱くのだった。

カラスが僕にくつづいて離ないので、体面的にデュライは耳打ちされた答えをハッキリと聞けずじまいでした。けれど、僕も猛烈に刺さる視線を受け続ける気はない。中央ギルドの方々に適当な説明を終えると、すでに報酬を受け取っていたデュライと合流した。中央ギルドを出た後、デュライにだけ分かる様に切り出す。

「デュライ、今回のクエストは、あの商人が目的の情報を持つていなくて、大変だつたでしょ？」

「……ああ」

これで間違いなく伝わったはず。

それ以降は特に話す事も無く、大通りへと差し掛かつた。左へ曲がつて、東ギルドの方へ向かおうとする。するとカラスにローブの裾を引っ張られる。カラスの方を見ると右を振り向く。それに促されるように、カラスの視線の先を見やると、デュライが反対方向へ歩いていつてるではないか。

まあ、親しくも無ければ、今後何かしらのお付き合いがあるわけでも無い。けど、カラスに教えられなれば、誘拐かと心配する要素もあるでしょう。いや、無いにしても、じゃあこれで位の挨拶はあつて然るべきだと思つ。

「デュライ、さよなら！」

苛立ちと諦めとさよならとした安堵とが、ない交ぜになつた声で別れを告げた。少年が振り返ることは無かつたが、ただ一度、腰に吊るした剣の柄に手を当てた。

デュライと別れ、東ギルドへ向かう間にカラスの生い立ちというか、過去について聞いてみた。物心ついた時にはもう、浮浪生活のような事をしていたという話だった。唯一、名前を付けた人物が浮浪児集団のリーダー的存在だった子に名付けられたらしい。そのグループは数名で、生死を別にして全員居なくなってしまったという。リザリアは発展した街で、普通に暮らしている分には浮浪児を見かけたりしない。そのように浮浪児というのが少ないとは言つても、繁華街の大きさから望まれない子供が産まれるという事があるのである。娼婦がその子供を捨ててしまえば、カラスのような子が必然につまれる。

今まで見ようともしてこなかつた世界の話だ。いまさらに心が痛む。

空は、そんな僕の心を表すように重く暗い雲が広がり始めていた。

休業中、他のギルドへお回り下さい。と手書きの紙切れの貼つてある東ギルドの扉を開けると、いつも声が僕を迎えてくれる。

「遅いぞリキット、何やつてたんだ？」

「じめん、色々あつて」

カラスを連れて入ると、当然の質問が飛んでくる。謝るのもそこに、ざつくりと事情を説明する。

「それでこの子を引き取るつて言うのか、お前が？」

「うん、軍に引き渡すのは何か違うと思うんだ。それに、Fランクハンタークエストである程度稼げるようになるまでの間だけだから」「本気……なんだな？」

「うん」

「……わかった、俺に出来ることなら協力する」

「……レーデのそういう所、好きだよ。と言つたら、気持ち悪い」と言
うな。と一笑されてしまつたが、本当にそう思し、助かる。
「協力するにはするんだが……」

「口を濁らせながら悲報を告げ出すレーデ。

「扉の張り紙見ただろう? ……持つてきた代替キュークが故障し
てるのか、マナに接続しても全く反応しないんだ。……つてことで、
完全に修理が終わるまでの間、この東ギルドは休業。そしてリキッ
トは西ギルドへ、俺は中央ギルドへ一時的な異動になつた」

「ええー！」

カウンター奥を見れば、修理をしている職員の一人と目が合い、
すまなさそうに頭を下げられた。レーデの言葉を疑うわけではない
が、本当らしい。

正直、西ギルドとか遠つ……としか思わなかつた。実際、東西の
ギルドが東西の門の近くに建てられていて、東ギルド近くに住まい
を借りてゐる僕は、ほぼ街を横断する事になる。遅い僕の足で大体
一時間かかるかどうか位の距離だ。よし、馬を借りよう。
決まつてしまつた事は仕方が無い。けれど、やる事がいっぱい有
る。明日は休もう、と心に誓うのであつた。

「一応言つておくが、明日は休んでいいからな。……修理は原因究
明を含めて一週間以上かかるらしいから、西側で部屋を借りるのも
有りだ。今日はもう帰つていいぞ、後の段取りとかは俺がやつてお
くから」

僕の考えが見透かされたようで、ついで、欲しい情報ももたらさ
れる。

「了解であります！」

疲れた時のハイテンションで応え。今日は本当に疲れ果てていた
ので、その言葉に甘えることにする。とはいゝ、子連れで部屋を探
すことや仕事中にカラスをどうするかを考えなければいけない。そ

の辺の事は明日に回すとしても、とにかく今日はも‘帰ら’。

カラスは大人しく黙つたまま修理作業を見ている。といつても、今のところ大人しく寡黙な様子しかみたことが無い。真剣に見ているそれは、修理作業というよりも、解体作業だつた。やたら分解しているので、面白く映るのだろう。僕も興味は有るが、それ以上にもう寝たいという気持ちの方が圧倒的に大きい。

「カラス～、行くよ」

日も落ちかけ、色味を帯びてきた美しい西の空。家に向かう僕の後ろを、ちょこちょこと付いてくるその姿。それと対照に東から上空には黒い雲がどんと居座り、いつ降り始めてもおかしくない。優しい気持ちにどこか不安を抱えていた。

と、空が一瞬輝き、激しい落雷の音。途端に激しい雨が降り出した。

「降り出した。じつちだカラス、急ぐよ」

家についた頃にはビショ濡れで、カラスに至つては外でシャワーを浴びている様に、もう打たれ放題だった。家といつても、今朝会つた遠い親戚から借りて一軒家で、一人暮らしで使うにはかなり広く、使ってない部屋の方が多い。

雨に打たれビショ濡れでする事など、決まつていて。どうせ、カラスの髪も体も洗つてやろうとも思つていたし、ちょいどいい、まづは風呂。

この家には、ガスが供給される仕組みがある。設置されたガスのボンベを交換するという供給方法で、風呂と調理場とで火を簡単に起こす事が出来る。ちょっとした仕組みを導入すれば、シャワーも備え付けられるが、僕は風呂に浸かるのが好きなので、特に必要を感じない。

お風呂を沸かしている間、外のシャワーを浴びても風邪を引くだけ。なので一度、身体を拭いて着替える事にする。風呂が沸く

までの間、簡単な服装でいい。と思えど、子供服など持つておらず、タオルを巻くだけでいいかとカラスを呼ぶ。カラスは大人しく素直に言う事を聞くので、とても楽だ。

そうして、ボロ雑巾のように汚れた服を脱がし、身体を拭き出すと、色々わかつてくる。

細く骨と皮だけでできてるような細い腕には、デュライに掴まれた跡が赤黒くなり始めていた。全身細身だが、お腹は少し膨らみを帯びていて、餓鬼を連想させる。

餓鬼とは、子供のような背丈で、全身が細く肉付きが感じられないが、お腹だけぽつこりと丸くなつた怪物の事だ。飢餓状態が長く続き、不衛生な物しか食べれずいると、餓鬼の姿に似ていくという。もつとも、お腹がちょっと出ているというか、丸みがあるというだけで、子供にすれば当然の姿だろう。

それに、はと胸と言うのか、胸も僅かに膨らんでいる。胴体と四肢とのアンバランスさに少し衝撃を受ける。

そして、股間に男の大事な物が……無いと。まあ、薄々とは気付いていたんですね。確認が出来たってことで良しとしよう。

大まかに身体を拭いた後、タオルを巻きつけピンで留める。僕も同じように雫をポタポタと落とすローブを脱ぎ捨て、身体を拭いて、軽く着込む。まだ、風呂が沸くまで時間もあるので、今の時期には全く必要のない、暖炉に薪をくべ火をつける。その後、濡れたカラスの服を洗濯する。そんな事をしていると、風呂のお湯がいい湯加減になつていた。

レーデにも言われたことだけど、この先、この子の名前がカラスというのは、些か問題がある。女の子だとも分かったことだし、余計カラスというのは無い。本人の意思もあるけど、早めに決めた方がいいだろう。綺麗に身体を洗つてやつた後、風呂に浸かりながらぼんやりそんなことを考えていた。この子の髪を洗うと蜂蜜のような綺麗な金髪で、それで連想したのか、幼い時分に初恋の金髪の綺麗な女の子の事を思い出していた。

「ミシユル……」

つい、その名を声に出していた。

「ねえ、カラスって言う今の名前だと、これから色々問題があるんだ。……君は人間なんだし、違う名前がいいと思つんだ。……ミシユルって呼んじゃダメかな？」

「……ん」

「ミシユルって名前でいいって事かな？」

「……パンサーが付けてくれた名前じゃなきゃヤダー！」

パンサーというのは、リーダーだった子の事。きっと他の子も動物の名前だったに違いない。

「じゃあ、クロウかな。……カラスってのはクロウと言われる動物なんだ」

「クロウ？」

「そう、君はクロウ」

「……クロウ！」

どうやら氣に入つたらしい。カラスと呼ぶのだけは避けられそうだが、問題はここから。女の子に自分の名前を鳥と名乗らせるのは居た堪れない。

「そうだなあ、パンサーが付けてくれた名前ってことは、家族の名前でしょ？ だつたらファミリー・ネームって言つて、普通に名乗る名前とは別の、家族名なんだ。……例えば、僕の名前はリキット＝インデルミツツっていうて、リキットは僕個人の名前。インデルミツツが家族の名前つていう風に一つあるんだ」

「……それで、君の事をミシユル＝クロウと呼びたいんだけど、ダメかな？ つてこと」

「……クロウ？」

「そう、ミシユル＝クロウ」

「クロウー クロウ！」

当分の間は慣れないだろうから、フルネームで呼び続けることに

しょ。ミシルと呼んでも無視されそうだし。

風呂の温度も下がって、子供のミシルでも入浴する事が苦ではなかつたようだ。しかし騙してしまつた後ろめたさと、ファーストネームの方を全く気にしていない悲しさと、一応の体裁を取り繕うことにつ成しした安堵感。そらこは、どうしようもない疲れと眠気が入り混じつて、風呂から上がらずに留られなかつた。

ミシル＝クロウの身体を拭くと、風呂に入る前と同じように、軽くタオルを巻きつけピンで留める。僕は寝巻きに着替える。

暖炉前に干したローブとボロ布は全く乾いていない。暖まつた室温とぱちぱちと爆ぜる薪の音が居心地を良くする。この部屋で寝ることに決めた。といふか、寝室まで行けそうに無い。ミシルにソファをあてがい寝るように促した後、肘掛け椅子に座る。ミシルを眺めて、服も買わないなどと考えてゐるうちに、いつの間にか眠りについていた。

ドサツ！

その日の朝は衝撃と痛みから始まつた。床に身体を椅子ごと叩きつけられ、その浮遊感の次に来る衝撃で目を覚ます。椅子の肘掛けと床との間に右手を挟まれ、僕の体重が更に重みを加える。

———あたした———

肘掛け椅子に座つたままだつたのをすぐ思い出すと、すぐさま横倒れの姿勢を、四つん這いの体勢へと、文字通り這うように身体を起こし床で蠢く。右の甲の辺りが痛み、ジンジンと響く。どうやら強く打ち付けた以外に、間接を捻つたらしい。

一
大
丈
夫
？

僕の叫び声で起きたのか、タオルを巻いた子供が側まで駆け寄つてきて、腰を落としてそう尋ねてくる。カラス……じゃなくて、ミシェルだ。彼女を見て、やつと名前の事や服を買おうと考えていたことを思い出す。

大丈夫かと尋ねられれば、椅子で寝たせいか身体全身が痛い。変な姿勢で寝て痛みが全身を包んでいるようだ。筋肉痛のように。と思いたいが、少なくとも下半身は筋肉痛なんだろう。

そんな事を頭の中で整理していた。僕が返事を返さないのでいる
と、ミシェルは正面に回って顔を覗き込むように四つん這いになる。
どうやら、心配してくれているらしい。

「ちょっと右手を捻っちゃつたみたいだ。でも、大丈夫。……心配してくれてありがとう、ミシェル＝クロウ」

うん

フルネームで名前を呼ぶのはわざとらしいと思つたが、こうして何度も繰り返し呼ばないと、いつまで経つても慣れないもの。多少強引でも、フルネームを呼ぶように意識している内に言わないとな。ややして立ち上がり、薬箱を常備していなることに気付く。風邪

ぐらいの病気になつても、怪我はしないのが僕の普通だ。自分の手の事もあるが、子供は生傷絶えないつてどこかのおばちゃんが言つていたつけ。ものはついでと言つが、買い物に行く先が一つ増えたようだ。

グゥルルルルウ

起きたてでお腹の虫が鳴り出すなんて珍しいと思つたが、考えてみれば昨日は夕飯も食べずに倒れるように眠つたのだから、仕方無いかも。

この家にだつて保存食くらいはあるが、朝食にそれを食べ。また保存食を買つてくるなんて、邪道な事は僕はしない。僕は朝食は毎朝焼きたてパンを買い食いする派だ。ということで、まずは着替えだ。流石に、寝巻き姿で恥ずかしい思いをしながらパンを買いに行ける。そんな僕でも、タオルを巻いただけの子供を連れては行けない。ボロ布みたいな服装の方が幾分かマシだ。と思いたい。

当の本人はお腹に手を当てて、僕の方を見上げている。自分の腹の音と勘違いしているのかも。よくよく考えれば、ミシェルは僕以上に何も食べていかない可能性がある。……下手をすれば数日間。そう考えたら、焼き立てパンを早く食べさせてやりたくなる。

その彼女は何かを思い出したという顔つきをして、

「リキット＝インデルミッシュ！」

「はい！」

思わず名前を呼ばれ、応えてしまった。どうやら僕の名前を思い出したらしい。

「リキット＝インデルミッシュ、クエスト！……クエストしたらご飯！」

これを訳すと、僕にクエストを出させて、それが終わつたらご飯を食べるという事かな。仕事をせずに食事を与えられないと考えているのだろう。律儀なことだ。

それにしても、僕がミシェルをフルネームで呼んでいふとは言え、

呼ばれる方となると堪つたものではない。公の場の様な、何とも居心地が悪く感じる。

「よし、わかつた。その前に、僕の事を呼ぶときはリキットだけでいいから」「リキット^{ダケ}草？」

「どんなキノコでしようか……。」

「僕、リキット。君、ミシエル」

それぞれの顔を指差して言う、それを2回繰り返す。が、なぜだか顔を膨らませて不満そうな顔をする。

ミシエルは自分の方を指差して言う

「君、ミシエル＝クロウ！」

「……自分のことは君とは言わないの」

「僕、ミシエル＝クロウ？」

そういえば、ミシエルが自分のことを、私とか俺とかと言つた事がないことを思い返す。今ここで安易に違うと言つて、矯正させる事ができるものなのか。……こゝは、自分のことを言えるようになつただけ、随分な成長と考えるべきなんじやないか。 そうして、ミシエルが自分の事を僕と言つたのを無理に正すのをやめた。

「そうそう、じゃあ……」

僕自身を指差し、誘導する。

「君、リキット」

「そう正解！」

それがとても嬉しくて、くしゃくしゃと髪を撫でてしまつ。ミシエルもどことなく嬉しそうな顔をしている。すると、短い蜂蜜色の髪から溢れ出した柑橘の香りが鼻をくすぐる。

その後、何度も自分と僕を指差しながら呪文を唱えるように囁くミシエル。

ミシエルの身長から考えれば、年は12歳前後。もつとも、この年頃の発育は急で、何より個人差が大きすぎる。順当に考えれば12歳、発育が良かつたとして10歳。だとしても、言葉の覚えは何

歩分も遅れていて、偏りがあると感じる」ことが出来る。ミシルの生き立ちを考えれば無理もない話だけど。

「さて、まずは着替えるぞ。ミシェル＝クロウ」

「おう！」

ボロ布を纏つたミシェルに、ギルドの式典に使う冬用の長いケープを重ねて着させ、なんとか体裁を保つ。僕はといえば、いつもの制服のローブを羽織っていた。そうした一番の理由はミシェルが僕のことを見つけ易くしたかつたからだ。ミシェルが地理的感覚に優れていれば、落ち合う場所さえ決めておけばそれで済むかもしれない。けれどミシェルの自立力とでもいうのか、は全くの未知数でわからない。

迷子防止に、手を繋いで出掛け。まずは向かう先はパン屋だ。表へ出ると昨日の大雨も嘘だつたかのように、雲ひとつない快晴。朝早くと思っていたけど、太陽はすでに高く登っていて、懐中時計を見ると一〇時を過ぎた辺りを指している。随分長い時間眠つていたようだ。

早速行き着けのパン屋さんにづくと、そこの女主人がまず口を開いた。

「あら今日ははずいぶんと遅いねえ、今日はお休みかい？」

「ええ、機械が故障しちゃつたんで、今日はお休みで。明日から西ギルドに異動なんです」

まあ、焼きたて目当てに來るので、休みだからとこつてこんな時間に來た事は一度もないんだけど。

「本當かい？ それじゃあ今まで贔屓してくれた分、今日はサービスしようかね」

「サービスしてくれるのはいいんですが、向こうに引っ越すとは言つてないですよ」

「馬でも借りるってのかい？ 豪勢だねえ」

「ははは。その辺りはまだ決めてません」

「ところで、その子は、アレかい。隠し子かい？」

やはり気になるらしいが、予想してた質問の中では一番かわしやすい。それは、僕の子供だとしたら一〇歳頃の子供ということになるからだ、そんなこと本気で言わないだろ。むしろ全く質問されずに、変な噂になる事の方がよっぽど厄介だった。従つて、余裕の笑みを付け加えて返せる。

「違いますよ。事情があつて預かっているだけですって」

「そうかい。しかし、もうちょっと良い服着せてやんなよ？」

それが言いたかったのか。けどそれは僕も重々承知している。見ればケープの端から破れたズボンの裾が飛び出している。

「すみません、このあと買いにいくつもりなんですけど。とにかくお腹が減つて、まずはオバサンのパンを食べさせてやりたかったんです」

女主人は聞くと、膝をおつてミシエルに話しかける。

「お嬢ちゃん、試作品がもうすぐ焼きあがるところなんだけど、食べてみるかい？」

……ミシエルを女の子だとすぐに言いつぶてる。やはり判る人にはわかるものなのだと、自分の見る目の人さを痛感する。

それにしても、試作品とはいえ焼きたてがあるのはラッキーだ。

「……う？」

「言葉がまだ不自由なんです。せつかくなんで頂きます！」

ミシエルに向き直つて、

「試作なんて滅多に食べられないんだぞ？ やつたなー！」

「うん、やつた」

ややあつて

「ところでお嬢ちゃん、お名前はなんていうんだい？」

「……ん~……ミシエル＝クロウ！」

その微笑ましいやりとり。それを僕が、どれほど肝を冷やして見ていたか、一体誰が予想できただろう。すこし汗をかいだ気がする。

「ミシエルちゃんかい。もう焼けた頃だからちょっと待つてな」

「あ、うう」と、数分もかからず、ぱってりと膨らんだ茶色の紙袋を持つて戻ってくる。その膨らみたるや、到底朝食としては、食べ切れない量であることが開ける前から分かつてしまつ。

「気合いが入つて作り過ぎちまつたよ。まだ半分以上あるから遠慮せずに持つていってくんna」

「どんだけ試作してるんだこの人は。むしろ、遠慮したい。……けど、明日から会えなくなるかもと思うとそうもできない。焼いたパンは生モノと違つて腐るより、カビが生える事が懸念される。できるだけ今日中に食べなければと思いつつ、受け取る。

「はい、試作のキャロットパイ。できたら感想聞かせておくれよ」
「今なんと仰いました？……キャロットパイつて、……キャロットつて貴方。僕苦手なんですけど。焼きたて貰つてラッキーどころか、アンラッキーだ。食べられない事はないけど、ハツキリ言つて嫌いだ。」

パン屋には食べるスペースがなく、そのまま紙袋ごとパンを持って行くことになる。

「ありがとうござります！」

「ミシェルちゃん、またね～」

手をふつて見送つてくれるパン屋の主人に、言葉を発さずミニシェルは拳を高く突き上げて応えていた。

パン屋を出て大通りへ向かう途中の喫茶店に入る。「うらぶれたと いうより、骨董のような良さを感じさせる落ち着いた内装だ。リザリアにあつては珍しく魔光灯を使っておらず、蠟燭に火を灯した照明が幾つも置かれており、とても大人びた感じの店に仕上がつている。しかし、客の入りはなぜか少ないそんな店。

魔光灯というは、文字通り魔法で光を発する灯りのこと。一般に売られている物は北の大國から流通している物ばかりで、ある程度の強度がある透明か半透明な容器に、薬品と特定のマナが入つた物の事。魔科学の産物である。

魔光灯の多くは、ガラスに付いた摘みを捻る事で、薬品がガラスの中に入り、それがマナと反応して輝く。ガラスが割れたりするとマナが霧散してしまって、薬品が切れればそれで使えなくなる。なので消耗品のように扱われている。キューブの表示にもこの技術が応用されているが、半永久的に画面の表示が出来るキューブはまた特別な技術が用いられてると思われる。

この落ち着いた店の店主であろう、いい意味でくたびれた姿の初老の男性が、ゆっくりと低いが柔らかさを内包する声を出す。

「いらっしゃい」

「薄めの紅茶と何かお勧めのジュースを」

ほかほかの紙袋を見せながら申し訳なさそうにそれだけを注文する。

この店の紅茶は一種しか用意してはいないけど、美味しいブレンディングを出してくれる。淹り加減を注文しないといつも濃い。もつとも、この店の主流はコーヒーらしく、豆なら陳列棚に数多く揃っている。

空いている丸テーブルに座る、もちろん対面にミシェルを座らせて。

「ミシェル＝クロウ、先に食べ始めよう」

「……クエストしないの？」

「今日は、いっぱい買うものがあるから、買い物しかしないかな」すると途端に、悲しい顔をして俯いてしまうミシェル。そんなにクエストが楽しみなのと思うと、微笑ましく思える。

「大丈夫、明日からはがんがんクエストして貰うから、今日のところはお休みだよ。ミシェル＝クロウ」

ミシェルはお腹を押されて、今にも泣きそうな顔をして僕を真つ直に見据える。

「……クエストない。だから、『飯食べれない』

僕の考えとは違った。

まだ一日も一緒にいるわけでもないのに、僕は何を分かつた風に

接していたんだろうか。クエストがしたかった訳じゃない、食べ物を得るためにそうじろと僕が言ったからだ。その僕が今日はクエストは無いと言えば、すなわちそれは、食事抜きという事を意味しているんだ。

考えてみれば、路上生活をしていたミシェル。僕のよくな見て見ぬふりをする人間に、何かを分け与えて貰つていたと考えるには到底至らない。ミシェルにしてみれば、誰かから何かを無償で与えられる事、それ自体が奇抜なこと、不自然なことなんだ。思考の至らない、そんな異常事態なんだ。

「「めん、今の無し！……今日のクエストは買い物に付き合つ事！……で、このパンは先払いだから、わかつた？」

そう言ってテーブルの上に置いたパンを指差す。すぐミシェルの顔もぱあっと明るくなる。

「うん、わかつた！」

そう言って紙袋を抱きしめる。……つまり、今日の買い物に付き合つ事でミシェルは、このパン全部を手に入れたということになる。「ミ、ミシェルさん……ミシェル＝クロウさん……僕に一個だけいいんでパンを分けてください」

ミシェルは渋々といった風にキャロットパイを一つ渡してくれる。「ありがとう」

すると、マスターが紅茶と黄みががつた白い液体を黙つて置いて行く。ほんのりと豊かでサッパリとした甘い林檎の香りがする。マスターは話す時には優しい口調なのだが、いつも無口だ。

「これはパンのお返し、飲んでみて」

「……あまいー！あまいー！」

口に合つたようだ。さて、問題はこのキャロットパイ……。

「いただきまーす」

「……？」

「食事を見る時には、食材や食材を育ててくれた人、料理を作ってくれた人たちに感謝の気持ちを込めて、いただきますって言つんだ

よ

「ん、いただきますー」

「いただきます」

キャロットパイを口に運ぶ、こんじんの香りがやたら強く、そして異様な甘つたるさが口を包む。僕はそれを、苦虫を噛み潰したような顔で食べ切るしかなかつた。

ミシェルはとこうと、よほどお腹が空いていたのか、それとも甘いのが良かつたのか美味しそうに、一口、二口、三口と頬張つていく。結局、朝食ながらパン四個という大食漢顔負けの食いつぱりを披露してみせた。

流し込むようにキャロットパイを食べ。口直しに頬んだサラダが無くなる頃には、ミシェルは目を瞑つて幸せそうにパンの入つた紙袋を抱いていた。

「1」馳走様でした

「……さまでした~」

もう寝入つてしまいそうなミシェルを見て、つい長居する事になつた。

第三日 トロな休日～昼間～（約5000字）

喫茶店を後にして、そのまま衣料品店を目指す。といつても僕には子供服を取り扱つてゐる店の心当たりが無いので、大通りをぶらつきながら探すこととした。

すでに陽は昇りきつていて、昨晩の雨跡もほとんど残つていない。日陰に小さな水溜り、それすら焼き消そうと陽気を放つてゐる。冬用のケープだから、暑いのだろう険しい顔をしているミシェルだが、やはり紙袋を大事そうに抱えてついてくる。昼食は必要無さそうだけど、早く服を一新したいところだ。

大通りにあるからか、一面ガラス張りといつ珍しい衣料品店をすぐにつけることが出来た。全面ガラス張りやガラス戸の様な厚手のガラスの製鍊は、製鍊所が限られてくる。その上、需要も少ないのでかなり高価なのが、それを差し引くほど集客力があるのだろう。

例えば、^{ちょうつかい}蝶番の具合が良いのか、想像より軽い動きでガラス戸を開け店内へと押し入る。

「いらっしゃいませー！」

弾むような軽やかで澄んだ声が響く、見回せば、流行のファッショソなのが店の制服なのか判別の付かない、給仕の格好を模したような派手で明るい暖色を織り交ぜた服装をした、僕と同年代くらいの若い女性店員。それとその格好に負けないくらい明るく、カラフルな壁紙が印象深く映りこむ。

僕がこの店に入ったのはもちろん、外から子供服が見えたからだ。店員に軽くお辞儀をしてみせて、そそくさと子供服の見えた辺りにミシェルを引つ張つていく。

「これから、クエストに必要なミシェル＝クロウの服を買つぞ。もちろん、ちゃんと着こなしてもらつからな？」

「おー、わかつた！」

思っていたより種類が多く、無地のポロシャツから装飾や刺繡の凝った革ジャケットまである。ふと横を見れば、上流階級の晩餐会について来る子供が来てもおかしくない豪華なドレスが掛けた。僕とミシェルだけで、これと決めるには難がありそうだ。

「お子様の服をお探しですかあ～？」

途方にくれそうだった僕に、救いの手が差し伸べられる。

「ええ、普段着を何着か。まず先に、何でもいいので一着

「ええ～つとお～、」

「女の子です」

必要以上に間延びしたそれに答えを返すと、あつという間に上下揃えて持つてくる。ミシェルの顔立ちが男の子っぽいからじゃなく、多分服装のせいなんだろうと思つ。実際、パン屋のオバサンは当地されたわけだし。

「よし、着替えてくるんだ、ミシェル＝クロウ！」

女性店員に案内されて試着室へ向かう。とりあえず、着替え終わつたら出ておいで。とだけ言って一人で着替えさせる。

しばらくすると試着室のカーテンを下から持ち上げて這い出てくるミシェル。出かける前に言つた、ケープを着ておけという僕の指示を忠実に守つているのだろう、ケープを纏つたままの姿だった。そのケープを剥ぎ取つた僕はズッコけそうになつた。というのも、タータン柄の青いスカートと白いレースのシャツを着ているのだけど、シャツの向きが前後逆で、どうやって履いたのかスカートは裏地が思いつきり外側だった。

「ユ、ユニークな妹さんですね……」

間延びした口調だったはずの店員がボソッといぼす。マジ勘弁、と聞こえた気がするのは、忘れてしまおう。

「い、今直すんで！」

なかなか離そとしないパン入りの紙袋を預かっていたので、これを左で抱え上げ、右手でミシェルを引っこ抜いて持ち上げ、試着室へ入る。捻つてるので痛みが走るが、そんなことは後回しだ。

「スカートが裏つ返し、シャツはこっちが前。こうして着るんだぞ」
我ながらよく着せ直さるものと感心する余裕も無く、手早くミ
シェルの服装を整える。そして今の服の分だけお金を支払って、も
う少し見ていきますと告げて、元の場所に戻る。面倒くさい客とで
も思われたのだろう。それ以降、女性店員が話しかけて来ることは
無かつたが、結局は普段着四着、下着、軽めのコート、寝巻き、レ
インコートのお買い上げとなつた。締めて六七一オレン（oren）
の支払い、一人の客としては上々の支払いだろう。

オレン（oren）というのはオルフィードにおける通貨単位の
事で、金銀銅の三種の硬貨を使って取引を行うのが主流だ。地域や
流通なんかによつても差はあるが、リザリアでは、手のひら大のた
だの麦粉パン一個が一オレンに相当する。

金銀銅の順に価値が高い。厳密に言えば、サイズや形状の違いで
価値が違ひ、それぞれ金貨三種、銀貨四種、銅貨四種あつて基本的
に円形硬貨で、価値と重量が比例する。そのため、大きい物は直径
もそつだが厚みも増す。

円形銅貨は真鍮製だが、銅貨の一番小さな物にベル型の物がある。
それだけ銅にアルミニウムを混ぜたもので、特別にピースオブオレ
ンと呼ばれている。採算が合わない為と考えられるが、基本的にピ
ースオブオレンは滅多に市場には出回らない。従つて、一オレン單
位で取引するのが売買における暗黙のルールといえる。

価値的に銅貨と銀貨が主に流通している。金貨は価値が非常に高
く、特に大きいサイズの物を持ち歩く者はそうそういない。何月分
も給料をそつくり持ち歩くようなものだからだ。

「ありがとうございましたあ」

女性店員の口調も戻つていたが、それを現金なものと思つのは余
りに早計だらう。世話にもなつてるので、僕も礼を言つと一際可
愛らしい笑顔を見せてくれた。

想像以上の出費に、僕の財布は一瞬でくたびれ果ててしまつ。

先の事もあつて、ミシエルの金銭感覚が僕らと違うのでは。それがミシエルを悲しませる事にならないか、ちょっと心配していた。支払い台の客側の縁が、台上より出っ張つて高く作られており、その構造を利用して見えないようにお金を払つた。無論、子供に支払いを見せないようにならうといふ訳ではなく、仕立ての作業台として使つてゐるのだろう。その証拠に生地が傷まないよう出っ張つた縁は丸く削られていて、先端には樹脂が固まつてゐる。

もつとも出っ張つたその縁に、痛みの引いてきた右手をぶつけて、激痛に顔を歪める事になつた訳だけど。

店を出る際には、女性店員が聞延びした口調で同じ事を言つた。挨拶 자체は特別な事ではないのだけど、驚いたのはそれに対して、ミシエルが、ありがとー。と返したことだつた。僕の真似だらうか、それでもいい傾向にあるのは確かだらう。

綺麗に畳まれ収納されているといつても流石に両手が塞がるもので、僕は子供服一式入りの大きい紙袋を、ミシエルはパンの紙袋を抱えて家に戻つてきた。

何度もぶつけている右手はそろそろ限界が来そうだ。普通、薬局の隣には病院があり、併設されている事もしばしば。もはや、それらはセットと考えて間違が無いほどだ。小さな診療所にでも行けば、診察してくれた医師が顔を出すような感覚だ。医療費よりも薬の値段の方が圧倒的に安いため、薬局の方が繁盛するのだろう。もつとも、医者も薬もピンきりなので、それがどうのこうのとは全く言えない。

何はともあれ、まず医者に行こうと思つたのだけど。財布がすっからかんのまま行くわけにもいかない。銀行に行くのもありだけど、今は家の金庫で補充すれば十分だらう。

ミシエルの部屋も決まつていないので、子供服の入つた紙袋は居間に置きつ放しにしたまま、お金も補充し外へ出ようとするも、ミ

シェルがパンの紙袋を持ったままだつた。

「ミシェル＝クロウ、パンは置いていこう」

「ヤダ」

「……誰も取つたりしないし、家の中なら持ち歩くよりも安全なんだ。何せ、パンが潰れないから、美味しいままだよ？」

僕はこれっぽっちも美味しいとは思っていないけど。すると、紙袋の中身を覗く

「ん……わかった、置いてく」

あれだけ大事そうに抱えてれば、どう考へても潰れるよね。ミシェルはパンを置いて行く決心したものの、名残惜しそうな顔をして、家が見えなくなるまで振り返つたりしていた。といつても、角をすぐ曲がつたのでそれほど長い間じやない。

風が吹く度に、スカートを氣にするミシェル。初めて履いた、かどつかはわからないけど。それはパンツが見えることを気にしているのではなく、妙な涼しさと重量感の変わつた感覚、気持ち悪さがあるからだらう。僕も初めてスカートをはいた時にそう感じたから。言つておくけど、学院時代のちょっととした馬鹿騒ぎの余興でやつただけで、女装趣味ではない。ともかく、服装には不安は無くなつた。ミシェルはおもちややら露店の品物に氣を取られず、僕に懸命についてくるので、迷子になる心配だけは無さそつだ。けれど、行動自体はまだ心配な所がある。あまり言葉も発しないが、どれくらいの教養があるかも不明なままだ。

どうせFランクハンタークエストなんて「ミコニケーションが取れれば、ミシェルぐらいの子供にだつて難なくこなせる筈だから、その辺りが結局重要になつてくる。などと考えていると、東ギルドにも程近い診療所に到着する。

「今日はどうなさいましたか？」

診療所らしく5人位座れそうな待ち合ひ用の長椅子が一脚置いてあるだけで、小奇麗にされている。調度品と時計にどうしても目が

行く作りは、計画的なものではなく、単純に何もなく殺風景な所為だろう。受け付けには、若い男性が真っ直ぐに立つており、白衣を羽織っていた。これといった特徴もない、清潔感を全身から放つているようだつた。

「手を痛めてしまったので、診て貰えますか？」

「では、奥の診察室へどうぞ」

診察室へ入ると、誰もおりず受け付けの男が入つてきて、「では、座つて。腕を見せて下さい」

言いながら丸椅子に座る。医者と受付が同一人物ときたか、世の中色んな人がいるものだ。右腕を差し出して、どうして痛めたかの説明を要求された。僕は早く治したいという想いが先行しているので、正直に椅子から落ちて挟んだと話す。医師にちらりと顔を見られ、それが今更に恥ずかしさを誘つ。

しばらく、手を捻つたり押したりして、痛みの状態を聞かれてとを続けていたが、終始ミシェルは僕のローブを掴み続けていた。医師が怖かつたからか、僕を心配してくれての行動かは不明だけど。大丈夫。と笑顔で言つても、そのままだつた。

「捻挫です。湿布を貼つて安静にしておいてください。明日、明後日になつたら腫れるかもしれませんが、その時は温めるように心がけてください」

「はい、わかりました。湿布もお願いします」

やつぱり、診察してもらつて良かつたと思う。確かな診断もそうだが、アドバイスもありがたく思える。ほんの数分、診て貰つただけで五〇オレンと高い出費ではあるが。

その場で診察料と湿布代を払つ。処方薬というのはその場で調剤して貰うか、薬局で買うかだ。今回は湿布なので持つて来て貰えればそれで済む。手間をわざわざ増やす必要はないし、薬局に入つたらこの医師が出てきたなら、笑い転げてしまいかねない。いやむしろ、尊敬してしまふかも。

さて、次は何をするんだっけ？

「忘れてた！」

つい口を突いて出でくる言葉。それもそうだ、明日からどうするか決めてすらいない。西の空はまだ明るく、太陽もしつかり見える。けど影はしつかりと伸びており、ずんぶん長くなつてきていった。

ここから西ギルド周辺まで行つて、部屋を探すのはほぼ不可能。ミシールを連れた状態では片道一時間以上掛かるだろうから。日が落ちる頃から親身に部屋を紹介してくれる場所があるとは到底思えない。

消去法でいけば、馬を探すことになる。厩舎自体はリザリアには多いため、いくつか見たことはあるが、貸し出せる馬がいるかどうかは別問題。けれど、そちらの方がよほど確率が高いと思われる。食べ物を入れると叫び鳴る腹を制して、覚えのある厩舎へと急ぐのであった。

第三日 トロな休日～昼間～（約5000字）（後書き）

表・硬貨値段

＜金貨＞

大サイズの金貨＝5000oren
中サイズの金貨＝2000oren
小サイズの金貨＝1000oren

＜銀貨＞

大サイズの銀貨＝200oren
中サイズの銀貨＝100oren
小サイズの銀貨＝50oren

穴あきの一番小さい銀貨＝20oren

＜銅貨＞

大サイズの銅貨＝10oren
中サイズの銅貨＝5oren
穴あきの小サイズの銅貨＝1oren
ベル型の小さい銅貨＝0.1oren

第二回 トロな休日～タ夜～（約5000字）

場所に覚えがある厩舎の一軒を通り、振り返る。すると、十歩と離れないところに、レーテーがこちらを田舎して歩いていた。

「よお。制服のまんまで、何やつてるんだ？」

「これはミシェルが迷子にならなによつ、田舎だよ」

「ミシェルって名前になつたのか？ つて、女の子だつたんだな、見違えたぞ」

それはそうだろう、僕の中にはもうカラスだつた時のことが嘘に感じてしまう。それほど変化が田の前にある。

「やあ、ミシェル、覚えてるかい？ 昨日、ギルドにいたお兄さんだ

「んー？ 知らない」

覚えてないらしい。というか、ついにミシェルで反応し上に、クロウを主張しなかつた事に僕の苦労が少しでも報われた気がする。だけど、僕が呼んだことに対する反応じゃないって事が、なんだか納得いかないというか、悔しいというか。残念でならない。

「そつか。そいつは仕方ない。……お兄さんはレーテーっていうんだ、よろしく

言しながら腰を落として、笑顔でミシェルの頭をぐしゃぐしゃと撫でる。撫でられるのが好きなのか、ミシェルも笑顔になつて。

「おひ、よろしくー」

おひ、は無いだろー……。つてこんな事をしていいる場合じやなかつた。

「「めんレーテ、今急いでのんだ。馬を借りないとー」

「馬で通うことにしたのか？」

「いやあ、まあ……うん、まあ……そつ」

「お前、忘れてただる……」

「「めん」

「まあいいか、早く行つて」「……またな？ ミシル

「またなー」

「ほり、急げ！」「

僕の背中を叩くように押してそつと離れたレー^リデは、僕達が見えなくなるまで見送つてくれていた。

そして厩舎に着いたものの、人の姿が見えない。

「ヒイイイイーーーン！」「

脚を上げ、蹄で地面を叩き鳴らして完全な警戒モードの馬たち。といつても、馬房から出ることは出来ないから、彼らは安全なのだが、歓迎はされてない事だけは伝わってきた。ミシルも怯えて僕の後ろにくつ付いている。

「誰かいませんかー！」「

返事はかえつてこない。

安全は安全なのだからと、僕は勇気を出して中へ入つていく。するどどうしたことだろうか、馬の脚踏み音はどこかへ消え去り、心なしか、近くにいた馬ほど馬房の奥へと距離を取ろうとしている気がした。馬は臆病な性格と聞いたことがある。けれど、ここまで警戒されたりしたのは初めてだった。

「誰かいませんかー！」「

同じ台詞で呼びかけると

「へいへい。御用ですかい？」「

出っ歯が特徴的な小柄な中年男が、空の馬房から姿を現す。

「良かつた、馬を一頭借りたいんですけど

「えーえー。よろしいですとも……で、馬を借りたことは…?」

「借りたことはないんですけど、飼つてはいました

「ほーほー。で、どれくらい借りたいんですかい？」

「予定は1週間で」

「はいはい。そしたらこっちへ……馬を選んでもらえますかい？」

案内された先には、ズんぐりむづくりで脚も太い馬、背が高く脚

の細長い馬、背が低く銅が長い馬と、大小様々な馬が並んでいる。馬ばかりでなく、ラマ、ロバ、牛、羊までいる。

「の中から選ぶとしても、街中を走るだけなので、特別スピードは要求しない。荷を大量に乗せるわけでもない。騎乗用動物ならどうでもいいくらいだ。とりあえず、一頭ずつ見るために厩舎内を巡る。

先程まで僕にくつ付いていたミシヨルが、とある馬房の前で跳んだりしゃがんだりして中を見ているではないか。戻つて見ると、その馬房には早く走るために改良された馬種、サラブレッドがこりひらを見つめていた。その馬は白い毛並みに茶色の斑点模様をしていた。ミシヨルはおもむろに近付くと、馬房に渡された木枠をバシバシと叩き始める。気に入つたのだろうか、それとも挑発してるのである。白い茶斑点のサラブレッドがそれに反応して、嘶きながら両前足を高々と上げる。まるで一足歩行でもしようとして立ち上がったみたいだつた。危険を感じた僕は咄嗟に、両腕でくつ様にミシヨルを抱え上げた。

サラブレッドが落下するよつて前脚を下げ元の姿勢に戻ると、ゆつくりと頭を下げこすりに近付ける。その頭をミシヨルが両手で撫で回す。馬流のお辞儀の仕方だろうか。

「おやおや。お客さんこいつに好かれるとは珍しいですね

「今のつて好かれたつて事なんですか？」

「えーえー。いつも客を乗せるどこいか、触らせよつともしないんでね」

そんな馬貸し出そつとするなとこつ突つ込みは、この際置いておひづ。

ミシヨルが馬を撫で回している間、馬は動かずに素直に撫で回されている。中年男の話が仮に嘘だとしても、気が合つてているのは確かなかなようだった。

「じゃあ、この馬を借ります」

「はいはい。それじゃあ保証金四〇〇オレンを含めて、こんなと

「どうですか」

「どこから出したのか算盤を弾いて、見せてくる。算盤の見方は分かるがどうも疎い。やつとの思いでいくら提示してきたかを理解する。」

「高っ！」

中年男が提示してきた額は九ハ一オレンだ、いくら保証金を含んでるとは言え、これなら一頭買った方が安い。どう考へても、足元を見るボッタクリ価格だった。

「おやおや。冗談ですよ旦那、本気にしないでください」

「冗談には全く感じられないが、やも当たり前のようになつて流して、算盤をしまつ。」

「ではでは。一〇〇オレンぽつたりでお貸ししましょっ……なんと、今なら貸し出し期間分の飼葉もお付けしますぞー。」

「あーあの、この街に住んでるんで、分かりますけど。……五〇オレンで十分ですよね？」

男はジトツとした眼つきに早変わりすると

「へいへい。そんじやあ五〇オレンで……」

そう中年男のやり口は典型的だった。まず保証金と法外な貸出し代金を合わせた額を提示して、次から保証金を抜いた額で話をすると。それも貸出し代金は半額以下で、飼葉も付ける。これで相手が話を飲めば万々歳。飼葉も譲渡はするが運ばないので、更に運び費が必要になる。飼葉なんて実際、厩舎では必ず売られている、それもとても安価。何日分もの飼葉ともなれば相当な量となるので、運搬費としていくらボッタクられるか知れたものじゃない。

「あと、一〇オレン足すんで飼葉を定期的に家に送つて下さい。場所は……」

結構近いし、割高かも知れないが、手間賃と考えれば痛くは無い。

「はいはい。わかりましたとも、商売上手ですなあ旦那」

とはいえ、ミシェルを預かることになつてからこちら、働いて貯めた給料の他、貯蓄を一気に散財している。当面、次の給料までは

十分持つものの、銀行にはあまり預けておらず、何か入用になつた時には危ないだろ。気は進まないけど、金銭面で家族を頼ることを覚悟しておく必要がありそうだ。

馬をつれて帰路につく頃には、太陽はすっかり姿を隠し。それでも西空を赤く照らし、その存在をしつかり主張していた。僕は手綱を引き、ミシェルは嬉しそうに馬の首筋にしがみついている。

「ミシェル、馬に乗るのは楽しい？」

「うん！ 楽しい。……ミシェル＝クロウ！」

直されてしまった。ミシェルと呼んでも、もう大丈夫そうだ。

「馬の名前も考へないとね」

「名前？」

「そうそう、二つつの名前

「パカパカ！」

「そ、そ、う。いい音……こ、や、名前だね。……よし、今日からお前

はパカパカだ」

まあいいか、結局馬を借りるとは出来たし、今日の買い物の首尾は上々だろ。」

明日からの事だけ、よくよく考えればミシェルを一人残して置くことは出来ない。ギルドに連れて行くしかないんだ。今更そんな事に気付くななんて考への足らなさを痛感する。

ギルドに連れて行つた後の事に、今から氣を揉んでも仕方がない。西ギルドの職員がいい人たちであることを願うしかない。

ミシェルとパカパカを庭に残し、そそくセヒキッキンに向かう。

お腹を満たすために調理をする、調理といつても肉や野菜を適当に刻んで炒めただけの物と、固形調味料をお湯で溶かしたブイヨンスープだ。料理を食卓に運び、ミシェルを呼んで来る。

「ミシェルのパン二つと、二つちの炒め物とスープを交換しないか

？」

足の着かない椅子に大人しく座つて、じつと肉野菜炒めとブイヨンスープを見つめていたので、そう切り出した。

「うん、取引する

「頂きます」

「いただきまーす」

最初からそのつもりだったのだけど。やはりキャロットパイを直接口に放り込む気になれなくて、潰れたキャロットパイをブイヨンスープに浸す。スープにパンを浮かべる事が想像の外と言わんばかりに、ミシェルは不思議そうな顔をする。

「こうして食べるのも有りかなって思つてね。より美味しく食べるためと考えて、工夫したりするんだ。まあ、よく失敗するんだけど……うん、美味しくなった！」

中身をよく混ぜて口にすれば、甘さはスープに溶け出し、さながらキャロットスープに大変身。パンのしつとり感が口に残るのも悪くは無い。具には煮立てたような甘さはあるが、僕の中ではパンとして食べるよりは遙かに高評価となつた。けれどよく考えれば、流し込んで食べた後、口直しに食べた方が、もつと良かつたかも。

「ん~、うまい！」

真似をするミシェルの評価も良かつたようだ。炒め物の評価は無かつたものの、残さず食べたので良しとしよう。結局、キャロットパイは当日中に食べ切つてしまつた事になる。満腹のお腹を撫でるミシェルを残し、後片付けを済ませてしまう。

ミシェルの部屋には、僕の部屋の向かいのゲストルームをそのまま使うことにした。寝具やクローゼットがあるからだけど、埃が結構積もつていたので、大掃除をする羽目になつた。それでも二人で掃除をしたら予想よりも早く終わつた。

埃を被つた服を洗濯に。そして、額に流れる汗もそのままにぬるく温まつた風呂に一緒にに入る。昨日はペットを洗うみたいにミシェ

ルを洗つたけど、今日は手本を見せながら。ミシェル自身の手で身体を洗わせて、それを手伝つた。終わり掛けには素早く洗えるようになつていて。ついでに歯の磨き方を手を取つて教えた。

買ったばかりのパジャマを着させて、居間でくつろぐ。ミシェルは居間にある小窓に乗り出してパカパカを眺めている。パカパカは脚を折り、身を伏せて眠つている。

思い返すと、ミシェルの事を考える暇が今まで無かつた。一先ず、現状を整理しておこうと思つ。

ミシェルと出会つたのは一昨日。デュライという少年ソルバーを中央ギルドへ案内する途中、デュライのクエストアイテムの入つたと思っていた空袋を盗んだ後、彼に取り押さえられた。因みにその時抑えられて出来た痕は殆ど治つている。

そして、中央ギルドで僕が質問をすることになつた。その時内容からすると、物品をお金に換えてくれる取引相手がいたこと。取引相手とミシェルの関係は直接関係が有るようだつたけど、他の者も相互関係は不明なまま。ミシェルにとつて、生きるための行動が盗むという行為だつたのだろうか。取引相手にお金を貰つていたと言つことはミシェルは何かを買つていたと考えられる。少なくともお金の使い方はわかるだろう。というか、今まで路上で生きてきたんだから、僕なんかよりミシェルの方がよっぽど逞しいんじゃないだろうか。

結局ミシェルの身柄は、軍に引き渡す事を拒んだ僕が依頼主となつて、ミシェルをソルバーとして雇うという構図で、僕がミシェルを預かることになつた。もっとも僕が出任せに言つてはいるだけで、ギルドを通した仕事ではないので、ソルバーではないけど。

これだけ考えると、僕が心配性なだけで、ミシェルをすぐトランクハンターにして放つておいてもいいのかも知れない。乗りかかつた船もあるし、何よりこのままミシェルの事を投げ出してしまう

のはあまりに無責任といつものだらう。

経緯としては、ギルド職員である僕が心配症とでもいう病気を起こし、浮浪少女を引き取つたつて事かな。

推測ばかりだけど、ミシールの生活面での現状。まずは性格は控えめで大人しいと思う。特に物覚えは良さそうだといふ事。言葉については浮浪児が持つような弊害があるのでなくして、無口なだけかも知れない。蜂蜜のよつた金髪に、寝てはいるけど特徴の少ない顔立ち、特徴が少ないことはその分整つて事、だからきつと美人になるだらう。

そんな事を考えていると、窓の外に見えていた灯りは随分と減つてきており、床ではミシールがゴロゴロと転がつていた。

「うわうわ～

「あつこらー、パジャマが汚れるじゃないか……もう寝よつか

「お～」

霸気は無く、眠気しか帶びていない返答を聞くと、手を引いてミシールの部屋へと連れて行く。ベッドに寝かせ、毛布を掛ける。「僕は向かいの部屋で寝るから、何かあつたら来るんだよ?」

「お～」

もう夢の世界へ身体を半分以上突っ込んでいくよつだ。何かあつたらと言つても、トイレには一人で行けるし、もう眠りそうなので心配は要らない。そんな訳で、僕も自分の部屋へ戻つてベッドに潜り込むとそのまま意識を失つた。

第四回 キイな仕事～事件～（約8000字）

朝の日差しを浴びる前に起きたのはいつも振りだらう。窓の外では、太陽が顔を出そうとしている所だつた。それでも太陽との競争に勝つた優越感には浸れず、ぼんやりとしていた。悪夢を見て目が覚めたのだったけど、どんな夢だったかは忘れてしまつた。レー・テとテュライが出てきた氣がする。頭を振るえば、視覚だけが覚醒するけれど頭の中はぼつともやもやしたまま、ついついぼうつとしてしまう。

寝癖もそのままに、ミシェルの部屋を覗けば、毛布がベッドの下に落ち、ミシェルは三日月を形取つて横になつていて。毛布を拾いふんわり掛けて、そつと部屋を後にした。

パカパカはといえば、いつの間にか運び込まれていた飼葉を美味そうに食べていた。干草と果物だろうか。隣にはワイン貯蔵などに使う小さな木樽が置いてあり、開いた蓋からは水が入つてるのが見える。気を利かせたサービスだらうか。

いつもより早めに家を出る必要があるので、このままぼやぼやとしていたら時間が無くなつてしまつ。身支度だけ整えると、そそくさとパン屋を目指す。これが僕の日常だ。

この時間は焼きたてパンの数が違う。食パン、硬パン、バターロールはもちろん、カレーパン、クロワッサン、ベーグル、デニッシュ、パインパイ。ううん、食欲をそそるいい香りだ。

「おや、おはよ、ミシェルちゃんはどうしたんだい？」

「まだぐつすり眠つてますよ」

「そうかい。これから、西ギルドまで通いかい？」

「ええ、馬を借りたのでそれほど急がないですけど」

クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを取つてオバサンに渡す。

「大変だねえ。ま、頑張んな！」

「はい！」

「ところで、キャロットパイはどうだった？」

「僕はちょっと……。ミシェルは美味しそうに食べてたんですけど、こんな所でおべつかを使つても仕方が無い。」

「甘すぎたし、そだらうねえ。残して捨てるのも勿体無かつたし、ミシェルちゃんが美味そだつたって言うんなら良かつたさ」

…… オイ。と心中で突つ込みを入れて、紙袋を受け取る。

「今度はミシェルちゃんを連れてきなよ？」

「はーい」

家の戸を開ければ、すぐさま僕を見つけたミシェルが走つて、突っ込んでくる。

「ぐはっ」

腹部に大突撃である。

「どうしたんだ、ミシェル」

「どこ行つてた！」

「朝御飯を買つてきただけだよ」

ミシェルは、うーーーっと唸つて頭を僕のお腹に押し付ける。結構痛い。

「心配してくれたんだね、ありがとうミシェル」

そう言つて、頭を優しく撫でる。まだ唸つて頭をめり込ませているが、弱くなつた気がする。

「昨日のパン屋さんのパンだよ、キャロットパイじゃないけどね」

そう言つて紙袋を見せる。ミシェルはそれを見上げる。紙袋越しにパンの香りが流れ出す。

「ん、許す」

今日はコーナム産とルーナタウン産のブローケンオレンジペコを七・三でブレンドティーを作る。凝つてていると言われるが、僕が気

に入っている種類の物を四つ揃えて、等級も一、二種類しか置いていない。実家に置いてある茶葉はもつと産地、種類と等級が多い。もつともそれは、客人の好みの合わせられる様にってだけで、普段使う茶葉は大体同じだ。

沸かしたお湯と茶葉を淹茶ポットに入れ、そのポットを鍋の湯につける。これが僕の紅茶の淹れ方なのだから、変だと言われようが仕方ない。

一つはそのまま。もう一つは砂糖を多く入れ溶かし、湯煎ならぬ水煎で少し冷やし、ぬるくして。

「さあ食べよう。」の中から2つ選んで」

紙袋を開け、パンを並べる。

「ん～～～～～

それぞれ見比べているが、決めかねているようだ。考えにくい事だけど、もしミシールがパンを食べたことが無かつたとしたら、判断材料はキャラットパイしかないわけだ。選ぶってことは、過去の経験や体験から選んだ未来を連想し、予想することに他ならない。もちろん、例外もあるけど。そう考えたなら、判断材料の多さは選択を容易にし、判断材料の少なさは選択を困難にしてしまう。

「じゃあ、四個とも半分こにするか？」

「おー、半分こ～。半分こする～」

クロワッサン、砂糖蜜掛けのベーグル、ソーセージパン、アップルパイを包丁で半分にする。クロワッサンは断面が完全に潰れている、ベーグルとソーセージパンもそこそこに潰れた。ちょっと残念だけど、仕方ない。

「いただきまーす」

「頂きます」

ミシールの評価によると、第一位はアップルパイ、第二位はソーセージパン、第三位はクロワッサン、第四位は砂糖蜜掛けのベーグル、第五位は紅茶だそうだ。パンは全部うまい！と言いながら食べていた。紅茶に関しては、ジュースの方が美味しかったらしい事、

それだけを仰いました。味覚が違うのは当然だけど、このままだと僕は味覚に対する自信を失いそうですよ、ミシェル先生。

「じゃあさまでして、食器を軽く片付けていとミシェルが今日の事を聞いてくる。

「リキッド、今日のクエストは？」

「えー、今日のクエストは、なんと……！」

何も考えてません。

「西ギルドに行つて……」

「行つて？」

「……大人しくしている事！」

「？」

「じゃなくて、やっぱ、向こうに着いてから、色々決めよ。僕も行くの初めてだし」

「わかった！」

「さあ、着替えて」

「おー！」

ミシェルの着替えを手伝わず、自分で全部やらせる。時々、このボタンはこっちとか言うだけだ。それでも、順調に着替え終えた。ドレスや正装のような特別な着方のあるものでなければ、すぐに憶えてしまうだろ？ 今日の服装は、白のカッターシャツと、黒を基調としたゴシックパンツでひらひらの装飾が多い。ミシェルの一番のお気に入りらしかった。

ボサボサ髪では勿体無いと思ったので、今日からミシェルの髪を梳く事にした。ボサボサ髪と言つてもショートなので、手間はそれほど無かつた。

「おつと、遅刻しちゃうかも。行こうー、いってきます」「いってきまーす」

ミシェルは相変わらずパカパカの首にしがみ付いているが、今はその方が助かる。とはいって、遅刻するかもと言つても、サラブレッ

ドに街中を全速力で走らせたりはしない。駆け足で程度で十分だ。それでもかなり早く、二〇分と掛からずに到着するかもと思うほどだ。

「いいぞ、パカパカ！」

「パカパカはいいぞ！」

大通りを走るのは初めてで、これほど速度感があるものかと少し驚いている。実際、街中と野外では全く、感覚が違う。全速力で走つたらきっとスリルがあるだろうなんて考えていると、すぐに西ギルドに着いてしまう。

とりあえず、パカパカを近くの厩舎に預けてくる。

「おはよっございます、東ギルドから来たりキットです」

「やあ、話は聞いてるよ。俺はネスト。あつちは……」

大工ですと言わんばかりの、肉付きと日焼けをした大柄の男。若くも老いてもいないその男はそう言って、奥を指差そうとする。

「おはよっございます、私はマルガレットです！ マルガって呼んでくださいー！ リキットさん！」

奥から指差される前に、眼鏡をかけた女の子があつといつ間に僕の目の前までやってくる。

「は、はい」

「ところで、こちらのお嬢ちゃんは？ 娘さんですか！」

目をキラキラ輝かせながら聞いてくるマルガ。

「いえ、事情があつて預かってる子で、ミシェルって言います」

「ミシェル＝クロウ！」

「そつかあ、ミシェルちゃんね～よろしくね～！」

そう言って、ミシェルの手を握るマルガの表情は恍惚としており、今にも口の端から涎を出しそうな勢いだ。

「マルガはお喋りで、しかも色んな話に首を突っ込むのが大好物なんだ。お前さんも運が悪かったと諦めてくれ」

そうネストが耳打ちしてきた。

「まあ、短い付き合いかもしれないが、よろしくな
「はい。よろしくお願ひします」

「よろしくー」

「そんなん、短いだなんて言わないで下さい。寂しいです。クスン
…………と、こ、ろ、で、……」

そうして、数時間に及ぶマルガの質問責めが始まった。その責め
苦は、ミシユルが、お前めんどい！ と言つまで続くのであった。

ミシユルはマルガを無視しながらも、懸命に掃除をした。その結果、西ギルドの中は光り輝きそうなほど綺麗になつた。逆に、昼食のメニューにミートスパゲティを食べた時の汚れも手伝つて、ミシユルの服は一日でずいぶん汚れてしまつた。

良くやつたと撫でて、ご褒美を考えてみたのだけど、これといつ
ていいアイデアも思い浮かばなかつた。

別に浮かんだアイデアの中に一緒に料理を作るという生産的なものがあつて、今日はそれを実行することを決めていた。

帰り道、パカパカに乗つて早足で進む。途中で、芋、人参、玉葱、豚肉、カレー粉を買つて。そう、今日はミシユルと一緒にカレーを作るつもりだ。

カレーは元々、サリッサ地方に伝わる伝統料理に使う、何種もの香辛料の粉末を混ぜ合わせた、粉の事をいう。その粉を使った料理は痺れるような辛さと、鼻と食欲を刺激する香りが特徴的だ。しかし、サリッサ地方の人間でない僕たちの言うカレーとは、サリッサカレーを基礎にまろやかに仕上げ、旨みを増やしたカレー粉を大量の水で溶かし煮込んだソースの事をいう。サリッサカレーを使った赤いソースを本格カレーというのに対し、今日作ろうとしている黄色のソースは央風カレーという。

もうすぐ家に着くという所で、レーーデが東ギルドに入つていくのが見えた。僕も東ギルドの様子が気になつていたので、馬を停め、後を追うこととした。

「ミシェル、ギルドの様子を見てくるから、パカパカと一緒に待つてて」

「わかった、待ってる」

待っていると言いつつも、首に巻きついているわけだけど。

ドアベルが鳴ると、中にいたのは修理に来ていた男二人女一人そしてレー・デ。全員こちらを注視していたが、相手が僕だと分かるとレー・デが僕に近付きながら言う。

「お前、どうしてここに？」

「レー・デが入つてくのが見えたから、僕もギルドの、キューブの調子がどうなつてゐるのか気になつて」

「……そうか。キューブはまだまだ、だそうだ。まあ一日目だしながらギルドの方は、見ての通り、全てのキューブを切つて開いてもないさ。職員も居ないしな」

ギルド内を見回すとその通り、キューブは全て明かりを失つていた。

「ところで、西ギルドはどうだった？」

「うん、仕事は暇なんだけど、職員の人達が個性的でね。そつちこそ、中央ギルドはどうだったのさ？」

「ああ、中央も暇さ」

「やっぱりそつか。中央の人達はどんな人だった？」

「良い人達だよ」

「……そうだ、ミシェルと一緒にカレーを作るつもりなんだけど、今日時間ある？」

「カレーか、いいね。もちろん食べさせてもらえるんだろ？」

「うん！じゃあ、行こう」

「ああ。……それじゃあ、後はお願ひしますよ」

「修理、頑張つてください！」

修理職員の女性が代表して応えた。

「任せてください！ 美味しいカレー、楽しんできてください」

ギルドを出てパカパカとミシールの待つている方へ、歩き出す。すると、夕日を反射した何かがキラキラと光つて、上から落ちてきて、僕の首元で止まる。

「動くな」

本で読むようなお決まりな台詞を聞いても、僕の首の前で止まっているのが剣だと認識するにしばらくかかった。

その声には聞き覚えがあり、すぐに赤い髪の少年を思い浮かべる。ギルド側の壁から順に、レー^デ、僕と並んで、剣を突き出している者がいる。横目で確認すれば、赤い髪と黒い衣装をしている事だけがわかつた。

「……デュライ？」

「隣のお前、逃げるなよ？」

「デュライ、一体何をしてるのさ？」

完全に理解不能だつた僕は、質問を投げかけるしかなかつた。デュライは剣を僕の首前に置いたまま、押して、剣の刃の付け根を僕に、刃の先をレー^デの首元に流れるように付ける。すると、デュライがちょうど僕の目の前に立つ形になる。

「そつちのお前……」

「リキット！」

ミシールの声だ。デュライの姿越しにミシールが全力疾走で駆けてくる。そして、そのままデュライ目掛けて飛び込む。

「……チツ」

舌打ちをしながら、僕の真隣へと半回転しながら、するりと剣を引き構えるデュライ。

飛び掛ったミシールと、僕の間に白い3本の痕線が奔る。着地したミシールの右腕には見たことの無い、動物の爪の形をなした武器がはめられていた。それは爪^{クロ}と言われる武器だらつ。黄と茶色の手袋の甲側から伸びた3本の白い凶器が、動物の爪のよつこ内側に曲がっている。クローは相手の四肢を引き裂く武器だ。

睨み合つミシエルとデュライ。

「その武器……あの時のガキか？」

「リキットから離れる！」

「どんな魔法使って出してるか知らないが、それじゃ俺には勝てねえよ」

「……リキットから離れる！」

一度言つて、飛び掛るミシエル。だがデュライは、簡単に爪の間に剣を下向きに差し入れると、そのまま払うように剣を押し込む。地に足が着くや否やミシエルは後方に押しやられる。

「大人しくしてろガキ！」

剣を引き少し間を空けると、力任せに振り上げる。その軌道上にミシエルの武器と頭がある。剣先はまたしでも爪の間を捉えて、ミシエルの爪は右手ごと宙に投げ出される。デュライは身体を左回転させて剣を一周させる。

「危ないミシエル！」

僕の叫びは届いたのか、弾き飛ばされた右手と爪を外向きに身体の左側へ置く、左手を爪の真つ直ぐに伸びた部分に添えて、間も無く、下から上へスライドしながら回転するデュライの剣が容赦なく飛んでくる。爪と剣が交差して、ミシエルは剣に掬い上げられるようにならばれて、そのままギルドの壁へ叩きつけられる。

「ぐあ！」

ドツツツと鈍い音を立てた後、壁に叩きつけられたミシエルが、壁に弾かれて落ちていぐ、ミシエルが、倒れる。

「ミシエル！」

すぐに駆け寄り膝を突いて抱き寄せる。

「ミシエル！ 大丈夫か！」

「う？ ……だい……じょーぶ」

僕はミシエルを覆い抱きしめる。

「さあ、待たせたな？」

レーデの方を向き直るデュライ。もう、何が何だか分からぬ。

ミシェルを一刻も早く医者に見せたいが、レーデを見捨てていくような事はできない。

「……許してくれ」

僕には、そのレーデの言葉の意味が全く分からなかつた。

「知つてゐる事を吐いてもらおうか」

「ああ、わかつた。……初めは偶然だつたんだ。……ついうつかりソルバーの事を話してしまつて、それを聴いていた奴が俺に話を持ちかけてきた。ソルバーの情報を売れと。……どうしても金が必要だつたんだ」

レーデの言つてゐるのは多分、失敗報酬0%の薬素材クエストのソルバーの事だとすぐにわかつた。ミシェルがデュライのクエストアイテムを狙つた事。デュライを狙うように誰かからの情報を得てしていた事。レーデがデュライの情報をその誰かに流したとすれば、全ての流れが合致する。

それは失敗報酬の無いクエストが、ソルバーも依頼人も互いを知らずに進行するクエストで、その最たる例がアイテム收拾という事に尽きる。この場合においては、ソルバーの情報は一切外部に出される事がない。これはソルバー保護という要素が強い。今回はデュライがあのクエストを受けたことは、僕とレーデしか知らないことになる。

ちなみにその逆、失敗報酬の有るクエストは内容によつて、顔合わせというものが出来る。クエストを引き受けたソルバーと依頼人が互いを確認できる制度だ。もつとも相当慎重な人間しかこの制度を使つたりしない。

「フン、お前の事情なんてどうでもいい。……俺が知りたいのは、その情報を買つてる奴の事と、その居場所だ」

デュライが剣を向け、正直に話すレーデに詰め寄る。

「……奴は依頼人じやないが、居場所なら知つてゐる」

「じゃあ、案内してもらおうか?」

「ああ」

「……すまない、リキット。……」こんな事に巻き込んで

「……レー^テ」

「早くミシ^ルを医者の所まで運んでやつてくれ……」

「……うん」

レー^テはゆっくりと歩き出した。テコライは剣を鞘に収め、何事も無かつたかのようにレー^テの後ろを追つ。

「ミシ^ル！ すぐに医者に診せてやるからなー」

「えー、医者ヤダ！」

言つと、すくっと立ち上がるミシ^ル。……えーと……全然元気に見える。

「大丈夫なのか、ミシ^ル？」

「うん！ 大丈夫」

壁に叩き付けられたのになんで、と困惑している僕の頭の中に声が響き始める。

（リキットとやら、ミシ^ルを心配してくれるのは有り難いのだが、この子は大丈夫だ。問題無い）

「えつ？」

その低い声ははつきりと響いて聞こえるのだけど、周りを見回しても、離れた所に一連の騒動により出来たと思われる人だかりが残つてゐるだけで、その声とは距離感が全く違つた。

（僕はここだ、ミシ^ルの右手……この武器に宿る精靈だ）

「……せいれい、と言ひますと、あの精靈ですか！」

精靈というのは魔法の基礎となる能力を持つ存在の事で、普通には見ることが出来ない。魔法は精靈との契約によつて体内外のマナを使用することで発動する能力というのが魔法の通説で、精靈無しに魔法を使う事は出来ないとされている。

因みに、魔科学と魔法はマナを使う事以外は、全く別の分野で共通点が無い。なので、魔法や精靈について詳しい事は僕は全く知らない。

（喋らざとも良い。お主とは通じた故、お主が伝えたいと思い考へる事であれば、儂には伝わる。それに精霊云々と口にする事は、お主にどうても良い結果には成り得ぬ）

（……えつと……」「こうでいいのかな？）

（うむ、宜しい。……申し遅れたのだが、故あつて本来の名は教えられぬ。今は器の名を借りてパンサークロード名乗つておる）

「そ、そうだ！ ミシェルは無事なんですか！」

つい喋ってしまったけど。これつて、周りの人から見たら、襲われた事で精神が錯乱しているように見えるんだろうな。

（詳しく話すには時と場が適切で無い故、言及せぬが、ミシェルは無事だ。）

デュライに連れて行かれたレー＝デも多分無事だ、と思いたい。レー＝デが危険になるとしたら、レー＝デに対し用の無くなるデュライよりもむしろ、情報を売つていたという相手が逆上した時だろつ。

そういえば、さつき精霊はパンサークロード名乗つたつけ。ミシェルがカラスだった時のストリートチルドレンのリーダーと同じ、パンサー。

（……聞いておるか？）

「え？」

（場所を変えぬか、と申しておる。……それに、ミシェルもカレーとやらを、一緒に作るのを楽しみにしておるのだ）

「おお、カレー！ カレー！」

色々あって少し混乱気味だけど、レー＝デをこのまま放つて置いていいのだろうか。レー＝デは確かに自分の非を認めて、デュライを案内した。ミシェルの身を案じてくれた親友の窮地を見過ごす事が出来るだろうか。ミシェルは無事である以上、その答えは簡単だ、そんなこと出来ない。

「ごめん、ミシェル。レー＝デが心配なんだ。カレーは後にして、後を追わせて欲しい」

「うん、わかった」

(それは良いのだが……後を、追えるのか？)

レーデとデュライが向かつた方向には、もつ彼らの姿を確認することは出来なくなっていた。すぐ角で曲がったとも、デュライが急かしたとも考えられる。いずれにしろ向かつた先は、東ギルドより西……ほぼリザリア全域だ。心当たりでもなければ探しようが無い。「そうだ！……ミシェル、デュライが金目の物を持つて、教えてくれた人が何処に居るか知ってる？」

「ん、知ってる！」

「ほんと！ そこに案内できる？」

「うん！」

(では儂はしじばらく消えるとしよう)

聞こえるや否や、ミシェルの右手の爪武器パンサークローラーは見えなくなる。ミシェルの右手の周辺を慎重に探るが、何かに触れることはなく、本当に消えてしまっていた。

パカパカに乗り、ミシェルにの先導で向かつた先は、昨日立ち寄った診療所だった。

第四日 キイな仕事（解決）（約6000字）

街全体が赤く染まり、診療所もオレンジの炎で燃えているようだつたけど、火事になつていたりはせずに、ただ夕日色に染まつていた。

診療所の外から見る分には、レーデやデュライの姿も無く物静かだつた。日常の風景のようにしか見えなかつたけど、ここで無為に過ごしても仕方が無いので中へ入る。

「すみません、もう休診の時間なんですが……？」

昨日の医師兼受付の男性がそこにいた。何事も無いことはいい事なのだけど、何事も無さ過ぎて焦る。

「え、えっと。僕と同じギルド職員と、赤い髪の少年が来ませんでしたか？」

「さて？ 今日は特に来診が多かつたが、昨日の君以来には見なかつたと思うね」

「ミシェル……本当にここなのか？」

「うん、南の遺跡？ から出て来た人なら稼ぎになる物持つてるつて言つてた！」

「私が？ そんな事言つたかな。……まあ儀式跡地からは、確かに強力な麻酔薬や、興奮剤が作れる素材が手に入るから、医者なら重宝するかもね」

確かに、ミシェルはデュライがお金になる物を持つてると教えられたんだつたつけ。ミシェルがデュライのクエストアイテムを狙つていたのは、ここでそういう話を聞いた事による行動だつた。だとすると、レー『デと謎の人物、謎の人物とミシェルという繋がりが消えてしまつ。

「ところで、湿布が入用だつたかな？ 今は急いでいるので診察は困るのだが……」

「あ、いえ。すみません。勘違いだつたみたいです」

言つて、そそくさと退散する。

（先程の話だが、何処かでその様な話を耳にしたので、薬剤の素材が高額で売れるやもと、儂がミシェルに進言したかと存じる）

パンサークロード姿を見せて、そう言つ。

待てよ、つまりこれつてもしかして、完全に見当違ひだったんじやないか？

レーデは一体何処に向かつたんだろう？ とりあえず、レーデとデュライの事を整理してみよう。

とはいっても、レーデがそんな不正をしていたなんて全く知らなかつたし。レーデとはよく一緒に飲んだり、互いの家で遊んだりしているけど、それ以外でしかも偶発的に知り合つたという相手に辿り着くなんて、はつきり言つて不可能だ。

じゃあ、デュライの視点から考えてみよう。

まず、デュライが自分の情報を流してゐる人間がギルド職員だと至つた理由は簡単だ。それ以外に無いから。じゃあ、僕とレーデがあの場に居合わせたのに、僕ではなくレーデだと確信した理由はなんだろう？

レーデとデュライの間に、接点があつたかどうかは僕には分からぬ。逆に、僕とデュライはキューク修理の開始の日に一緒に行動したという接点がある。その時、ミシェルに質問をしたのは僕だつたし、デュライに対して協力的だつたから、僕を選択肢から除外したと考えるのが自然だらうか。

そういうえば、ミシェルへの質問でデュライを狙つていたという回答を得た事で、デュライがその事に探りを入れた結果。レーデが連れて行かれ危険に遭つてゐるのだとしたら、完全に僕のせいじやないか？

さつきの事で、ミシェルがデュライを狙つていた理由がほとんど偶然と判明した以上。レーデはミシェルの件では関与していないのだから。今レーデとデュライが向かつてゐる先の相手は、デュライと

は関係が無いかも知れないけど、デュライに襲われるかも知れない。レー^デもそれに巻き込まれるかも。何にせよ止めないと！……でも一体何処へ行けば？

結局、思考は同じ所へ辿り着く。

こうなつたら、とにかく探し回るしかない。ヒントはレー^デの言った奴は依頼人じゃないという言葉。逆を言えば依頼人以外の全員が容疑者。はつきり言つて、果てしない作業になる事受けあいだ。もつとヒントを出してくれればと思う。でも、僕やミシェルが首を突つ込まれないようにそうしたと取れなくも無い。歯痒さだけが残る。行き先を推測するのを止めて、物理的な考え方で絞込む事にした。あの時、角を曲がつて見えなくなつたという高い方の可能性に賭けて、リザリア東側の街をパカパカで己の字のように疾走する。何かがあれば人だかりが出来ると考えて、可能な限り広範囲を捜索する。

僕の借り家前を通りの道で、見覚えのある人物がちょうど家の前に佇んでいる様が見えた。近寄つて行けば、次第にはつきりとそれが探している人物である事がわかつた。

「レー^デ！」

「……リキット。……ミシェルは？」

パカパカを降りる。ミシェルはずつと馬首に纏わり付いている

「うん、大丈夫みたい……レー^デの方こそ」

「俺は大丈夫だ。ただ案内しただけだ」

「……その人は襲われなかつたの？」

「ああ、彼の探していた人物ではなかつたらしい」

「そつか、みんな無事で良かつた」

「どこまで心配してんの前は。……巻き込んで、本当に悪

かつた」

「いいんだ。そんなことより、ミシェルがカレーを楽しみにしてるんだ。一緒に食べよう」

「……ああ、そうだな。ありがとう。」

僕の笑顔はレー・デに少しでも安心を『えられただろうか。言葉は不安を取り除けただろうか。わからない。』

家灯りが道をぼうつと照らす中、ミシェルを呼べば、パカパカも彼女の後ろからついて来る。

お腹の空いた男2人でああだこうだと、ミシェルにカレーの作り方を伝授する。具が僕とレー・デの好みの違いで、ちぐはぐな大きさになつたり、炒めるのか煮込むのかでミシェルを困惑させたり、カレー粉の量や隠し味なんかでも言い合つた。けどそれが今日は特別楽しかつた。

そうして出来上がつたカレーは、間違いなく僕達の渾身の一品だつたが、味見などしていなかつた。だから、ミシェルがそれを口に運ぶ様を僕達は固唾を呑んで見守つていた。

「んー！ カレーうまい！」

その言葉を聞いた僕達は、笑みを交わし、拳を突き合させた。

レー・デは特に何も言わなかつたし、僕も何も聞かなかつた。いつでも会えるのだから、落ち着いた時にでも事情を話してくれればそれでいいと思つた。ただ、一つだけ約束をして欲しくて切り出した。「レー・デ、僕は頼り甲斐がないかもしれない。でも、頼つてきて欲しいんだ。……親友だと思つてるから」

「……ああ」

「一つ、一つだけ。……私欲のために誰かを貶めるような事はしないつて、約束して欲しい」

「……わかつた、約束する。……お前と、ミシェルに誓おう」

レー・デは真つ直ぐに僕を見ていた。そして、今後ソルバーの情報を売つたりしないと、ここに誓いを立てた。

朝早い家の灯りがぼつりぼつり消え始めた頃、レー・デは大きく手を振つて帰つていつた。最後に見せた笑顔が、大丈夫だと伝えてい

たのだと僕は思った。このまま眠つてもいいくらいには夜が更けていけど、頭の中がもやもやしている。パンサーの話を聴かない事には、納得がいかなかつた。

レーデを見送つてそんな風に考えていたのは、扉を閉めようとす
るまでだつた。家のドアを閉めようとしても、何かにぶつかつて閉
じ切らないのだ。

「よお？」

扉と玄関の間に足を挟んでいた人物が声を掛ける。

「……デュライ」

来た理由はおおよそ察していたが、このタイミングで現れるとい
う事は、事前に僕の家を知つていたか、レーデが帰るのを待つてい
たかだ。事を荒立てるようなことをせずに、こうして底知れぬ恐怖
を与えてくる。けれど、ミシェルとデュライを会わせたくない僕に
とっては、ここで誤解を解いて終わらせられるのは好都合だつた。
「来た理由はわかつてゐる。ミシェルが言つてた、君を狙つたつて話
でしょ？」

「俺は締め上げてやつても構わんが……ガキから直接聞くのは無理
そなんでな」

上位のハンターというのはこついう人種ばかりなのだろうか。だ
としたら好きになれそうに無い。考えてみれば厄介事の種はみなデ
ュライだつた。それでも、これで終わりだと思えば、我慢も出来る
というもの。

「あれは誤解だよ。……薬の素材が高値で取引出来ると聞いたミシ
エル……カラスが、儀式場跡から出て来た君を、君の持ち物を狙つ
ただけ。……彼女はもう、盗みはしないし」

「……そうか」

少し残念そうに答える。

「ところでお前、浮浪児を愛玩する趣味でもあるのか？」

僕はデュライを強く睨み付けるが、彼は臆する事無く続ける。

「浮浪児つてのは、成り行きや不幸でそうなつてるんじゃない。」

なるべくしてなつてゐるんだ。浮浪者には浮浪者たる理由があるんだよ。……愛着なんて寄せてると足元掬われるぞ?」

「デュライ! それ以上の侮辱は許さないぞ!」

「純然たる事実ってヤツだ。……それに侮辱とは何だ。お前も浮浪

児だったのか? とてもそうは見えないが?」

そこへ異変に気付いたミシェルがやってくると、すぐにデュライを見つけて敵を見る目に変わり、右手にパンサークローが現れる。怒鳴つたのがまずかつたか。

一方、デュライは玄関の外で壁を背にしたまま、ミシェルの様子を伺つてゐるだけだった。

「よお、ガキ。また凝りずに負けてみるか?」

「何しに來た!」

「……言つておくが、お前の敗因は予測や戦術がどうのつて事じやない。もっと根本的な力、速度、体格の差だ。……今のお前じや、俺の剣を防ぐことしか選択肢がない。……避ける事も、止めきる事も出来ない」

言つて壁から距離を取る。剣を抜くのかと思ひきやそのまま遠ざかつしていくデュライ。

「せつかく面白い武器を持つてゐるんだ、余す事無く生かす事を考えるんだな……」

「どこへ行く!」

「……もう一度と会う事も無いだる」

赤髪の少年は振り返ることも無くそう言った。僕たちは彼を見送るでなく、その姿が見えなくなるまで見ていた。彼の姿を照らしていた家の灯りが消えたのと、視界から彼の姿が消えたのは同じ瞬間だった。

(パンサークロー、話がある)

(宜しい)

(二人きりで話せない?)

(構わぬが、今日はミシェルの精神疲労も激しい。明日でとは叶わぬか？ お主が魔力を供給すると言つならば別であるが)

精靈に魔力を供給するというのは分かる。ミシェルの精神疲労が関係していると、いうのはどうこうことだらうか。そもそも、二人きりで話そつと思つていので、ミシェルは関係ないと思つていた。けど僕の考え方と事情が違うのかもしない。ともかく、話をしたかつたので、魔力を供給すると承諾する。

しばらくするとミシェルがパンサークローを外して僕に渡してくれる。それを手にした途端、眩暈を覚え、吐き気を催す。余裕無くトイレへ駆け込む。

(なにこれ……気持ち悪い)

(儂に魔力を供給する事で、精神的な負荷が掛かつてある……魔力とは精神から捻出する物だ。魔力を供給する事は、即ち精神力を与えるも同じ)

(ミシェルはいつもこんな感じなの？)

(お主は精神力も薄弱であるが、他にも相性が悪いと存する。……)

対話は出来ぬが儂の存在を消せば、精神力の消費を抑える事は可能(大丈夫、魔力つてマナの事ばかりだと思つてたけど、実際には違うんだね)

(マナとは魔気の総称、魔力とは人間や精靈の精神を媒介とした純度の高い魔気の事である。従つて間違いでは無い)

(この会話をミシェルが話を聞くことは？)

(そつだの、お主からの念であれば伝わる事はない。儂の方からの問い合わせであれば、儂の念次第で一方だけ或いは、両方と話すことが出来る。無論、一定距離内である必要はあるが……一時、慎もう)

(じゃあ、まず君の事を聞かせて欲しい)

(身の上は話せぬ、容赦願いたい。そつだの……)

身の上話以外、自分自身、パンサークローの特徴について話をしてくれた。仮名パンサークローは闇属性の精靈で、姿ではなく、存在の有無を切り替える事が出来るのだと言つ。存在を消している

状態の方が安定でき魔力の供給をほとんど受けずに居られるらしいが、念話などのあらゆる行為が出来なくなるとの事。

（ありがとう。……じゃあ、ミシェルとデュライが戦つた時の詳しい話、だけど）

（先程も言つたが、儂は存在の有無を自在に操れる。契約主の周囲であれば、瞬時の移動も可能。ただそれはミシェルの魔力消費が激しい故、それ以上に危険な時以外には行わない）

つまり、ミシェルが壁にぶつかる前に、ふさふさの手袋部分をクツショーンにしたということだろうか。

（カラスと名付けたのは……？）

（儂の失敗である。ある時、まるでカラスの様だと申した。それ以後、カラスと名乗る様になってしまったのだ）

（じゃあ、パンサーもミシェルの本名は知らないってこと？）

（残念ながらその通りだ。従つてお主がミシェルといつ名を付けてくれた事には、非常に感謝しておる）

気持ち悪さが先立つてあまり聞けなかつたけど、ミシェルの精神力が強くなつてきた事によつて、具現化して戦闘や長い会話を出来るようになったのが割と最近らしいという事で、それ以前はここぞという時くらいしか具現化していなかつたという事を教えてくれた。つまり、ミシェルがコミュニケーションを取る姿勢が薄いのもおそらくその所為と考えられた。

（くつ……最後に、僕が君と通じたつて事は仮契約をしたつてどつていいのかな？）

（異なる。お主にも儂にも契約に至るほどの大した利点及び欠点は生まれぬ。ミシェルの事を通じてお主を信じ、会話を望んだという程度。通じたという言葉が合う。仮に、契約に至つたとして、お主は闇属性の精霊と相性が悪い故、儂を存分には使えぬよ）

（えつと、ミシェルの方が僕より子供なのに？……うつぶ）

（勘違いしないで貰いたい。心と精神力とは異なる。精神力は体力と似ておる、力の依存する部分が異なるが、心の持ち様で調子に差

があるという共通点がある。……力の枯渇が死に至るというのも共通点であろう（ぐうつ……もう限界だ）

（では戻るとしよう、この様な対話も偶には良いものだ）

手に持つた爪型武器が消えていった。

それほど時間は経っていないはずなのに、僕は疲労困憊といつて差し支えないほど、疲れてしまった。魔力を供給する事がこんなに大変なことは思わなかつた。

トイレで用を一つ済ませ扉を開けると、そこにはミシェルがいた。

「大丈夫か、リキット？」

「ちょっと疲れちゃつたけど、大丈夫だよ」

「ん」

「僕はもう休むよ。……ミシェル、一人で着替えて寝られるね？」

「おう！」

弱つているのを隠すよう意識して、自分の部屋へと力強く歩く。部屋に入ると足取りも覚束ず、そのままベッドに倒れこむ様に身を投げ出した。ベッドの柔らかい肌心地を感じ、意識が遠くなつていった。

第五日 紳士と淑女？（約7000字）

熱いものが胃を刺激している。まるで胃を自身が消化しようとしているように、息苦しい。たまに、ズキズキと頭痛がする。パンサーに魔力を供給した影響か、体調が良いとは言えない。けれど意識ははつきりしていて風邪のような病気とは違つ。

眩しい太陽の光を見て目を細めた。僕を心配してくれたのだろう、隣で眠つてゐるミシールの頬を一撫でする。

「……ん

「……おはよひ、ミシール

「ん～～～、おはよー」

すつと立ち上がって、ベッドの上から飛び降りる。ミシールは今日も元気だ。ミシールに負けるもんかと、勢い良く立ち上がった僕の腰がコキコキと軽やかな音を奏でる。少し年老いた気分になる。あつという間に着替えて来たミシールに催促される様に見られながら、僕も着替える始める。今日のミシールの服装は、茶と黒のスマートなワンピースと、白い丈の短いパンツを穿いている。きっとミシールにとってスカートというのが感覚的に無いのだひつ。僕としてもスカートを無理に着させようとは思わない。

「よし、行くぞ」

「パーン！ パーン！」

嬉々として付いて来るミシールを見ていると、パンサークローの事を忘れてしまいそうだ。凶器に宿つた精靈と契約している子供。ただそういう言い方をしてしまうと、関わり合いに成りたくない思いが先立ってしまうのではないだろうか。少なくとも、今後ろから追つて来る子供は放つて置けないと思われる、か弱い少女にしか見えない。

「ミシールちゃん、いらっしゃい

「パン、うま、美味しかった！……です！」

そう言つ様に先に教えておいたのだけど、想像以上の無理があつたようだ。

「そうかい、今日は何にしようか？ おばちゃん、サービスしちゃうよ」

「僕にはサービスしてくれないのに？」

「そりや当たり前だろ？」

はははと笑い声が交じり合つ。息をするほど焼き立てパンの香りが鼻をくすぐる。

「ミシェル、好きなの四つ選んでいいぞ？」

「わかった！」

時間が掛かるかと思いきや直ぐに大きい物から順に四個選んだミシェルに、僕は一瞬言葉を失つた。

「沢山食べたいのは分かるけど、今朝食べる分だけだよ？ ……」レだつたら、今日は一つだけになっちゃうぞ？」

「んつと、選び直す」

一つでも朝食だけではとても食べれないパンを指差して諭してやれば、ミシェルは残念そうに答えて、陳列されたパンの一つ一つを見比べている。それほど大きくも無いパン屋の客は多く、オバサンは忙しそうに対話をしながらお客様を捌いていく。僕は手持ち無沙汰にミシェルに付き添つていた。

結局、朝食のメニューはメープルデニッシュ、たまごパン、パインパイ、アップルパイの四つだ。昨日買ったアップルパイがあるのは、僕にとってのクロワッサン的な位置付けなのだろうか。僕はどうしてもクロワッサンともう一点という買い方をしてしまうのだ。

パンを買うと何処から持つてきたのか、店主が飴玉をいくつかミシェルに分け与えた。店内にはまだパン屋のお客さん達が小さな列を作つていたので、紙袋を受け取つた僕はそそくさと喫茶店へ向かう。

喫茶店の店内は相も変わらず、蠅燭の火がゆらゆらと揺れていって、特別ゆっくり時が進んでいる気にはせぬ。

「いらっしゃい」

「薄めの紅茶とお勧めのジュースを」

一昨日前と同じやり取りも、何故だか誇らしく感じる。空いた席に座りながら、人も疎らな店内に、一際目に付く存在がある。金色の鎧を申し訳程度に付けた、筋肉の塊の様にがつしりした肉付きの大男。その対面に座る、白い軍服のような制服を着こなす、清潔で感じの良さそうな少年。風貌から冒険者の印象な二人組みを見つけた。

大男は短めの黒髪を後ろで縛つて、こんがりと日に焼けた褐色の身体つきは筋骨隆々を表現している。顔は筋肉で固まっておらず柔らかい表情も出来そうだ。少年はさらさらと柔らかそうな巻き気味の短い金髪で、表情も柔らかい、筋肉の大男と一緒に居る為か華奢な体躯に見える。

間も無く、二人組みは席を立ち、店の出入口へ向かう途中、僕と視線が合つと大男が徐にこちらへ向き直り、真つ直ぐ僕を目指して歩いてくる。

「よおアンタ、この街のギルドの人か？」

ギルドの制服を着ているから声を掛けてきたらしい。

「はい、リザリア東ギルド職員です」

「ちょうど良かつたぜ。さっき近くのギルドに休業の張り紙がしてあつたんで、どうしようかと思つてた所なんだ」

「すみません、キュークの故障で他のギルドに回つて頂くしか……」

「それだ！他のギルドの場所を知らないんだが？」

「そうですね。……中央ギルドが近いんですが場所が複雑で、……遠くなりますが、大通り沿いにある西ギルドへ向かうのをお勧めします」

「そうか、ありがとさん！」

明るく景気の良い野太い声で礼を言つて出て行く大男。こちらで

ぺこりとお辞儀をして、付いて行く金髪の少年。

「いまの誰？」

珍しく尋ねてくるミシェル。

「さあ？ 初対面だったからね。格好からして、多分ハンターじゃないかな」

「ふーん……」

自分から聞いてきた割に興味無さそうに応えて、紙袋を広げ飲み物の到着を今か今かと待ちかねている。そんなミシェルに、マスターが口を開くこと無く待望のそれを置いていく。今日のジュースは爽やかなオレンジの香るジュースだった。

「リキッド、半分こにして！」

パンを手で千切るもそろそろ上手くはいかず、大小様々なパンの形態が出来上がる。大きい方をミシェルが更に千切つて綺麗に半分にしようとするが、当然包丁で切る様にはならない。形の残つての方をミシェルに渡して、無残に散つたパンの欠片を頬張る。

「……いただきますは？」

少し尖つた口調には、母親のようだった。

「はい、頂きます」

「いただきまーす」

ミシェルと過ごしているとハツとさせられる事が時々ある。しつかりしなくちゃと思う裏で、僕が親になつたらこんな感じになるのだろうかと考えたりする。だとしたら、頼りない父親かな、なんて。つて、一〇歳位しか違わないのだから兄妹が正しいのだけど。

たまごパンを口にすると玉子の香りが広がり、ふんわりした食感がたまらない。噛めば噛むほど、しつこくない甘さと、しつかりとした焼きたてパンの風味が口一杯に広がる。ミシェルが居なければ買わなかつただろうたまごパンに、クロワッサンに変わる趣向の新境地をみた。しかし、ミシェルの評価は次の通りだった。

第一位アップルパイ、第一位メープルデニッシュ、第三位パインパイ、第四位たまごパン、第五位オレンジジュース。つくづく味覚

は合いそうに無いけど、オレンジジュースより紅茶の方が良かつたと言つてくれたのは嬉しかつた。ただ、砂糖をもっと増やせば、負けると直感した事は内緒にしようと思つ。

パカパカの背に乗つて出勤するのもまだ一度目なのに、随分からそうしていいる気には、昨日長い間、騎乗していただけだ。手慣れた仕草でパカパカを厩舎に置いてギルドへ向かう。

西ギルドの中にはネストとマルガが二人組みの冒険者風の男達と話をしていた。つい先程喫茶店で会つた大男と少年だつた。

「おはようございます！」

「おはよー」

ギルド職員の二人はこちらを一瞥して話を続けていたが、大男だけはこちらを振り返ると大きな声を立てた。

「アンタはさつきの！ 助かつたぜ、兄ちゃん！」

「どうも」

一礼だけして奥のカウンターへと足を進めると、やはり目を輝かせてマルガが話の隙間を縫つて話しかけてくる。

「お知り合いなんですか？」

「今朝、ギルドの場所を教えただけだよ

「なんだく、詰まんないです」

「そうだろうけど、ハツキリと口にするのはどうかと思うよ。

「それではこれで、ハンター登録は完了です。こちらがハンターライセンスです。使い方は先程言つた通り。もし失くしてしまつた場合、一〇〇オレンで再発行出来ますが、失くさない様に願います」

「はい、ありがとうございます」

ネストは金髪の少年にハンターライセンスを渡す。見比べて初めて分かることだけど、大男と同じ、大柄で肌の焼けた筋肉質なネストも、大男と比較すると小さく感じる。と言つても僕と比較すれば十分大きい。

ギルドのライセンスは拳大の横に太く赤いラインが入つた銀製力

ードだ。系統毎に塗装されたラインの色が違い、ハンター系統のライセンスは赤色。銀製あるのは、流通している金属の中でも一番マナを帶び易いのが銀だから。マナを帶びさせて置く理由は、当然キュークに情報を読み込ませるため、もつとも登録者の番号くらいしか情報として含ませて置けないわけだけだ。

「んつじや、引き続きよろしく頼むぜ。……俺は野暮用の方を済ませてくらあ」

「はい、いつてらつしゃい」

少年を残し大男は大量の筋肉に似合つた大型のハルバートを担いで、その場を後にした。

「それでは～、Cランクハンター認定試験ですけど。……まず筆記試験、キュークによる面接を今日中に済ませ、その結果をもつて推奨クラスモンスターの所へ明日以降に行く。つて感じでいいですか～？」

「ええ、はい。大丈夫です」

「ではでは、こちらへ～。さくつと筆記終わらせちゃつてください」マルガの対応は非常に気さくで、人によつては反感を買ひそうだつた。けれど少年は物腰が低く、笑顔で受け應えていたので対応については何も言わなきことにした。それより、疑問に感じた事はそこではなくて。

「Cランクハンター試験つて？」

「ああ、Bランクハンターの推薦があるから特別試験つて事だな」ネストさんに耳打ちをして尋ねる。

そう、Cランク以上のハンター試験は開催日時と場所が決まつてゐる。本来それ以外で試験をする事が無い、Bランク以上のハンターの推薦無しには。恐らくさつき出て行つた大男がネストさんの言つ推奨したBランクハンターなのだらう。あの筋肉量であれば納得がいく。

「そーなんですよ、なのでリキットさん。不束者ですが、よろしくお願ひしますね！」

いつの間にか戻ってきたマルガの言葉は意味不明だった。

「はい？」

「あー、試験官なんだが……リキット、お前さんとマルガでやつて
もううつ事にした。つていう意味だ」

頭痛に悩まされている様に片手を額に当てるネストさん。

「ええーーー！ 僕、試験官なんてやつたこと無いですよ！」

「誰でも最初はー、初・体・験なんですね」

もつともな事を厭らしく言う、口に人差し指を添えた、赤縁眼鏡のマルガ。この人と一緒というのが特に不安だ。

昨日はミシェルに付きつ切りで感じなかつたけど、このマルガレットという妙齢の女性は、赤縁眼鏡とそばかすに隠れているが結構美人だ。ギルド制服のローブ越しには伝わり難いが、出でいる所はしっかりと出でいて、スタイルも良いと思う。髪を二つに分けて束ねているが、その水色の髪束は細く、彼女の感情の起伏で飛び跳ねそうだ。何よりその触覚の様に伸びた髪が踊る度、花の香りが鼻腔を揺るのだ。

「まあ、試験官は2人必要だ。転任してきたばかりのお前さんを一人残す事は出来んし。マルガはこう見えて、本場の試験官をしていた経験もある。……それに、俺とあの少年の名前が似てて面倒なんだよ」

「そうですよお、だから二人手に手を取つて、そのままゴールインなんですよ！」

完全にマルガに遊ばれているのは放つて置く。資料を見れば確かにその名前の欄には、ネスティと書かれていた。似てるつていうか、気を配つていなければ、言い間違えと聞き間違えの多重事故しか起きない気がする。

「なるほど。……ところでマルガさんって試験官だつたんですね？」「ですです。……えつと、そうやつて私の過去を調べ上げて、私の事を裸にしていくつもりなんですね……リキットさんのエッチ」

「違います！」

このくだりをどうして欲しいんだこの人は。僕では到底処理できない難件ですよ。ヘルプミー。困り果て周囲を見回すと、いつの間にか掃除を始めていたミシェルが視界に入る。淡々と掃除をこなすミシェルを見ていると自分も仕事をしなくちゃという気になる。

「よし！ やりましょう！」

「もうリキッドさんつたら大胆なんだから……」

両手を頬に当て照れるような仕草を見せるマルガ。ミシェルに気を取られていた間に、何かを言っていたようで、それを弁解するのいやたら時間を使うことになった。

「あ、あの。これでいいでしょうか？」

少年がおずおずと、埋め戻された解答用紙を持ってくる。

「あ、じゃあ次はこっちを解いてください。……これは僕が採点します！」

ハンター試験の筆記問題はあらゆる部門の問題が出題されている。各ギルド系統の中級問題は勿論、計算問題、モンスター知識問題、地理学、歴史、宗教……とにかくあらゆる種類の問題が出される。現実的には有利得ないが、それが仮に〇点だったとしても、失格となるわけでない。この後に行われる面接の方が重要で、ちょっとした交渉術が問われる。そして筆記、面接、実績を考慮して、退治するモンスタークラスが決まり、その等級のモンスターを倒せば、晴れて〇ランクハンターになる。という訳で、人手が色々と必要とされる上、実績の無いFランクからも〇ランクになれるというのもあって、志願者も多い事から恒例開催型の試験となっている。

昼食を交代して取る様にしていて、最後は僕とミシェルの番。外に出ても食べたい物がなくふらふらと街を歩く。

「そういえば精霊つて何を食べるのかな？」

「パンサー？ ……ん~、何も食べない」

「そつか、魔力つて美味しいのかな？」

「わかんない」

右手を顔の前へ置き、目を瞑るミシェル。

「パンサーは出さなくつていいからねー。」

「ん」

「ミシェルは……」

ミシェルは何を食べたいかと聞いたら、きっとパンと答えるだろうと思つて止めた。思えば、パン、肉野菜炒め、コンソメスープ、スペゲティ、カレーしか食べさせて無いんだよね。

「ミシェルが食べ物屋さん選んで。ただし、パン屋とカレー屋はダメ！」

「うん。……ん～～～？」

雑貨店の中を必死に覗こうとするミシェル。飲食店の看板にはフォークやナイフ、スプーンの絵柄や造形があるとヒントを出すと、直ぐフォークとナイフの描かれた店を見つけ指差す。そこは肉屋に隣接したハンバーグ専門店だった。店内は子供連れの客が多く居たが、僕にもミシェルにも好評で値段も安く、いい店を見つけたと思わせるに十分だった。

ただ一つ、やたらぶらついた所為もあって、ギルドから大分離れた位置にあるという難点があった。

「もお、リキッドさん何やつてたんですか？　面接始まっちゃいましたよ、早く採点手伝つて下さいー！」

マルガの非難を浴びながら、すじすじと採点を手伝つ。

この短時間で膨大な出題範囲を誇るハンター試験の解答用紙を埋め尽くすというのは、点数はまだわからないが、かなりの博学の持ち主なのだろう。当の本人は今、魔法通信で面接官と話している。

一方、やる事の無くなつたミシェルは、ネストさんに昼休憩中に買った絵本の読み聞かせをして貰つてはいる。文字が読めなければ、何屋かも分からぬ様な店も少なくはない。今後、ハンターになつても文字が読めないとキュークの操作も危うい。文字の書きは出来なくとも、せめて読めるようになる必要があるのだ。

しばらくして、別室から出て来た少年は深い一礼とともに。

「面接終わりました。ありがとうございました」

「お疲れ様です！……筆記、面接、と実績。といつても、産まれ立てホカホカのハンターなんで無いんですけど。が加味され倒すべきモンスタークラスが決まりますのでえ……採点もまだ終わつて無いので、また明日以降に来てくださいね～」

「はい、ではまた明日お願ひします」

礼儀正しくまた一礼するとゆつくりと出口に向かう。細身の剣を腰にしていた、以前に会った同じ年位の赤髪の少年をふと思わせるが、彼と違い、既に僕の中での金髪の少年の位置付けは紳士になつていた。僕も席を立つて一礼して見送る。

「リキットさんがそんなんじゃ、これからは私達の夫婦生活が心配になっちゃいます～」

仲裁してくれるネストさんや、一蹴するミシェルが絵本の読み聞かせになつてしまつた。

「それにしても……凄い」

解答用紙を埋め尽くしていた時点では博学とは思つたけど。実際の正解数は六割に及び、正答と呼べないまでの回答にもある程度の考察が書かれていた。これがどれ程凄い事かを正しく解説するには数時間掛かるのでしない。けど全受験者の平均正解率が一割強、合格者の平均正解率が五割弱なのだ。

「ですね～……」

「採点報告上げたら、一緒に飲みに行かないか？」

感嘆の声を上げる僕達に、ネストが空気のグラスに口を付け吞んで合図する。

「でも、ミシェルが……」

「ミシェルちゃんも満足な、美味しい料理のお店知つてま～す！」

マジです！ そう言う彼女の熱意と剣幕に押されて、行った店は本当に料理の美味しい酒場。ではなく、各種アルコール飲料が置かれた庶民的なレストランだつた。

ネストさんは飲みに誘つた張本人だつたけど、それほど飲まず、食べてばかりいた。反面、顔も真っ赤にしながら声高らかに笑うマルガは、既にワインを一本空けていたが、止まる気配を一向に感じなかつた。ミシェルはネストの横に座り、色々な種類の料理を分け与えられていた。僕はと言えば、完全にマルガの話し相手にさせられ、細々と飲み食いした。それでも数時間も長居すれば相当な量飲める訳で、特にマルガの酒豪ぶりには驚かせられた。

帰る頃には酔いも回つていて、パカパカの背から何度も落ちそうになつた。ミシェルも眠そうにパカパカの首を抱き枕にしている様にしがみ付いていた。

酔つて風呂に入つても良い事は何も無い。風呂に浸かりながら眠つて、死にそうになつたのを憶えている。そんな僕は、ミシェルを伴つてさつとシャワーを済ませ、着替えてベッドに潜り込んだ。今日はマルガに振り回されたような、そんな一日だつたと振り返る間も無く、意識は地の底へ落ちていく。

第六日 夢見る者と職務怠慢？（約700字）

夢……寝て見る夢。

白い肌の女性に抱かれるレー^デ、その女性は炎を纏い燃えている。焦げる様な匂いも、火の明かりも、帶びる熱気も感じない。ただ、白い肌の女性が炎に曝されてレー^デを抱いている。そんな夢の一瞬、映像。

そして腹部を襲う強烈な打撃。声に成らない声で悲鳴を上げると、頭を浮かせてお腹を見る。子供の腕が弧を描くように腹部に掛かっている。その腕の持ち主は足の裏をこちらに向けてぐっすりと眠り込んでいる。どうやら、ミシェルの寝返りで肘打ちを貰った様だ。

昨日は……あれ、昨日の夜はどうしたんだっけ。ミシェルは自分の部屋で寝かせなかつたか。全然憶えてない。変な夢も見てしまつたし、打たれた腹部も痛む。腹癒せにミシェルを撲つて起こせと悪魔の囁きが聞こえた気がした。僕は悦んで受け入れ、口元をにんまりと歪ませる。

「……やはあひやはういはは、あはやひはせー。」

ミシェルは笑いながら、くねくねごろごろと転げ回る。しばらく揺り続けて、想像以上の威力を誇った「ゴールドフインガー」に敬意を払つて窓から射す陽光に向かつて手を広げる。ナイス、僕の手。気分が一気に晴れしていく。

「おつはようー。ミシェル」

「ん~！」

ミシェルは当然ご機嫌斜めである。口を膨らませ、非難の視線を僕に浴びせていたかと思えば、軽い体当たりと共に小さな手の平を僕の脇にぴたりと付ける。その後の僕の顛末はもう。情けなくて語りたくも無い。ただ、そんなやり取りが面白かったのは確かだつた。

いつもの様に朝食も済ませ、ミシェルを連れて西ギルドへ到着す

る。ミシールの服装は一昨日前と同じ、お気に入りの白カツターシヤツと黒のゴシックパンツだ。そんなに替えが何着もある訳じゃないからいいんだけどね。

扉を開いても、ドアベルに反応したのはネストさんだけだった。マルガはと言えば、奥にあるテーブルに突っ伏していた。瞳はこちらを捉えてはいるがどこか虚ろで、片手を枕に、もう片手で頭を押さえ、時折り胃から何かを吐き出そうとしている。一日酔い……それも重症だ。

「あの、彼女お酒強いんじゃ？」

「それ程じゃないみたいだな。俺がからつきしダメなもんで、お前さんがいてつい酒が進んだんだろ。……あそこまで飲んだのは初めて見たし……な」

そう言つて一人でマルガの方を見やると、マルガが何かを喋つているようだつた。近付いてようやく微かに聞こえる声。

「……トさん……ずっと……看病……下さいね」

これに口の動きと想像を合わせて考へると、リキットさん今日はずっと私の事を看病していて下さいね。となる。と言つが、どうしてこの状態で出勤して来たのだろうかこの人は……。考へても仕方ない、とりあえず、グラス一杯の水を汲んで来る。

「……飲ませて」

「マルガ、甘えるんじゃない。一日酔いは病氣や怪我じゃないんだから、リキットも放つて置け。それより、仕事だ。……よく分からんのだが、お前さんが配達をするようになつて荷物を中央ギルドから預かつてるんだが？」

掌に収まるほど小さな箱をカウンターの引き出しから取り出すネスト。マルガは霸氣なくぶう垂れていた。

箱を開けると、鳩や鶯など様々な鳥の形を模した立体的な装飾の付いたクリップが、やんわりとした寝床で寛いでいた。それに覚えのあつた僕はすぐに届け先を理解した。技巧士クラフトマンエストをよく依頼する僕の遠い親戚の屋敷までの道程といつもの世間話の時間などを

考えると、どうしても昼を余裕で過ぎてしまう。

ミシェルを連れて行くには、少し不安がある。何より、まず何と紹介すれば良いか分からない。借りている貴方の家に泊めている素性不明の子供です、なんて言える訳が無い。かといって、マルガが倒れ伏していて、ネスト一人で切り盛りしている状態のギルドにミシェルを残していくのも、気が引ける。一人でやつて暇だ暇だと言えるけど、一人だと大変になる瞬間が稀にある。しかも、東ギルドが使えない所為で西ギルドへの出入りは単純に倍増していた。

マルガが働ければミシェルを置いて行けるのにと思うが、彼女は足元も定まらずふらふらと奥の部屋へ入つていくではないか。どうやら限界を迎えたらしい。

元々、ミシェルを連れ回すのには無理があった。レー・デも、マルガも、ネストさんも、みないい人だつたから、ミシェルを置いて来いなどとは言われず、受け入れられただけなのだ。ならばいつその事これを良い機会だと考えて、ミシェルに家の事を任せるというのも有りだろう。掃除に関しては随分成長した事だし。暇つぶしの道具も幾つかがあるので、何とかなると思う。勿論、付き添つて文字や計算の勉強なんかをした方が今後の為になるのは分かり切つている事だけだ。

「それでは、いってきます」

「いってきまーす」

「いってらっしゃい。しつかり機嫌取つてこいよ」

箱を受け取り、クエスト品を配達する経緯とそれに時間が掛かる事だけ話して、ミシェルを連れて一先ず我が家を目指す。

戻る途中に買った、牛一枚肉にパン粉を付けて油で焼き上げたコトレッタとロールパンを昼食用にと食卓に置いて、家の掃除をする様に言つた。ミシェルは好奇心と呼ぶ物には恵まれていない様に感じるけど。その分、落ち着いた行動を取る。今では出会った当初から持つていた不安感は小さくなつていた。

「じゃあ、行つて来るね。……お留守番クエストよろしくね
「……いつてらっしゃい」

浮かない顔をするミシェルに、ふわりと優しく、それでいてハッキリした意思を込めて、大丈夫すぐに戻つてくるから。と言葉を掛けた。

見えなくなるまで手を振つてくれているミシェルに、馬乗り後ろ向きになりつつ手を振り返すのだった。

時刻も昼を迎えるとしていた。例の依頼人が会食などを予定しているならば、クエスト品を渡してそれまで、という事もあつたろう。しかし、僕は座つてその御仁と食卓を囲んでいた。

食後、全ての皿を下げるグラスだけが立つ食卓。それまで談笑を絶やさなかつた権柄を持つ依頼人は、少し間を置き、険しい顔をする。それはこの人物が血筋や口八丁だけで今いる階位に座しているのではないと思わせる威厳、淒味を感じさせた。

「……リキット君、最近ギルドで変わつた事は無かつたかね？」

「え、ええ……キュークが故障しましたけど」

「そうかね」

暫く品定めをする様な強い視線を受け、渋い顔のままの依頼人が再び口を開く。

「内々の話なのだが……近くリザリアにギルド直属の聴問委員が訪れるそうだ」

「あの……聴問委員会が一体何をしに？」

聴問委員会とは、ギルド発足当初にクエスト成否に係わる制度が出来る以前、その裁決を担つていた内部の外的部門で、その後、不正を取り締まる査問委員会との統合後も外的機関の役割を一手に担う組織の事だ。

「理由までは明かさず、義を通すためだけの知らせだつた……君に話すか今の今まで迷つていたのだがね」

「何故、僕にこの話を？」

「……恩を売られたと、受け止めてくれたまえ。仮にこの話が何かの役に立つたのなら、リキット君が出世した時にでも何か返して貰おうと思つたのだよ。私は欲深いのでね」

一度目を閉じ開ければ、いつもの人の良い依頼人の笑顔が戻つていた。

「ところで、今回のこの鳥模型クリップなのだが……」

そうして、装飾細部に至るこだわりを聞かされる恒例の儀式が始まる。

リザリアの中心から北寄りに位置する邸宅地を後にした僕は、程近くにある中央ギルドに寄る事にした。聴聞委員の来訪がソルバー情報の漏洩によるものだと見当をつけたからだ。

「東ギルドから転属のレーーデ？……病氣だとかでここには一度も来て無いな」

中央ギルド、過日見知った顔の職員の言葉で完全に面を食らい、その言葉の意味が理解の域に到達することを困難にしたようだ。驚きから困惑へ。理解に達すれば溢れ出る疑問と、実体験と話のそぐわない気持ち悪さが胸を押し潰し始める。

疑問符を多量に垂れ流し狼狽する僕を、首を傾げて覗き見る職員は更に続けた。

「とにかく、転属の前田だつたかな。代理の男がそう伝えに来たきり、彼の事は何も知らないよ」

「……そうですか、ありがとうございます」

足が勝手に動き、向く先がレーーデの家の方角を見据える。病氣といつのは聞いていないし、異動の通達があつた後日にもレーーデには会つている。僕に対して仕事の話で隠し事をしているのは明らかだつた。それでも一昨日にそれを言う機会は有つた筈と、怒りに近い苛立ちと行き場の無い不快感を胸にパカパカに跨る。

結局、レーーデの住む家まで行つて不在を確認しただけだった。近

隣住民の話から以前と同じように夜にしか戻らないという事で、我が家で一人留守番しているミシェルを拾う。擦り寄つてくるミシェルに頭を撫でてやる事位しか出来ず、西ギルドへと舞い戻つてきた。

「何があつたんですか？」

朝見たほど不調では無いが、本調子には程遠いだろうマルガが、僕の苛立ちを察してかそう尋ねてきた。確かに口を閉ざす事が多かつたため、不機嫌だと伝わつてしまつたのかも知れない。

「ううん、何でも無いよ」

「……機嫌取りに失敗でもしたか？」

「そつちは大丈夫です」

我ながら淡白な返答だけど、今の僕にはそれが精一杯だつたし、話して良い内容かも判断がつかなかつた。

「そうか？……ところで、Cランク試験の事なんだが、また明日出直して貰う事になつたからな。マルガが使い物にならなかつた所為で」

「う……さつきから謝つてるじゃないですかあ！」

そして僕は取り立てて会話に参加せず、不快感を抱えたまま淡々と仕事をこなした。結果的にネスティ少年には悪い事をしてしまつたかも知れない。けれどマルガがあの状態では試験どころではなかつたし、僕一人だけでは役不足に違ひなかつただろう。やむを得なかつたと開き直れば、職務怠慢と罵倒されても仕方の無い話だ。

帰りの足を延ばし辿り着いた、レー・デの部屋からは既に灯りが漏れていた。ミシェルとパカパカを表に残し、家屋へ入つていく。四戸ある部屋を外付きの廊下は、隣の家の陰になつて暗かつた。ある一室の戸を叩く、出て来た人物は当然の事ながらレー・デ本人だつた。四年振りに再会した時と同じ様に、髪の色に違和感を感じた。再会した当初は、黒に近い強い青色だつた髪が全て白に染まり上がつていた事に戸惑つていたのだ。当人はイメージエンジだと笑つて答えていたつ。それが、室内からの逆光で昔の紺色の髪に戻つた

かのように錯覚したのだ。

「よお、リキッドどうした？」

金なら貸さないぞと、いつものように笑う親友がそこには居た。

「聞いたよ、中央ギルドに行つて無いんだって？」

玄関口で詰め寄る僕に、ややあつて神妙な面持ちでレー「テは答える。

「そのことが。……実は、ギルドを辞めようと思つてるんだ」

「辞めるつて……まさか、この前の事で？」

「それもある。……それに、また旅をしようかと計画してゐる所だ」

「どうしてそんな大事な事を話してくれなかつたのさ」

「すまない。話そつとは思つていたんだが、色々とタイミングが合わなくつてな……」

「……ギルドを辞めなくとも済む様に」

手の平を突き出し、続く言葉を制するレー「テ。

「気持ちは有り難いが、けじめだ。ギルドは辞める」

「でも」

「決めた事だ。……それに旅に出たら、どうしてもやり遂げたい事があつてな……」

どうしてか旅をするというレーテの答えは、気持ちが良かつた。きっと学徒として別れたその時の台詞と想い出がそうさせたのだろう。他の街、他の国の話を聞く度にどれ程レーテの事を連想したろう、僕の中では旅人レーテが自然な姿だつた。

それに、したい事をすると言つて友を応援しないなんて友達じゃない。

「わかつたよ、もう言わない。旅に出るなら君の無事を祈る事にするよ」

「ああ、ありがとつ」

「そうだ……聴聞委員がリザリアに来るらしいって」

「……俺の事だらうな」

「多分」

減俸や解雇に罰せられる事はあるだろ？ナビ、自主的に辞職するのだから咎められる事は特に無いと思う。

すこし間を置いて、負の感情を吹き飛ばすように霸氣のある声色が響く。

「……よし、明日にも発つとするかな！」

「明日とか、急過ぎるし…」

悪戯小僧のように歯を見せて笑顔になるレー^デに釣られて僕も顔が綻ぶ。

少し話して、またミシェルとレー^デと三人で夕食にしようと話を持ち掛ければ、快く承諾してくれて、僕の家へ行く事になった。

あつという間に辺りは暗くなりつつあつたけど、近所の魔光灯の部屋明かりが道を照らし出していた。

「お前の家こんなに綺麗だつたっけ？」

部屋に入ったレー^デの最初の台詞だ。綺麗にしている実感は無いけど、汚さず使う事を心掛けているのと、時々の掃除でなんとかやつていた筈だ。室内には埃の後も肩も残つておらず、家具も光つている様にすら見えた。それは間違い無くミシェルの功績で、西ギルドへ戻る時には気にもしていなかつた事だった。

「ミシェル、ピッカピカじゃないか凄いぞ！」

「ん~」

髪をくしゃくしゃにして撫で回す。ミシェルは口をへの字に曲げて、不平を唱えるのか誇り顔か。どちらとも取れない変な顔をしているので、思わず笑ってしまう。

「お前はミシェルを侍女にするつもりなのか？」

「まさか…」

「チジヨ？」

違う！と男一人でハーモニーを奏でる。

「侍女っていうのは、身の回りの世話を仕事にする女性の事だよ」

「これだけ綺麗してくれたんだから、ミシェルに特別なご褒美を

上げないとな？」

「そうだね、ミシル何か欲しい物無い？」

「カレー！」

僕とレー_テの顔を見比べて答えるミシルに、カレーを所望と聞いてどうしようか悩んでいたら。

「央風カレーは高いけどな。本場のカレーは辛いっていうより口の中が痛くなるんだぞ。知ってるか？ そんなカレーを今から作るか！」

「痛いほど強い辛味を経験した事があるのだろうか、ミシルは眉を顰めてカレー要求を取り下げる。

「ははははっ……リキットにアクセサリーでも買って貰うといい。

……な？」

「そうだね、装飾品の一つも持つておかしく無いもんね」ミシルは首を傾げていた。

結局、野菜と茸たっぷりのリゾット、コーンスープ、ザワークラウトという酸味あるキャベツの漬物に乗せた、こんがりと焼き目が付いた骨付きソーセージを三人でわいわい料理した。

楽しければ時間もあつという間に過ぎるもので、昔話に花を添え、ふとミシルの武器パンサークローの話になつた。

「あの時の武器はどこから持つて来たんだ？」

「ん~、この辺？」

両手で前方の空間を何度も掴もうとして、ミシルが何か握っている様に見える。

「あれは精霊が宿つた武器で……なんというか、出し入れが自由らしいんだ」

「精霊が宿つたって……そんな能力があるのか？」

「出すのにミシルに凄く負担が掛かるみたい。だから、あんまり出さないで居てくれればと思つてるよ」

「そうだな。……そんな武器、悪用しようとすると奴もいるかも知れ

ないし。見付からぬに越した事は無いだろ？

「パンサー見える？」

唐突にミシェルがレーデに尋ねる。

「いや、武器にしないと見えないな……だから、他の人が居るところで無闇にパンサーを武器にしたら駄目だからな？」

極めて真面目な顔でレーデが答える。

「うん、わかった！」

今までデュライと対峙した三回しかパンサーを出してはいない筈なので、大丈夫だろ？と思つ。戦う必要が無ければ、パンサー側から話をしようとする場合以外には、パンサーを具現化させないんじゃないかな。

「リキット、お前がちゃんと看るんだぞ、わかつてゐるのか？」

「わかつてゐるよ」

「頼むぞ、本当に」

レーデも僕に負けないくらいの心配性なんじゃないかと時々思う。いや、僕が頼り無さそだからかも知れないけど。

その後、酒も入つて、話は西ギルドの仲間の事やJランク試験の事、まだ出発してもいない旅の話にまで及んだ。ミシェルはその間ずっと、レーデから貰つたスライド型のブロックパズルを難しい顔をしながらあちらへこちらへと動かし解いていた。

レーデが帰つた後、ほろ酔い気分で風呂に浸かつていれば、ミシェルは一人で髪と身体をしつかり洗つていた。あつと言つ間に自立してしまつた気がして、嬉しくも寂しくもある複雑な気分になる。風呂上り、二人並んで腰に手を当て牛乳を飲む。何度も読んでいる絵本を寝るまで読み聞かせる。良い夢が見れますように。穏やかに、皿蓋を閉じた。

今朝はパンを買い込んで、ミシェルを家に置いてギルドへ向かった。ネスティのクラシックハンター認定試験の実地での戦闘試験に僕とマルガが付き添う事が決まっている。そのため、ネストさんが西ギルドを今日も一人で切り盛りするしかないと分かっていたからだ。ミシェルの学習能力が高いのか、僕がミシェルの事を見縊つていたのか、ミシェルはもう絵本もパズルの解き方も完全に憶えてしまつていて、暇つぶしの玩具としては使い物にならなくなっていた。なので、ミシェルには自分で考えて何でもしていいと言つてみた。勿論、火を使わない事を約束させてだ。心配もあるが、ミシェルが一体何をするのかちょっと興味がある。

ともかく今日は、パカパカに一人で跨る。新たな玩具の獲得と、レーデが勝手にしたアクセサリーをプレゼントするという約束を守るため、金庫から銀行券を持ち出して家を出た。

このリザリアでは街近くの河流から水を引いて、浄水した後各所に配水している。もちろん排水路も用意されている。その排水路には雨水や生活排水、清潔を保つために削ぎ落とした物が流れてくる所為で、悪い魔気が自然と集まりやすい。

地を通して自然な魔気に戻るのもあるが、そのまま溜まつて魔物を呼び寄せたり、生み出す場合もある。リザリアではそうしたモンスターを倒すのは軍の仕事の一部だけど、今回は認定試験という事で特別に許可を貰つて地下排水路に進入している。

ところで、悪い魔気が魔物を呼び寄せたり、生み出すと言つただけで。悪いマナの集まる所には、知らず知らずの内にモンスターが沸いている。その魔気が魔物を生み出すという説があるが、実際の所は定かではない。しかし、モンスターは魔気の強い所を棲家にする傾向が強いというのは確かなようだ。マナの薄い所や、聖なる魔気

とでも言つるのだろうか、の強い場所ではモンスターは活動していないといつのは、逆の意味で精霊にも当てはまる事らしい。

もつとも、見る事の出来ない精霊と、普通に見える魔物とを比較する事に意味なんて無いし、パンサーに聞いた方がよっぽど眞実に近い話が聞けると思う。

とにかく、僕達はこの臭い地下水路を慎重に進んでいる。人工的に掘られた水路の片脇には、石積みの簡易な歩道が出来上がっている。これが水位の変化に対応できるよう、腰辺りまで高さのある段差が何段かあつて、今は水位より上の三段が歩ける状態になつていて。そんな歩道と水路があるため、洞内の空間はそれなりに広く歩きやすいけど、臭いはなかなかに強烈だ。

先頭をネスティ少年が歩調に気を使いながら進む、僕とマルガがそれに続く。それぞれ魔光灯を持つてるので、日の当たらない地下水路もくつきり見えるほど明るい。

「何も居ませんねえ～」

「ここにじやなかつたのかも知れません……」

駐在軍が魔物の処理をしているとはい、本当に何も居ない。討伐モンスター 리스트の中でリザリアから一番近いモンスターが棲家としている筈の場所がここだ。と言つても、実務的にクエストを受ける要領でモンスターを選び、その場所を調べ、向かつたネスティに、僕達は付き添つてはいるだけ。一連の行動に何か問題が無い限り、出しやばつてまで注意や誘導は出来ない。今の所、ネスティの行動には何も問題は無く、対象のモンスターが見付からないという可能性を一番危惧している。

「モンスターが見付からぬ場合どうなるんでしょうか？」

ネスティの顔には心なしか焦りと汗が浮かんでいるようだつた。

「そうですねえ。推薦での試験ですと、規定ではもう一度モンスターの選択から出来ます。それも失敗すると、同一推薦人による特別試験は受けられなくなります」

赤縁の眼鏡の腹を押さえて答えるマルガ。

「そうですか。……頑張らないといけませんね」

探しているモンスターはレッドリザードという。人と同じ位長さがある爬虫類型の青い肌地に数多くの大きな赤い斑点が特徴的なモンスター。見た目の毒々しさの通り毒を持つが、毒性は低く局部の筋肉痙攣を引き起こす程度。わざと摂取しない限り、死に至る事はない。棲息場所は魔気の集まる水辺全域。毒攻撃への対処と躊躇無く攻撃出来る行動力さえあれば、倒す事ができる下級のモンスターだ。と言つても、もちろんキューブ情報の受け売り。僕はそんなものと関わり合いになつた事はないので、強弱の基準などはわからない。

「もしかすると、火唐草の所為かも知ないので……ネスティ君は先に進んで下さい。僕達は少し離れて付いて行きますね」

マルガに目配せをして止まるど、大げさに軍人張りのピシッと決まつた敬礼を見せた。

火唐草というのは、年中赤い色をした巻き蔓の特徴的な草だ。水辺を好むモンスターが嫌う香り成分が出るらしく、モンスター除けとして重宝されている。その草を僕とマルガは持つてゐる。

距離を置いて同行するも、目立つた変化が訪れない。レッドリザードだけならともかく、モンスターが全く見当たらない。何度もかのネズミが魔光灯の明りに晒されてしまつた。

「……いました！」

待ちに待つたと言わんばかりのネスティからの報告だ。僕達は素早く、ある程度の距離を保つ所まで駆け寄つた。大型蜥蜴のように四足を地面にぴたりと付け、口先から尻尾まで大人一人が横たわつたほどの長さがあり、柄も毒々しい赤斑点をしているモンスターだつた。

「間違いなくレッドリザードです！ 頑張つてください」

いつの間にか審査用書類を取り出して、いつでも書き出せる態勢にいるマルガを流石だと思う。書類を戦闘中に書く必要性は全く無

いんだけど。

「倒せばネスティ君もランクハンターだから、頑張つて！」

「はい！ 行きます！」

細身の剣を正面に構えるネスティ、その姿はまるで剣の型稽古をしているようだった。一方、レッドリザードも一歩も動かない。毒々しい風貌と、目をぱちくりとさせているのを合わせて見るとかなり氣色が悪い。

ゆつくりとネスティはレッドリザードに摺り足で近寄つていく。振るえば剣の切つ先が当たるかどうかの距離になると、先に動いたのはレッドリザードの方だった。レッドリザードは爬虫類と同じく、短足と思わせない素早さで、体で円を描く様に反転して駆け出す。ネスティは攻撃を警戒して一步下がつていたが、それが致命的だった。遅れて振るつた剣の跡には、レッドリザードの尻尾の先が僅かに転がつていた。

「つ！……迫ります！」

レッドリザードを先頭にして、離れた位置でネスティが少しづつ追い上がる。更に離れてマルガがレッドリザードとの距離を保つたままそれを追う。更にマルガに段々と引き離されつつ走る僕。マルガの走力に驚いている暇なんて無く、追いかけるだけで精一杯だ。間も無く、息を切らせて片膝に手を置いて呼吸を整え始める。しながら皆が走つて行つた方を見る。水路の先は曲がつていて、姿が小さくなり壁に遮られ見えなくなる。

背筋を伸ばして歩き出さうとするが、頭がくらうとして足元が崩れたように前のめりに膝を突いてしまつ。そのまま落ち着くまで呼吸を繰り返していると、目の端に青白っぽい何かを見つける。それに焦点を合わせても、僕には首を傾げるしか出来なかつた。

視線の先には、僕の靴ほどの長さの小さな蛇がぴくぴくと細かく動いていた。よく見ると青白い蛇はちよちよと漏れ出す汚水に打たれているではないか。蛇 자체をあまり見た事は無いのだけど、

汚水とは言え、水に打たれて弱る蛇つていうのは有り得るのだろうか。小さく可愛らしい蛇の姿に思わず笑い出しそうになつたけど、あまりに可哀想なのでその場から摘んで救い出す。

この大きさだと蛇でもまん丸の目が可愛いく感じる、大きいと不気味でしかないのに不思議だ。青白い蛇は礼のつもりか準備運動か、自分の尾を追つて何週か回つた後スルスルとどこかへ消えていった。

水路の先では魔光灯の明りがぼんやりと見えていた。どうやらそこで止まっている様だ。

僕が一人に追いついたら、ネスティはレッドリザードとその残骸の群れに囮まれていた。マルガは書類を完全に仕舞つて応援と言うより観戦している状態だった。

「遅くなつたみたいだね？」

「もう合格確定ですよ」

動いているレッドリザードはあと三体。その内の一體の額に剣が突き刺さり下腹から伸びた切つ先が光る、剣が抜かれると程なく体重を支えた四本の腕があつさりと力を失う。

残つた二体のレッドリザードが同時に飛び出す。一体はネスティに向かつて、もう一体は真つ直ぐ僕に向かつて長い身をくねらせ走る。

「え……？」

不意を突かれレッドリザードが目の前まで来ているのに、一歩も動かずまた逃げ出そうとしているのかという考えが一瞬過ぎる。レッドリザードは既に狙いを定めて、口を開いて飛び掛かつてくる。その裂け口に鈍く光る牙を見て初めて、襲われると理解するも、尻餅をつく様に地面に倒れるしか出来なかつた。

レッドリザードの開かれた喉の奥から硬質な鋭い舌がグイッと飛び出す。食べられると思った。しかし、レッドリザードは舌を引っ込めて僕に覆いかぶさるように身を預けた後、ピクリとも動かなくなつた。レッドリザードから視線を外すと、すぐ近くにはネスティ

が周囲を見渡しながらゆっくり近付いてきて、僕に手を差し伸べる。

「大丈夫ですか？」

「ネスティ君てば、ズバツ抜きながら剣をそのままシユパツと真つ一つにして、最後の一本にザザツて飛び掛ったんです！ 漆かったんですよ～」

マルガの解説を受けると、つまり、僕がレッドリザードの舌だと思ったのは、ネスティの持つ細身の剣だつたらしい。僕はネスティの手を借り立ち上がる。

「でも何でリキットさんが襲われたんでしょうか？」

「うん、火唐草は持つているはずだし……」

そう言いつつ、自分の身を、ポケットというポケットを漁る。しかし火唐草を入れていた場所はあるか、どこにもそれは無かつた。

「ごめん……無くしたみたいだ

「ん～もう、何やつてるんですか

マルガは口を窄めて、僕を咎めた。

「もう用は済みましたし、早く外へ出ましょ～

「ネスティ君は大人ねえ～

苦笑いを浮かべるネスティ。

「すみません

うな垂れる僕。

僕達は駐在軍の詰め所へ挨拶に寄つただけで、西ギルドへそのまま戻ってきた。僕のローブだけが一際、汚れによつて目立つてゐる。

「お帰り。……泥だらけじゃないか、どうしたんだリキット？」

「色々とあります……」

「そうか、怪我が無ければいいが。……結果は上々の様だな

「そりなんですよ、聞いてください。ネスティ君凄いんですよ～。

あつちからくるレッドリザードをズバツバシュツと……」

身振り手振りを加えて、語りだすマルガ。そう簡単に止まりそう

にない彼女はネストさんに任せて。

「じゃあ、ネスティ君こつちへ」

僕はネスティをカウンターの奥のテーブルへ座らせ、黄キューブで操作を始める。審査書に書き込まれた内容をそのまま入力する。と言つても今日の戦闘が優・良・可・不可の段階評価と備考くらいしか入力する所は残つていないので、あつと言つ間に入力し終え、ネスティの対面に座る。

「本部での承認を受けランクハンターに変わるまで、一日ほどかかります」

「ありがとうございます。……これでやつとランク、デュライと同じ」

最後にぼそりと呟いた独り言に、予想だにしなかった名前が挙がつた。

「もしかして、君と同一年くらいで赤髪の、デュライと友達なのがい？」

「……友達かどうかで言つて、多分違います。リキットさんはデュライとはどういう？」

「どういう関係という物でもないけど、ネスティ君が来る四日前だつたかな？……にギルドに来て、その後色々とあつてね」

「本当ですか…」

どちらかと言えば嬉しさが先立つてゐる驚きを見せるネスティ。今にも立ち上がらんばかりだ。

「本當だよ、嘘を付く理由が無いもの」

「生きてたんだ、良かつた」

安堵して目を閉じ、椅子の背凭れに沈む。すぐに跳ねる様に前へ重心が移動し、質問が繰り出される。

「デュライはこの街にいます？ ビックルきました？ ……僕らの事何か言つてませんでしたか？ ……もしかして何か伝言ないです？」

「あつ、すみません」

まるで慌てふためいてるみたいなネスティ。

「「めんね。行き先も知らないし、君達の事も伝言も何も聞いてな

いんだ。……ただ、この街にはもう居ないと思つ

「そう……ですか。……でも、生きてるのは確かなんですね？」

「足も有つたし、幽靈じやないと思うよ」

「そうだ！ 怪我はしてなかつたんでしょうか？」

「怪我か……最初に来た時の服装は汚れていたけど、怪我をしている様子は無かつたかな。……そのまま《ランククエスト》に出て行つたし」

ネスティは良かつたと相槌を打つて、その後の言葉の方が気になつたのか、更に質問が飛んできた。

「その《ランククエスト》というのは？」

ネスティに質問責めにされると流せず、正直に答えるを得ない。排水路では命までとは言わないでも、少なくとも怪我をせずに済んだのはこの少年のお陰である。

薬素材を収集するクエストで、今は魔窟と化した儀式跡地に行く必要があると答えると、ネスティはそれを受けたいと言い出した。紳士的な彼に珍しく、僕を困らせる。友達とは違うという言葉と、その行動から察すると、デュライに對して一種のライバル心があるのだろう。

デュライとクエストの話がしたいといつ事で食事に誘われた。ので、ミシェルが待つてるので我が家でも良ければと言えば、それをあつさりと快諾される。彼にとつてはデュライという存在は相当に大きいのだろう。

仕事を終えるまで、まだ幾ばくかの時間が残されている。ネスティ少年は、旅に同行している先日の筋肉大男、マセルというらしい、に諸々の事情を伝える為、一旦宿へ戻つた。

今日の仕事を終えると、丁度いいタイミングでネスティが戻つて来た。ネストさんとマルガは先に帰つている。マルガだけはついて来ようとしていたけど、話す内容的にもマルガが居ると面倒くさそうだったので、断固として拒否させてもらつた。

「すみません、お待たせしました」

「ちょうど今終わった所だよ。……それより、渡しそびれていたんだけど、これ」

色彩鮮やかな、鳥が翼を広げた形をしたバッジを渡す。細かい装飾の他、この字が背景に見えるように彫りこまれている。

「ストレリチアという花を象ったランクハンターに贈られる徽章だよ。試験合格おめでとう」

「ありがとうございます!……でもまだこのランクエストを受けられないのでは?」

「そう、手続き上の理由でね。その間にソルバーは別の街へって事はよくある事だから、先に渡す事になってるんだよ」

「そうですか、でもデュライは付けてなかつた様な……?」

「まあ、徽章は記念品だからね。付けていても、分かる人が見れば分かるって程度の物だからね。……彼の場合は、捨ててそうだけどハンター系統の徽章は上位三ランクになった者に贈られるが、特別な価値もメリットもないのに、記念品というのは確か。なるほどと言つて、白い制服の胸ポケットの上に徽章を付けるネスティ。

第七日 合格と失格?～後編～（約10000字）

ギルドの戸締りをしてパカパカを迎えに行き、大通りを西から東へ歩いて横断する。長く伸びた影も徐々に他の影に埋もれていく。大通りならではの魔光灯の明りで集客を狙う看板や文字。それらの明りで影が幾つも生み出されては消える。

ネスティの話はデュライとの出会いから始まつたが、長い付き合いではないらしく、言えない部分もあつたのか断片的な部分もあつて、すぐに終わった。

話を要約すると、ある切つ掛けで出会い、ごたごたに巻き込まれつつマセルと知り合い、廃墟へ行きそこで離れ離れになつたといふ事だつた。本当に要約するところだけだから仕方が無い。もつとも、ネスティが一番多く語つたのは、デュライとマセルとの戦いや、デュライとモンスターとの戦いで一挙手一投足すら喋る勢いだつたので、相槌で話を進ませるのに苦労した。マセルとモンスターの戦いにも触れたが、ハルバー一振りで豪快に叩き割るようにな倒したという説明だつた。それは、ネスティ少年がデュライ少年に抱いている感情が、強さへのライバル心と身近な憧れの内在した物だという事を更に際立たせただけだつた。

僕とネスティはようやく噴水広場に差し掛かる。

東西に伸びる大通りは唯一、南北を縦断する大通りによつて道が曲げられていた。両者の通りが交わる交差点には中央にとても大きな噴水があり、その人工池には神話を彫刻された石像が立ち並んでいた。その巨大な池があるために、どちらの道からも真っ直ぐに進む事ができない。代りに時計回りに回るよう矢印を刻んだ表示が街灯や石台についていて、その円形地帯を回らせる工夫をしていた。この成果によつてかこの街では自然と、馬車などは道の左寄りを走つている事が多い。大通りより幅のとられたあまりにも大きいロー

タリーの道は、露店スペースや馬の休憩処として主に利用されていて噴水もあり、広場という方が似つかわしかった。街を上空から見れば、十字を描く大通りにの中心地が円形に大きく開けていて、ど真ん中に石像が浮かび上がっている事だろう。

「お金を下ろしに銀行に寄るね」

そう断つてロータリーの南側にあるエクセリア王国銀行リザリア中央支店へ向かう。パカパカの手綱を引いているとは言え、道の端を歩いているので時計回りにぐるぐると回る必要も無い。

金銀銅貨であるが故に、大陸全土に流通する事ができた共通の貨幣価値としてのオレンジだけ。それを仕掛けたのがエクセリア王国銀行だという説もある。少なくとも、設立から数百年経つた今でも銀行としての機能を維持している事からも信頼性は高い。

しかし、ギルドのキューブの利便性を知っている僕にとって、銀行は使い勝手が良いとまでは言えなかつた。現にシステム上、銀行券なんて物を持つて訪れ書類冊子で照会をされなくとも、キューブのようライセンスによる照会をした方が圧倒的に早く確実だと考へていてるからだ。もちろん、ギルドがキューブのシステムを提供するのも、それを銀行が導入するかも、それぞれの経営陣の判断だろう。そんな考え自体が夢幻なかも知れない。ギルドが独占している技術を、他の事に置き換えて考えてても仕方の無いのだけれど。

とにかく、お金を下ろす為に銀行の中へ入つた。

銀行内は広く、高い天井からは魔光灯の光を反射して輝くシャンデリアが吊られている。見る限り敷地の半分ほど使つた待ち合い側には、対向する窓口に合わせて、ソファの色で分けられていて黒と赤に一分されている。赤が硬貨の預金の預け入れと払い戻し、黒が融資や借り入れなどの相談や両替といったその他の雑事に対応する様に、三人掛けのソファ五列が綺麗に並んでいた。

そんな訳で、当然赤いソファ側の番号札を取つて、待ち合い席を見る。優に二百席を超えるだろう赤いソファ群には空きがあるもの

の、一脚に一人は座つていて三割ほど埋まっていた。その中に見覚えのある人物が居たので、そちらへ向かう。

「やあレー^デ。昨日振り」

「おお、リキット。今日はやんちゃでもしたのか？」
僕の服装を見て最初にそう言つ辺りが、レー^デっぽさ、良い所とでも言うのだろうか。一方のレー^デは私服で、茶のカッターシャツと黒のスーツで大人っぽく感じる。

「認定試験の時に泥が付いちやつただけだよ」

「へえ、認定試験。……ちゃんと仕事してるんだな」「してるよ！ 失敬な」

軽く笑いあつて、レー^デが先に話題を変えた。

「ところで、そちらは？」

「その試験の受験者の、ネスティ君」

「ネスティとります。よろしくお願ひします」

「リキットの友達の、レー^デだ。よろしく」

レー^デが立つて握手を求め、ネスティがそれに応じる。

「ところで、レー^デもお金を下ろしに？」

「ああ。昨日の[冗談じやないが、旅仲間も目的地も決まつたし、明日は旅の準備をして……それで、発とうと思つてな」

「また急だね？」

本当に急な話だけど、それが怒りに変質する事は無く。今ならむしろ、頑張つてきて欲しいと素直に思う事ができる。

「思い立つたが吉日つてな。まあ、仲間を無為に待たせる訳にもいかないし、ここで使わない分は路銀も増える事だしな」

旅をして得たものがこうした判断の早さや、僕とは違う行動力にも影響しているのだろうと思うと、レー^デが服装だけでなく内面も大人びて見える。

「旅と言つと、巡礼されているんですか？」

「いや、俺の場合ただの旅行趣味さ」

「素敵な趣味ですね。何処に行かれるんですか？」

ネスティの事を冒険者だと思つていて、旅人なんて珍しくないと
いうか、彼自身もそうだろうと一瞬思つたけど、どうも違うよう
興味津々に聞いている。

「南の方を目指すのぞ」

「またサリッサへ行くの？」

レーデが学業を終えて、旅に出た時に聞いた目的地がサリッサだ
つた。

「ん？…………そうか、そうだつた。…………お前が顔を真っ赤にさせて、
食べた事も無い本場カレーの辛さを必死に説明する姿が滅茶苦茶お
かしくて…………それで、最初の目的地をサリッサに決めたんだつたつ
け」

「その理由、初耳なんですけど？」

僕はわざと不貞腐れた声色にかかる。

「ははは、今でこそ言える真実つてやつだ。気にするな。…………お
と、俺の番みたいだ」

いつの間にか、レーデの番号が呼ばれていたみたいだ。番号札を
持つて窓口へ向かうレーデ。

銀行機関というのはエクセリア王国銀行以外にオルフィード大陸
には無い。お金の貸し借りとしての商いならあるけれど。そのため
レーデに限らず、旅人は路銀を持ち歩く必要性があるので。

いくら貨幣価値が同一でも国家間を跨いでの銀行経営なんて、一
般人である僕からしても難しか存在しない事くらい分かる。そんな
訳でエクセリアにしかない、唯一の銀行。その質なんてものは比べ
ようが無い。けれど銀行は独特で堅牢な空気を持つていて、言い換
えることが出来るなら金の牢獄という印象だ。待ち合い側と職場側
の間にそびえる、窓口のついた格子の壁が理由だろう。その印象す
らも信頼を勝ち得ている要因なのかも知れない。

しばらくして、レーデが戻つてくる。

「じゃあ、俺はこれで準備をしてくるぜ」

表情からも生き生きしているのが見て取れる。

「また会えると信じていろから、わよなりは言わないよ」

「次会う時までには、幹部職になつてろよ？」

ギルドの幹部職というのは、平の職員、管理職の上有る等級職で、各部門毎に一名から二名しかいない様な実質経営陣の事。どれ程先の事かは分からぬけど、高いハードルである事は間違いない。僕からは、頑張るよとしか言えなかつた。

番号札から待ち時間に余裕があるのは分かつてはいたので、銀行の外まで見送りに出る。

「じゃあ、また。そう言って、互いに手を振つて別れた。

「レーデ！ 君にウィトフラウの導きがあらん事を！」

神話の時代。神々の中に、ウィトフラウという女神がいて、迷い人や旅人に道を示し救う女神として崇められていた。ウィトフラウの導きの道を進む者には成功や無事が約束されると言つ逸話だ。旅人と別れの際にこう言つて送る。

神話は宗教とは違つて、生き方や救いを説くものでも無ければ、教えを別にする者に対しても平等。……というよりお伽話のようない物だ。レーデは無宗教だと言つてたと思うけど。

「おう！ わ前こそ、アルプルドには気をつけろよ！」

同じく神話には、アルプルドという女神が出てくる。アルプルドは悪魔を誘惑したり、悪魔の居る地を荒らしたりする女神で、決して悪い存在ではない。しかしそれが転じて、悪い誘惑を断つ事や家内安全を願う時に、言つ言葉が、アルプルドに気をつけて。となつた。

どちらの女神も噴水に飾られた石像として彫刻されている。この別れを彩るよつて、噴射される水の勢いがいつもより強くなつた気がした。

「買い物にまで付き合わせちゃつてごめんね」

いうものの最後の日当て、装飾品を扱う店を残すのみだつた。露店のアクセサリーを幾つか見たけれど、これといった物が無かつた

からだ。プレゼントするからには、単純な細工過ぎず豪奢感の無い物がいい。その上で、思い出になるような印象的な物。ちょっと考えすぎだらうかと思うけど、ミシェルの頑張りに対する「」褒美なので、僕が妥協するのはおかしいという考え方方が強い。選び出すとちょっと面白くなってきたというのが本音かも。

「僕は全然構いません。プレゼントはじっくり決めた方が良いと思います」

そう答えるネスティに買った食材の半分を持たせているのが、なんとも気まずい。もちろん断つたのだけど、ご馳走になるし筋力も付くしと色々理由をつけて持った。彼は案外頑固なのかもしないなと思つ。

最後に入った店の壁は白地に塗つた壁に黒のラインで大きな菱形をいくつも描いていた。端に桃色の大きな花が青と白の花瓶に生けられていて飾り気の少ない印象を受ける。代りに、ガラスケースの被された陳列台の中には様々な彩りで輝く宝石や貴金属が存在を主張していた。

「いらっしゃあいませー！」

弾むような軽やかで澄んだ声が響く。腰の部分が引き締まつた赤いデザインベストと黒のタイトスカートで、体のラインを強調した女性従業員がショーケースの奥に立つていた。以前に衣服店で見た顔だつた。

「以前、衣料品店で働いてませんでしたっけ？」

「はい、働いてました。私に会いに来るなら、今度からこちらへ来て下さいね？」

スタイルも良く看板娘というのに申し分無いからこそ、そう言つのも有りなのかもしね。歩合制で給料が良くなるなら、より一層だつ。

「どうしてこちらに？」

「つい、聞いてしまつ。

「こっちの方がお給金がいいからですとも！」

キッパリと答える。予想通りの回答がなぜか僕に安堵感を与える。さて、接客で付き添ってくれるのはありがたいのだけど、今回においてはどうしても自分で選んで決めたくて断つた。

店内を一巡して気になつた物が一つ、人差し指と親指で作った輪の大きさほどの銀のコイン型ペンダントだ。ペンダントの中には鳥が立体に彫られていて、足でハート型にカットされた赤い宝石を掴んでいた。中古らしく銀はひどく黒ずんでいて、見ようによつてはカラスに見える。ただし、銀製品との赤い宝石が鮮やかなルビーであるために、中古なのに異様に高額。銀行で下ろした額を足すとギリギリ足りるほど、明日が給料日でなかつたら買えない。聞けば、つい先日値下げしたばかりだという。運命的な巡り合わせ。このペンダントもミシェルの下へ行きたいと言つているよつに感じた。

「ありがとうございましたあ～」

女性店員の好意で小さなハートリングを連続させたネックレスをおまけして貰つた。

「ただいま！」

惨事になつてゐる可能性を考え、ネスティを外に待たせている。ミシェルはどうしていただろつ。ぱつと見、今朝より綺麗になつてゐるので掃除をしたようだけど。居間からミシェルが走つてくる。「リキットおかえりー！……元気してゐるか？ リキットの娼婦するぞー！」

「……はい？？？」

ミシェルの発想は僕の想像の遙か彼方を行つてゐた。しばらく唸つて考へる。

「もしかして、僕の居ない間に誰か来た？」

「うん。ゴザシヨウが来た！」

ゴザシヨウつて誰。……全くわかんない。誰かは来たのは確かなようだけど。

「じゃあ、パンサーと何か話した？」

「うん。ゴザシヨウの言つてる事分かんなかつたから。……パンサーに聞いたらダメ？」

悲しそうに顔を歪めるミシェル。

「そうじゃなくて、パンサーの事を見られなかつたか心配なんだよ」「ゴザシヨウ帰つてから出したよ！」

「偉かつたね、ミシェル」

そう言つて頭を撫で回す。懸命な主張過ぎて僕が罪悪感を感じる。「パンサーと話をさせてくれる？」

「うん！」

この間の失敗を繰り返すつもりはないから、パンサーを持つつむりは毛頭無い。ミシェルの話から考えれば、魔力が残つていればずだし。

何も無ごミシェルの右手周辺が歪んで、ゆつくつとその形を成していく。

（パンサー、どうこう事だい？）

パンサークローは具現化しなくともミシェルの周囲で起つた事は周知しており、僕の言いたい事も分かつてゐるはずだ。

（申し開きの余地も無い。お主を訪ねて來た不遜極まりない女が、ミシェルの事を性的奴隸と罵つたのだが……その意に程よい言葉を知らぬ故）

そんな都合のいい言葉、僕も知らない。

（誤魔化すとか、嘘を吐くとかあつたでしょ？）

（儂の性質に合わぬ上、ミシェルに對して嘘は吐けぬ）

契約を結ぶと魔力の供給を受ける代わりに、精霊側にも制約があるわけだろうか。

（……といふか何で娼婦？）

（立場が多少違えど、する事は同じである。……娼婦の意には、男を慰めて元氣にすると云ふ。お主の力で何とか誤魔化して貰えぬだろうか？）

（……そりゃまあ、何とかするけどね。…………ヒカル、「ゴザシヨウて何者なの？」）

（ふむ。数度しか話さなかつたが、語尾に、御座いましょう。と言つ不快な女だ）

御座いましょう。「ゴザイマシヨウ」、「ゴザシヨウ」なるほど。しかし、ミシェルに毒突いたのは、家主の僕を含めて侮辱したも同然だ。許すまじ、ゴザシヨウ！

（ところで、外に妙な気配があるのだが？）

（ああ忘れてしまう所だった……ネスティと言つて、ジランクハンターになつたばかりの少年で、とても良い子だよ）

（儂の感じるのは異なると存ずるが……）

（他に何か居るつて事？）

（敵意は感じぬ故、気に留める事も無からう）

（氣になるつて……。というか、氣配や敵意まで分かるつていうのは、パンサークローは結構便利なんじやないかと僕は思う。とりあえず、ミシェルに娼婦と言わすのを止めさせたい。

「ミシェル、パンサーしまつていよ」

すーっとミシェルの右手から消えるパンサークロー。

「ミシェル、いいかい。娼婦つて言つのは、お金を貰つて身体を売る人なんだ。……ミシェルは僕にお金を貰つてないし、身体を売つてはいないだろ？？」

人差し指を立ててゆつくり力説する。

「ん~、クエストしてる！」

「そう！ ミシェルは僕のソルバーだ。……それに娼婦とかつていう言葉は、人を悲しくさせるんだ。……例えば、僕はミシェルの事なんて嫌いだ！ ……つてい」

「リキット、嫌い……？」

ミシェルは目を潤ませて口をへの字に曲げた。今にも泣き出しそうだ。

「違う、違うよ。僕はミシェルの事好きだよ」

時すでに遅く、ミシェルの田から涙がこぼれ落ちる。

「んつ……つひ……ほん……と？」

「うん本当。ミシェルが大好きだよ」

膝をついて抱き寄せ、背を撫ぜながら。ミシェルが落ち着くまで、ずつと。

……じぱりくして、ミシェルが泣き止む。ローブの肩口は涙と鼻水を吸つてぐつしょりだ。

プレゼント用に包装していない物をポケットから取り出して、ミシェルに見せる。

「これはミシェルの事を好きな証、僕からのプレゼント」

ペンダントには既にネックレスを通してある。

「……何これ？」

「ミシェルに似合つと思つて、選んだんだ。……これをすればミシェルはきっともっと可愛くなるよ」

首に掛けてやると、ミシェルはそれを眺めたり、揉んだり、顔に当てたり、噛んだりした。

横道に逸れてしまつたけど、ちゃんと納得してもらわないとしない事がある。

「……娼婦とかつて言葉はちつきみたいに人を悲しくさせるから、絶対に使つちゃダメだよ？」

「うん。わかつた。……じゃあ、ゴザシヨウは嫌なヤツ？」

「そうだね、デュライよりも嫌な奴だね」

「お待たせ、さあ中へ入つて」

「お邪魔します」

手持ち無沙汰になつて、パカパカを撫でていたらしいネスティを招き入れる。僕のローブの異常に気が付いて怪訝な顔をするも、何も聞かない。

パンサーの言つていた気配というのが気になつて見回つたけど、

何も居ない。仕方が無いので、玄関の戸を閉めようとすると、向かい隣の一軒家の端から水色の束ねられた髪がひらりと舞い踊る。慌てた手つきでそれを回収する手、その袖は僕のと同じ物。……十中八九、マルガだ。

「マルガー！ もう仲間はずれにしないから出ておいでー！」

聞こえるように叫ぶと、少し躊躇した振りをしてマルガが出てくる。ミシェルの事もあって、マルガが着く前に、彼女を理由にして、ネスティにデュライの話を禁止と伝える。お互いに元々それ程話す種も無かつたため、デュライの件は一通り話し終えている。ネスティが不愉快になる様な点を除いて。

「えへへ、ばれちゃいました？ ……自信有ったんですけどお舌を出して笑うマルガ。

マルガは料理が不得手という事で、ネスティの話し相手になる。ミシェルは料理を手伝うのにこなれてきた感じがある。そんな訳で今日は本気で僕の腕を存分に振るつて、我ながら素敵と思う料理の数々を作り上げた。

野菜や肉と溶いた米粉を混ぜ合わせた物を軽く薄焼きにして、それの裏を焼く時に一枚重ねて間に卵を落として焼いた、お好み焼き。珍しく豚の小腸が手に入つたので、これを刻んでしつかり湯でて、彩り豊かな野菜類と一緒にピリ辛に炒め卵黄を乗せた、ピリ辛もつ野菜炒め。余つた卵白と牛乳を合わせて蒸しあげて、その上にトマトとパセリをあしらつた、白卵蒸し。自慢したくなるような見事な霜降り模様の一枚肉を塩胡椒だけで焼き上げ、皿にワインを使った甘めのとろみのあるソースと、茹でたコーンにグロッコリーを添えた、ステーキ。余つた野菜でサラダも作つた。

品数多く振舞おうと思つて買った食材たちも、一人増えれば適当な量になるものである。

辛口審査員のミシェルにも受けが良く、当然といえば当然の結果として、高評価を得た。これが僕の実力ですよ。料理の腕は、学生

時代に僕の料理をけちょんけちょんに言われて以来、その人物を見返したくて、ずっと磨き続けてきた。今では料理にはかなりの自信がある。

クエストの話題より、料理の話題の方が多かつたのが非常に気持ち良かつた。

マルガにアルゴールをあまり飲ませない様に気を付けていたのだけど、陽気に振舞っていた。もつとも、いつも陽気なのが。

「私は決めましたあ。リキッドさんを嫁に貰っちゃいます！」

「本日は話し相手どころかご馳走にまでなり、本当にありがとうございました。マルガさんの家と泊まってる宿は西側にあるんで、責任を持って送つて行きますので。ではまた明日、お会いしましょう」

爽やかな笑顔で酔っ払いを引き連れていくネスティ。

「こちらこそ、楽しかったよ。また明日」

明日、例のクエストを受けにネスティがまたギルドを訪れる。どうも同行者の筋肉大男のマセルの用事がまだ掛かるらしく、短期的なクエストを受けて暇を潰すという事らしい。

別れを告げて、手を振つてそれぞれの帰路につく。

見えなくなつたら、ミシェルに家に入らうと促す。

（先程の気配がまだあるのだが）

そうパンサーの方から声を掛けてきたのには驚いた。ミシェルの右手には具現化したパンサークローが装着されていた。

（気配つて、マルガじゃなくて？）

（人間ではない。魔物か精霊かそういういた類のものだ……徐々に弱まつておる。このままでは消滅しかねない）

敵意は感じないらしいし、消滅つていうのは穩やかじやない。仕方無く、パンサーに気配のする場所を教えてもらつてそこを探す。ミシェルも一緒になつて探してくれる。

（居ないじゃないか、パンサー）

（動いてはおらぬ、よく捜索せよ。……まさか儂がお主にこんな嘘

を吐いておるとでも？ それに何の利点があろうが）
確かに。でも、何もない。

（……すまぬ、失念しておつた。精霊であるならば、お主には見え
なんだ）

思い出したように非を認めるパンサーだが、虫を探すように
態勢を落としていた僕は、それを見つけた。

それは排水路で見つけた小さな青白い蛇だったが、昼間とは打つ
て変わつてピクリとも動かず横たわっていた。

（動かないんですけど。もしかして死んでる？）

（それは無い。精霊のようだが……どこか部屋へ持つて行つてはく
れぬか？）

動かない蛇を拾つて、庭から居間へ戻る。

テーブルの上に蛇を置くと、椅子に座つたミシェルがパンサーク
ローを小蛇に触れさせる。どれくらいそうしていただろうか。軽く
片付けておいた食器や調理器具を全部洗い終わつてしまつた。僕も
座つてそれを見ていると、小蛇がピクリと動き、何事も無かつたよ
うに身を起こした。

（何をしたの？）

（同じ精霊同士、見殺しにするのは目覚めが悪い故、魔力を分け与
えたまでの事。しかし根本的な解決にはならぬ……リキット、お主
はこの精霊と契約するか否かを決めねばならん）

パンサーの言つには、小蛇精霊はその小さな姿に相応する脆弱さ
ながら、僕に助けられた恩義だけで中央広場からずつと追つて来て
マナの枯渇によって瀕死になつたらしい。それも、僕と契約したが
つているという事だ。

（契約については、僕は全然構わないんだけど。色々分から無い事
だらけで聞きたい事だらけだ。先にそつちを聞きたいんだけど？）
（良からう。儂に答えられる事なら何でも聞くがよい）

僕が気になつたこととその回答を整理する。

第一に僕が小蛇精靈を見れる事については、正確には分からぬといふ。推測なら相性がとても良いとか、何か因果関係があるとか、分からぬ以上考へるだけ無駄だそうだ。

第二に契約といふのは、精靈に生存できる以上の魔力を与える代わりに使役できるといふ、ミシェルとパンサーの関係で分かつていて事と同じような回答で肩透かしを食らつた。新たに分かつた事といえば、使役と言つても強制的なものではなく共生関係の様なもので、契約はどちらからでも解除できるという事。精靈の成長によつては、必要な魔力も増減するという事。

第三に小蛇精靈とは、パンサーと僕の様に通じていない訳ではなく、小蛇精靈が言葉を覚えていないだけという事らしい。契約が成立すれば、互いに伝えたい事が分かるという。

重複した質問を何度もしたけど、まとめるところを感じだらう。他にパンサーが補足的に説明してくれた事も少しある。例えば、前に僕の持つ魔力は少ないと言つていただけど、小蛇精靈の必要とする魔力は今の僕でも十分補えるという事。そして、魔力を与える生活を続ければ自然と、僕の持つ魔力の量は基本的には増えるらしいという事。

話を経た僕の感想は、契約といふのは一緒に暮らそう的な話だつて事だ。そう考へると家族が増えるという感覚で、僕とミシェルとパンサーと小蛇の一家。……妙な取り合せだけど、とても楽しそうだと思った。そんな訳で、契約に対し乗り気になる僕。

(それで、契約って具体的にどうすればいいの。武器に宿すの?)
(精靈としての性質が不明な以上、道具に宿すかは後で考えるべきだ。道具に宿すと難点が生じる……例えば、離れると魔力供給が出来なくなり、そのまま契約が解除される事もある)

迂闊に道具に宿して、どこかに忘れただけで終わっちゃうのは嫌だな。

(そやつには名が無い、まずは名を付ける事だ。次に、誓いを立て、お主の胸……心の臓に押し込むがよい)

名前……名前か。ミシエルの時といい、こう立て続けに名付け親になるとはね。改めて、名付けろと言われても何も思い浮かばないものだ。ミシエルは恥ずかしながら、僕の初恋の人の名前だ。蛇の、しかも精霊の名前なんて何にすればいいか分かる訳無い。ここは縁起のいい名前を。

「よし、お前の名前は……ラッキーだ！」

青白い蛇は真っ赤な舌をチロチロと出す。続けて契約をしようと掬うように両手を出すが、小蛇はそれから勢いよく逃げるのだった。

（その名は嫌だとの事、真剣に名を考えるべきだ）

「う……」「めんなさい」

確かに、今のは酷かつた。反省。

（名が決まるまで、そやつを肌身離さず側に置く事だ。契約者として与えるよりは、消費する魔力は数倍は多かるうが、今のお主なら何とか成ろう。……儂は戻る）

そう言い残して消えるパンサークロー。……ん、ちょっと待つた。今変なこと言わなかつたか。契約者はそれ以外の者より消費する魔力が数倍も多い。……逆を言えば、契約者じゃない方が魔力を使うつて事だ。以前に味わつたあの気持ち悪さも酷い疲労も、それが原因なんじやないのか。仕方が無かつたとは言え、何というか背筋にひたすら寒気を感じる。

その後も小蛇精霊の名前を色々考へては言つてみたが、逃げられるばかりで合格点を得ることが出来なかつた。

ラッキー、ハッピー、ナイス、グッディ、ソフトブルー、スネー君。……精霊の感覚なんて分からぬけど、これで良い筈もないよね。

今日はミシエルがやたらと引っ付いてきたので、それ以上考へることは出来なかつた。風呂も一緒に入つたし、何処に行くにも付いて来た。当然そのまま一緒にベッドで寝る事になつた。

第八日 給料日の真実～先～（約4000字）

いつものようにパンを買って出ようとしたら、玄関扉の隙間に手紙が差し込んでいた。

封のされたその手紙にはこうあった。

『我が友リキット＝インテルミッシヘ

聴聞委員の連中がすぐそこまで来ている。

俺は今後お前の身に起こるだろう事を分かつた上でリザリアを発つ。

これは俺の我慢だ。許して欲しいとは言わない一生俺を恨んでくれて構わない。

最後にお前という男を見込んで頼みがある。ミシェルとあの子の精霊を守つて欲しい。

『レーデ＝ファジア』

相変わらずミシェルの事を心配してくれている。何度も念を押されなくともミシェルの事はちゃんとみているつもりだ。あとは尋問を受けるという意味であったとしても、大袈裟な書き方だと思う程度だった。仮に、占いとかで僕の身に何かが起こると予言されても、言い知れない不安感しか得るものは無い訳だし。ともかく、手紙の内容からレーデがこの街にはもう居ないという事だけを知る。軽くではあつたけど別れは既に告げてあつたからこそ、その手紙は酷く後味が悪いものとなつた。だからと言つて今からどうすることも出来ないので、仕方なくその手紙をロープの中に入れてしまう。

「今日も仲良しさんだねえ？」

ミシェルの手を引いて、パン屋につくなりオバサンに言われる。

「うん。リキットはミシェルのこと大好き！」

そう言つたけど。昨日の今日と言うこともあって、恥ずかしい。

まあ、ミシェルが嬉しそうにしているだけで十分だ。

今日もまたミシェルに選ばせると、僕に何が食べたいかと聞いてくるのだ。僕がミシェルに聞くのを真似ているだけとも取れる。けど僕に気使つてくれていると考へると、何だか心にじーんとくるものがある。勿論、僕の食べたいのはクロワッサンだけね。

一日振りにミシェルを連れて西ギルドにやつてきた。頭の上には青白い小さな蛇の精靈を乗せている。勿論それを不振がつて凝視する人も、振り返る人も居ない。精靈は普通には見えない存在だからだ。当然ネストさんもマルガも全く見えていない様子。

挨拶を交わすと昨夜のマルガの奇行を責め立てる。ネストさんはやれやれと首を振つて、仕方が無いと言い切つてしまつ。マルガも昨日と同じように悪びれる事も無く、お喋りを始める。まだ知り合つて日は浅いけど、いつも通りと思えるだけの居心地の良さがそこにはあつた。

「みんな、今日は給料日だ。……マルガ、リキット。中をちゃんと確認してサインしろよ？」

そう言つネストさんに、蝶で封のされた封筒を渡される。

「ありがとうございます！」

「ありがとうございます！ 実は懐がすーすーしてた所だつたんです」
事実だ。昼までに貰えなかつたら昼ご飯抜きになつっていた所だつた。中には小さな金貨が一枚と受取確認書という書き出し書類が入つていて、早速サインして書類をネストさんに渡す。ネストさんに雇われてる訳ではないけど、西ギルドの責任者はネストさんなのでそういう形になる。

「リキットさんて、貯蓄してないんですか？」

「してたけど、色々入用だつたからね。……マルガは貯蓄してるの？」

「してて欲しいですか？」

人差し指を口に付けて答えるマルガ。

「意外とちやつかりしてそだから、してるかと思つたんだけど…

…

「今は色々調べたり、後学のために本をこつぱに買つてるので、リキットさんと同じお財布空っぽですよ。私達、気が合いますね！」

貯蓄の有り無しは、別に気が合つとかではないと思つ。

「ネストさんは豪快に使つてそう……」

「俺は貯金がどれくらいあるか知らんよ。……そういうのは全部嫁に任せたから」

「え。ネストさん結婚してるんですねー！」

「言つてなかつたつけ？」

「初耳ですよ」

「ふつふつふ、じつ見えてネストさんの奥さん……」

「おい、マルガ！」

なんて他愛ない話をしていると、あつと言つ間に毎時になるのだった。ミシルに何が食べたいかと聞けば、美味しいものと答えたので、今日は自分へのご褒美のつもりで昼食を取る事に決めた。

程よくお腹も空いて、何を食べようかと考えながら、給料も貰つたことで上機嫌に銀行へ向かう。金貨を持ち歩くのはばつが悪い事になると思うので、両替と預金をしに行くところだ。

しばらく歩くと、高級食材である魚のマークを掲げた店看板を見つける。やういえば、リザリアに来て以来、魚料理を食べていなかつたなんて事を思い出したりして、今日は豪華に魚を食べることにした。

銀行で用事を済ませて舞い戻つてきた魚料理専門店は、高級食材を扱うに相応しく全個室だつた。室内は明るく綺麗で調度品や絵画が飾られていて、落ち着いた色彩を使つたゆつたりと長居できる空間を演出していた。まるで、高級宿泊施設の一室をそのまま運んで来たみたいだ。

メニューを開けば、魚貝類や甲殻類の名前を織り込んだ料理名がずらりと並んでいた。しかし、値段は書かれていない。魚料理は基

本的に時価でしか売られない。それもこれも海に生息する魔甲鳥賊の所為だ。

遙か昔、神話が生まれた時代からずっとオルフィード大陸を囲む海には、魔甲鳥賊という魔物が大量に生息している。魔甲鳥賊は海外には、他の大陸や島があるなどと記された古典などは、もはや伝説だ。そんな魔甲鳥賊も何故か湖川には姿を現さない。その巨体の所為か、水質が合わないのかは定かではないが。そのお陰で川魚や海際で釣れる魚を食べることが出来る。とはいって、その漁獲量たるや家畜の生産量に比べれば、雀の涙なのだ。

僕は川海老の団子揚げ、赤鯛の炙り焼き、貝とキノコのホワイトソースパスタを注文する。

「コチヨコチヨー！」

手を叩いてミシェルは僕の頭にいる蛇の精靈を呼ぶ。パンサーと契約しているからかミシェルには蛇の精靈が見える。舌をペロペロと出す行動を見て、こちよこちよしているみたいという事で付けたらし。ただ、小蛇はその名前も気に入つてないらしく、基本的に呼ばれても無視する。

そういうえば、今日はこれと黙つて何かをした訳でもないのに、すでに疲労感があった。これも精靈に魔力を供給している影響だろうか。そろそろ真剣に名前を考えた方がいいかもしれない。

呼ばれても無視するものの、ミシェルと遊ぶのは楽しいらしく、結局料理が運ばれてくるまでじやれ合つてている。青白くちつちつい体に真ん丸の目が印象的な蛇。こいつには何だか可愛らしい名前が言ひと思つてゐる。

「チツコメ……じゃ、名前じやないし」

と言つて、不思議と小蛇精靈がこちよこちよに寄つてくる。心うやうい所を突いてゐるようだ。

「チコメコ……チコメコはどうだ？」

分かんないだらうけど、コチヨコチヨの感じを少し被せてみた。

すると、足も無いのにぴょんぴょんと跳ね上がり嬉しそうにその場でぐるぐると回りだす。

「よしねコメコで決まりだ」

チコメコの頭を人差し指で撫でると、その指を伝つてスルスルと頭の上に戻つてくる。

「ん~、契約はまた後でね？」

正直言つて、契約には躊躇いが生まれていた。魔力の供給にもパンサーの時ほど苦痛を感じないし。パンサーとの話で僕にもチコメコにも利点があるのは分かつたけど、本当にそこまでする必要があるのかと思つてしまい。どうしても踏み切れない。いや、契約をすることで得られる力……チコメコの力をどうしていいのか分からぬいというのと、それで力を得た僕が変わつてしまつのが怖いというのが本心かもしない。

誰かに習つたつけ。力と言つものはちゃんとした覚悟を持つて受け入れなければならないと。父さん、いや、兄さんだつたかな。だけど本当に今の僕にその覚悟が出来ていいのかと言つたら疑問だ。メリットだけを追い求めたら何か大切な物を失つてしまうかもしないし。ともかく今はもう少し様子を見て、自分自身の気持ちをしつかりと確かめた方がいいと思つ。

薄い青と茶のエプロンドレスを着た女性が料理を運んできた。ほどよく揚げられた団子は、赤と緑と白の三色が透けて見える。野菜の甘み、ふつくら感を味わえる川海老の団子揚げ。

網の焼き目のついた赤鯛の炙り焼きは、塩だけの味付けでじつくりと魚本来の味を堪能できる。淡白な味わいだけど、塩味で鯛の脂……皿みが口いっぱいに広がる。食欲をそそる、赤というのがまた艶やかだ。

貝とキノコのホワイトソースパスタは本当に旨い。貝からでた出汁が全体に広がり、ホワイトソースがそれを包み込む優しい味だ。

無駄な飾り気や味の無い、洗練し調和されたシンプルであるが故の深みを感じる。

ミシェルも今までに無いほど、目をキラッキラさせて頬張つていた。僕の選択は大正解だったようだ。ただ一つを除いて。

「ええ！ 四九〇オレン！！」

はつきり言おう。お金足りない。

以前、食べた時は確か四人でこれくらいの値段じゃなかつたか。ここ一年でまた価格が倍増している。漁獲制限や水辺のモンスターが無くなつたりでもしたら、あつと言つ間に幻の食材になるんじやないだろうか。

「すみません。銀行でお金下ろしてくるのでちよつと待つててください」

そう店員に言つ四〇〇オレンしか手持ちの無かつた僕は、ミシェルと手持ちのお金を残して、また銀行に向かうのだった。こういう時、ギルド職員のローブを着ていると信用されやすいので便利だ。もちろん、こんなこと初めてだけど。むしろ、ミシェルを説得する方が骨が折れた。

箱型の中が見えない車両を牽引する馬車がゆつくりとこちらに近付いて来る。すれ違つことが出来る程には距離があり、馬車も歩くほどしか速度を出していないので、さほど気にせず進む。馬車は僕の目前まで来ると静に停車する。

不審に思うが銀行へ急いでいる僕は、真横を通り過ぎようとする。と、勢いよく扉が開く。出てきたのは体躯のしつかりした男で、止まつた馬車に乱暴に引っ張られ、押し入れられる。そのまま滑る様に馬車の床に転がつて、引っ張つた男に馬乗りにされ、田隠しをされた。状況を理解する暇も無く、太い布のような物を口にきつく巻かれる。

「んー！ んー！！」

叫ぼうとしても声が出ない。体を羽交い絞めにされたまま、どう

しようもない不安と恐怖で心臓の鼓動が早まり、呼吸がうまく出来ず息が苦しい。馬車が走る音と外の喧騒だけが通り過ぎていくのが聞こえるだけで、男は一言も喋らなかつた。誘拐されるのか、これから殺されてしまつのか、最悪な状況に陥つた事だけは確かだつた。

「んー」

きつく太い布を噛まされているため、声が消されてしまう。こうなった理由を知りたい。

手足すら縛られ、もはや身動き一つするのも困難になつた。その代わり、男の羽交い絞めから開放され、馬車の座席に座らされる。男は相変わらず一言も発することは無かつたが、喧騒から離れ静かになっていく。しばらくすると、馬車がゆっくりと止まるのがわかつた。くの字に曲がつて男に担がれる。

足音が徐々に乾いた音に変わり、はつきりとした響きから狭まつた空間を感じる。どうやら屋内へ連れて行かれているらしい。

馬車の座席の時と同じように座らされると、口に噛まされた布と目隠しを外される。

暗い室内には何も飾り気が無く、無造作に床に置かれたカンテラの火だけが室内を照らしていた。僕をさらつた男が近くに、唯一ある扉の近くにもう一人居る。近くの男は黒と灰の横縞模様のシャツと、灰色のズボンを履いているが、一番特徴的なのは頭だ。髪の毛が一本も無く、前頭部がぽこりと大きく腫れ上がっている。

「何の、御用ですか？」

精一杯の強がりで発した一言だ。心臓は既に荒れ狂つていて。

扉の近くにいる人影がこちらに近付いてくる。カンテラの火が映し出す人物は、僕と同じギルドの制服であるローブを纏つていたが、ラインの色や装飾が違つていた。ローブの上から腰にベルトを巻いており、胸と尻の膨らみが強調されている。妙齢と言うには憚れるけど、年増というには肢体に帯びる弾力感に遮られる。成熟した女性というのがしつくりとくる。伸ばせば長そうな薄い紫の髪を、頂点後ろでぐるりと巻いている。巻かれた髪の膨らみに、高級感のあ

る髪留めと髪装飾を挿していっている。側頭部からも伸びる薄い紫の髪は波打っていた。

「あら、てつきり！」存知かと思つていましたけれど。……リザリア東ギルドのリキットさん、で御座いましょう？」

明らかに僕の事を知つてゐる。きっとこの人がミシルの言つていた、ゴザショウだろう。

「申し遅れました。私はギルド聴聞委員のエクシス。これは、私の雑用奴隸のケッペんですわ」

奴隸と言つてしまつ辺りが、僕に確証を与える。

奴隸制度は、百年以上も前の荒れていた時代にあつたものだ。奴隸制度が原因で有史以来の最大の戦争が起つたのは、今ではただの歴史でしかない。従つて、実質はどうか知らないけど、奴隸は存在しないと言うのが世の理だ。

「貴方が昨日、僕の家に來た人か？」

「ええ、色々と聞きたい事が御座いまして」

その答えを聞けば、僕はエクシスを睨み付けてしまつ。もちろん、ミシルを侮辱した事への怒りからだ。

「……ご自分の立場と言つものを理解して頂けてないのですね？」

……ケッペん！

いつの間にか視界から消えていたケッペんが、エクシスに黒く長い棒を持つてくる。エクシスがそれを空で軽く振るうと、振るつた力の分棒の先端までがしなつて湾曲を繰り返す。乗馬鞭に近いと思えば、自分が何をされるか連想できてしまう。

「痛い目に遭いたく御座いませんでしよう？……東ギルドで何を調べていたか。話したくなりましたかしら？」

「……何の事ですか？」

ビシッ！

エクシスが棒で床をはたくと、軽快に破裂したような音が室内に響く。

「では、レーデという男を何処に隠したのか……正直に話しては頂

けません？」

「わかりました、正直に言います。……一体何の事を言つてているのか、さっぱりわかりません」

ヒュンッ！

エクシスの振るつたしなつた棒の先端が、僕の縛られ前に出した腕を掠める。掠つただけのため音こそ出なかつた。一瞬痺れた様に感じた後、ひりひりと痛みが僕を襲つ。はつきり言つて痛いけど、痛みに負けたくは無かつた。

ピシッ！

返す棒が僕の右肩を強く撫せて行く。当たつた時の痛みと、少し経つて現れるじわじわとした痛み。歯を食いしばるのに躊躇う必要があるだろうか。それでも僕は睨む目をやめない、むしろ、歯を食いしばるほど睨むのが強くなつていくみつだ。

「恍けるのは、貴方のためにならない。そうで御座いましょう？」

……ケツペん、四つん這い

後ろに回つたケツペんに椅子を持ち上げられ、前へ倒れこむ。床と顔面直撃を避けるため、縛られた腕で庇う。その体勢からケツペンに腰を持ち上げられれば、肘を着いた四つん這いになる。

ケツペんに探らせて出てきたレー^デの手紙を読んで、僕とレー^デが親密な間柄だと確信したエクシスは執拗に棒を振るい続けた。背を、尻を、横腹を何度も何度も往復する、しなる事を忘れない棒の発する鈍い打ち音。どれほどの痛みに耐えたのだろう、どれだけの時間が経つたのだろう。僕の呻き声よりも、エクシスの息遣いの方が大きくなつていた。

エクシスが問い合わせた言葉は、ソルバーの情報漏洩に対する詰問などではなかつた。キュー^ブで何を調べていたのか、相棒のレー^デはどこかというものだつた。レー^デはキュー^ブで何かを調べていた。それで、僕にも聴聞委員が接触してくるのを分かつていていたという事だ。レー^デが何をしていたか、何をしようとしているのか知りたい

というのは、僕も同じだ。だけど、聴聞委員には協力する気はない。僕を巻き込むと分かつた上で、レーデが事情を話さなかつたのには必ず理由があるはずだ。何より、打たれ叩かれようが、友達を売るような事は出来ない。とにかく、ここをなんとかやり過ごして、僕も独自に調べたい。

凶暴にのたまう棒が体中を焼く。じりじりと焼かれるように痛む。いい加減、腕が痺れてきた。手首が縛られているため手を広げていてもなかなか踏ん張りが利かない。それでも姿勢を崩さなかつたのは、知らなかつたという理由で僕だけが逃げなくなつた。勿論、そうする事に意味なんて無いだろう。ただの意地だ。ここで倒れ伏したら僕だけが仲間外れに、関わるくなつてしまふと思ったからだ。

一際、力強い大きな軌道を描いて、しなつた棒が背中を打ち抜けしていく。乾いた音が響く。

「おいエクシス、調査員が目を覚ましたぞ」

そこにはエクシスと同じ聴聞委員のローブを着た中年の男が扉を開いていた。

「……あら、何か分かりまして？ ヘイブマン」

息遣いを整えて振り返るエクシス。

「厄介な事になつたかも知れん」

ヘイブマンと呼ばれた男は、腰ベルトから短剣と思われる剣差しを下げていた。濃い茶の髪は短くさつぱりとした印象を与えるが、右目の人差し指にかけて切り傷があり、まるで軍人が転向してきたようだ。

ヘイブマンがエクシスを部屋の外へ誘導して、部屋には僕とケツペンだけが残る。僕の後ろ側に控えるケツペンは僕の視界に入らない。

途端に、我先にと押し出る背の痛み、手の痺れ。芯に残るしなつた棒の感触と、鈍く響いた肉打つ音、その余韻が噴出す様に体と心を駆け巡る。痛い。堪らず、手を伸ばし顔面を地面につける。

それでも、まだ終わっていない。少しでも回復を図るため、呼吸を整える。縛られた手を伸ばし、耳を地に着けるのが一番楽な姿勢でそれが出来た。

ふと、自分の耳に室外へ出て行つた一人の声が聞こえてきた。床に耳をつけているにしては、いやにはつきりと聞き取れる。本来、耳に届くはずの無い声だ。鼓膜でも破れたかと心配になるけど、今はそんな事はどうでもいい。僕もレーテの事を知りたい、情報が欲しい。

「どうやら薬を含まされていたらしい。命に別状は無いから、恐らく時間稼ぎだろ?」

「それで厄介事とは何ですか?」

「奴らが調べていたのは……魔動力炉だ」

「まさか。……ギルドのシステムを魔動力炉から絶とうって言つんですの?」

「そこまでは分からん。……ただ、そうなつたら依頼人やソルバーは言つに及ばず、大陸全土で混乱が起きるのは必至。至る所で不測の事態が現れる」

「ソルバーは貧困、罪人は実質野放しになる、悪循環。与える経済へのダメージも計り知れないですわね。混沌とした時代に逆戻り、という事で御座いましょう?……けれど、魔力派出所の警備は万全なはずですわ」

「それがそうとも言い切れん。……この街の近くに強力な麻酔の材料になる植物が生息する魔窟がある。そいつは焚くだけで十分な効果を発揮する。奴ら結構な量を揃えていたらしい。つまり、侵入 자체は容易」

「通信で知らせれば良いだけでは御座いませんの?」

「もうやつたさ。魔力派出所だけ通信が途絶している。応援も頼んだが、間に合うかどうか。……ヒクシス、お前の方は何か分かつたか?」

「何も知らなさそうという事が……わかりましたわ」

「おい、インデルミツツだと……つたく、こんな時に……」

「お知り合いでですか？」

「多分な。弟がギルドに入つたと聞いたことがある。……お前はマセル＝ルイラフに知らせて準備を済ませておけ」

会話を聞いていたから、部屋に戻つてくるタイミングが分かつた。姿勢を元に戻す。

エクシスがケツペンを呼んですぐに出て行く。ヘイブマンがこちらへ近付いてくる。扉が閉まる寸前、小さな青白い蛇がスルスルと入つてくる、チコメコだ。

ずっと一緒に居たはずのチコメコが、いつの間にか僕から離れていたらしい。驚きが先に立つただけど、僕が彼らの会話を聞くことが出来たのが精霊チコメコの力だとしたら、僕はチコメコに感謝する。

「申し訳ない。どうやら君は今回の事には関係が無かつたらしい。
……我々も切羽詰つてているのだよ。許してくれ」

手足の縄を短剣で丁寧に切りながらヘイブマンが謝る。

「リキット＝インデルミツツ君だね？ 私は聴聞委員のヘイブマン＝ロスローという。君の兄上にはいつも世話になつてているよ」

ヘイブマンが手を差し伸べる。

いつもこの手だ。僕じゃなく、インデルミツツの名に差し出される手。この手を出す人の家名を見る瞳には、僕がどれほどこの手に瞳に苦しめられたか、孤独に陥れられたかが全く映らないだろ。見えるのは、利権や家督への繋がり、体裁だけだ。

インデルミツツ家は代々エクセリア王国の王族への教鞭を取つてゐる。教育事業の分野においても絶大な権威がある。王家に直接繋がるその影響力故に、一家の落ちこぼれである僕にでさえ、色々な人物が近付いて来る。

いつからそうと気付いたどうか、忘れてしまうほど昔から、僕

の周りには友達と自信を持つて呼べる友達が居なかつた。僕の周囲に人が絶えることはなかつたが、一人ぼっちだつた。真に心を許せる人が居なかつた。母さんは物心がつく前に亡くなつた。父さんは僕と積極的に関わらうとはしなかつたし、僕もいつも厳しい顔をしている父さんが怖くて近寄らなかつた。唯一、兄さんだけが僕の味方でいてくれたけど、兄さんが過保護だというのは僕にも理解できた。それでも兄さんに甘えて、誰も信じられない様な生き方をしていたのは事実だつたんだ。それをレーーデが教えてくれた。レーーデがそれとは別の生き方を教えてくれたじゃないか。あれから六年、信じられる友も、嫌な奴だつて増えた。だけどそれは、僕をリキットとして見てくれるから。僕がそう変わつたからじゃないのか。

レーーデが何をしようとしているのかはわからない。それでも僕に出来ることがあるはず、レーーデを助ける事が何かあるはず。決意を胸に僕はヘイブマンの手を借りて立つ。そしてレーーデの手紙を受け取る。

「レーーデが何をしたんですか？」

「何をしたというより、これからするというのが正しいかな。……ともかく、病院に送る」

当然の事だけど、僕にわざわざ事情を話す気は無さそうだ。だけど、チコメコのお陰でそれを知れた。

動くと痛い、服がされるだけでひりひりするけど、

「大丈夫。僕は一人で大丈夫です。西ギルドへ戻ります」

正確には、ミシェルの待つてる魚料理専門店へだ。

「そうか。では今は急いでいるので、また後日お詫びに伺うと約束しよう」

僕の傷が浅いと勘違いしたか、手間を取られないと考えたか。あくまで僕に気を使つていてるように装つていてるけど、内心嬉々としているのが見え透いてる。でも僕にとつても好都合、一刻も早く魔力抽出所に急ぎたい。

ヘイブマンは本当に急いで行つてしまつた。功労者のチコメコを

頭に乗せて、結果的に置き去りにしてしまった//シホルの下へと、痛みを堪えて走るのだった。

第八日 給料日の真実（後）（約4000字）

まず大通りを田指すと、南北の通りに出た。噴水広場が近くに見えるほど、中心部に居たらしい。

ミシェルを迎えていくのに財布が空では何の為に待たせているのか分からぬ。都合よく銀行は近く、待ち時間も少なく引き出すことが出来た。痛みが走る所為で、座ることが出来なかつたけど。魚料理専門店の店員に返されたのは、西ギルドにミシェルを届けてそこで残りの代金を受け取つた、という事だつた。

物凄く迷惑を掛けているのは分かつたけど、全身を揺さぶらない様に歩く。足が思うように進まないのは、痛みだけじゃなかつた。呼吸は乱れ目が回り、神経を蝕むこの感じは一度経験している。パンサーに魔力を供給した時と同じだつたけど、あの時ほど苦しくは無かつた。ただ一直線に伸びる西ギルドまで道程が果てしなく遠く感じた。

曇り空に夕の太陽が彩りを加えて、紅と黒、紫に見える雲もある。夕闇が迫つていた。

西ギルドの前まで何とか辿り着くと、ネスティが出て来た。ネスティはこちらに気付いて話しかけてくる。

「リキットさん、すみません。急用が出来たので、クエストはまた今度お願ひしようと思って、キャンセルしに着ました」

ネスティはまだクエストを受けては居ないのでキャンセルというのは不自然だつたけど、彼の礼儀と考えれば納得がいった。

ネスティが組んでいるマセルという人物と急用。僕の勘が外れたとしても万が一だ。

「これから魔力派出所へ？」

「すみません、何処へ行くかは知らないんです」

「もしも、魔力派出所へ行くのなら……レー・デを、僕の親友を助け

て欲しい！」

完全に甘えている。赤の他人、それも自分より幼い少年に。行く場所も知らないネスティにしてみれば荒唐無稽な相談だ。

レー・デが何故そこに居るのか、あらゆる事に穴の開いた願いだ。それでも懇願した。

「もしレー・デさんに会えたなら、助けるよう努力しますとも」ネスティはそう笑顔で答えるのだった。

「ネスティ準備はいいか？」

マセルが背の低く足の太い馬を一頭引いてやつてくる。

「はい。もう大丈夫です」

「よし！ ここから南西へ三日、目指すは魔力抽出所だ！」

大声を出すマセルの言葉でも、内実を知らない者には印象にすら残らないだろう。反対に驚いてこちらを見るネスティに対して、僕は腰を折り深く頭を下げた。

「急げ時間が無い！」

二人は馬に跨りその場を去った。

一日早くリザリアを発つたレー・デがどれ程の速度で進んでいるかはわからないけど、睡眠時間も惜しめば、追いつけるかもしね。それは今の僕にとつても同じ事が言えた。

力の抜けた体の重みだけで、西ギルドの扉を開ける。

「リキットさん！ 心配してたんですよ！ 何があつたんですか？」

大丈夫ですか？！」

視界に僕の姿を確認したマルガが矢継ぎ早に口を開く。

「ミシェル、置いてけぼりにしちゃってごめん！」

「ん~！」

謝罪する僕に対して、ミシェルはローブの裾を引っ張つて、どこかへ連れて行こうとしているみたいだ。それにちょっと待つてと答えてマルガとネストの方へ向き直る。

マルガ達に何処から何処まで話していくのやら、全く見当が付か

ない。信じて貰えなくていいと割り切つて順序立てて話す事にした。でなければ、ミシェルを一週間以上も預かって貰う事など出来るはずも無いからだ。

結局のところ、毎の出来事を語ることになった。勿論、精霊の話を抜きにしてだ。

「という訳で、僕に何ができるか分からぬけど、レーデを追いたいんです。……その間、ミシェルを預かって欲しくて、お願ひします！」

「もうフラフラじゃないか。追うにしても、今は休んだ方がいい」ネストさんの言う事は客観的に正しいのだろう。それでも僕にとっては、休んでいる暇なんて無い。一刻も早く出発しなければ。全てが終わつた後に到着したと考へてしまつ。

「馬上で休めますから。…………もしもレーデに何かあつたら、僕は自分が許せなくなる！」後で何でもします、お願いです！

「……あ、あのお。私でよければミシェルちゃん預かりますよ」おずおずと進み出て応えてくれるマルガ。

「全く……わかつたよ。俺だって協力しないつて訳じやないさ。ただそんな身体で街外れへ行くなんて自殺行為だつて言いたかつただけだ

ため息を一つ吐いて、ネストが応えた。

ネストの言うことには一理ある。主要な街道を通らないというのは、誰にも遭遇しないか、身包み一切を奪われるかだ。命の危険もあるし、賊が怖く無いと言えば嘘になる。とはいえ、今から護衛を雇うには時間が掛かりすぎる。レーデに追いつく為には、襲われない事を祈つて一か八かで行くしか選択肢が残されていない。

「大丈夫です。考えがありますから

考えなんて無い。この場をやり過ごすための方便だ。

僕は意を含んだ言い回しで煙に巻こうとする。笑顔を添え、人差し指を口の前に立てれば効果絶大のはず。

（リキッド、お主に話がある）

パンサーの念話が脳に響く。ミシェルが僕のローブ裾を引きながら、ネストとマルガから見えない様にパンサークローラーを具現させていた。

(もうちょっと待つて)

(先程から十分待つておる。お主、チコメコを死なせるつもりか?)唐突にそんな事を言われるものだから、疲労した脳は更に呆然となってしまう。

気がすつと抜けたのを見計らつて、ミシェルが僕を奥の部屋へと引っ張り誘導する。錠を掛け、パンサークローラーを装着したまま、椅子に飛び乗るようにならん。対面が入り口から近い椅子という事から、僕に座るよう暗示しているのだろう。

僕が座ると、ミシェルがパンサーと右手を机の上に置くのは同時だった。

(どういう事?)

パンサーの言葉を待つ。

(……お主、チコメコの力を使つたであらう? お主の魔力が著しく弱まつておる)

使つたつもりは全く無いけど、チコメコが僕に力を貸してくれたのだと思つてゐる。

(チコメコが生存する為の魔力を、今のお主は欠いておる。……このまま中途半端な状態を続けるのは、お互のためにならん。一刻も早く契約をするか、離別すべきだ)

パンサーは僕の魔力の減退を感じ取つて、チコメコに供給するべき魔力に足らないと判断したのだろう。昼間に感じた疲労感、今自分に襲い掛かってくる圧倒的な虚脱感、分かりきつていた事だ。考へないようになつてゐた。これから的人生を一変するだろう、決定的な選択から逃げていただけかも知れない。今、決めるしかない。そうしなければチコメコは僕を諦めるか、消滅する。

僕の自分勝手な思いだけなら決まつていた。それをチコメコに強

要する度胸が無かつただけ。僕がレーーテを助けるのに力を貸せと。その手にした力で僕は僕の友達を助けると。そう考えると僕の独善さが滑稽で、あまりに腹立たしい。それでも、契約することを選ぶ。

(……契約するよ。どうすればいい？)

(以前言つた通り。名を呼び誓いを立て、胸に押し込むのだ)

頭の上で舌をペロペロだしてじつとしているチコメコを掌に乗せる。ふと手が止まる。

誓い。一体何を誓えばいいのか。神様に捧げる誓いや祈りと違うのは分かる。

(誓いつて、何を誓えばいいの？)

(お主がチコメコに対して何をするか。或いは、チコメコの力を用いてする事か。契約においては、深く考えた具体性よりも、チコメコが認めるお主の真摯さの方が重要であろう)

(……わかった)

「チコメコ、僕は僕の傲慢で君の力を手にするよ。僕はどうしても友達を助けたいんだ。この契約がチコメコにとって良い事だと思える様に努力するよ」

掌でチコメコが初めて会つた時のようにクルクルと回つた。しばらくして、チコメコが寝そべる様に倒れる。そのままチコメコを胸に押し込んだ。

そして僕の意識は途切れだ。

夢の中。果たしてそのなのだろうか。現実味を感じないまじりみの中、虚実曖昧で歪んでいるのか整つてているのか分からぬ空間。そこで僕はチコメコという精霊の存在をはつきりと把握する。契約というものの本当の意味を理解した。僕の決断はチコメコの命を弄ぶ様なものだと、僕は考えていたけれど、少し違つた。

チコメコは水属性の精霊で、吹き上げる水と活氣で脈動する魔気を背景に生まれた。リザリアの象徴的な精霊と知る。楽しそうに行

き交う行商人や馬車、噴水の傍らに憩う人々を見るのが好きだった。水の流れに身を任せ辿り着いた地下の下水路で、自分の存在が虚ろになつていいくのを感じていた。魔物に追われ、悪い魔気に身を削りながら、やつとの思いで噴水と水質と同じ気配の排水路を見つける。けれど近くから急に流れ出した汚水に小さな身体が飲み込まれてしまつ。とっくに意識が薄くなり、消えると思ったその瞬間だった。そこにリキットが来て、助けてくれた。

喜び勇んで噴水に戻つたものの、いつもの風景がどこか寂しく儂く感じる。命の危険とは裏腹に、そこには僕の期待した冒険があった。ひたすら苦しさと悲しみの先にあつた興奮と歓喜を忘れられない。でも、夢物語はそこまでと諦めるはずだった。僕を見付けなければ。リキットがレー・デを送る姿は、まさに求めていた冒険の一齣で、かつこよく感じた。だからこそ彼を追う。家に辿り着くまでもがすでに、楽しくて仕方が無い。

ただ眺めるだけはもう嫌だ。存在の危機だつてもひ憲り憲り。そこに都合よく現れたのが僕だった。

チコメコの能力を理解する。自分の手足を動かすのと同じように、それと意識している訳でもないのに自然にわかる。チコメコの能力は、僕という意識とは別に精霊チコメコが見聞きした経験を後で、若しくは自意識の一部を外す事で同時に、追体験できるというもの。

何故こんなに色々な事が分かるのか。簡単だ。契約というものの性質に由縁している。

パンサーは前に言った。契約をすれば魔力の消費を抑えることが出来ると、精霊にとつても魔力を安定して受けることが出来る。

その意味する所が、これだ。僕とチコメコは一つになつた。
完全一個の存在という訳ではなく、一人で一人という感覚だ。お互いに無くてはならない存在。けれど別個の存在として互いを支え合つ。それが契約。

契約が解除されるというのが、今までの状態に戻るだけの事だとしても。痛みを伴わなくとも、今の感覚を失う事が、自分を見失う事と同じ意味に感じてしまう。まさに精霊と人間が一体となつた力タチ。

だからこそ、見失うことは出来ない。

レーデを助けるという目標を。決意を。覚悟を。契約を。

契約を機に、残り僅かな僕の魔力とチコメコの魔力が、僕とチコメコを往復し、血の流れのように循環する。その過程で僕の精神が覚醒している事を拒んだ。魔力の流動が負荷となつて、僕を眠りの世界へと誘つたと分かつていた。

僕は……いつ目を覚ますのだろう。

僕！ 起きろ！！ 今すぐに！！！

第九日 ギルド職員の約束（約4000字）

赤い陽の光が差す部屋の中。

チコメコとの契約後すぐに目が覚めたと願いたかったけど、自分の置かれた状況がそれと一致しない事が明らかだった。清潔感と引き換えにした、殺風景な室内と簡易作りのベッド。消毒アルコールの香りが鼻につく。

「気が付いたかね？」

ベッド隣の椅子に座っている声の主を見ると、靄のかかつた様な精霊契約の続きなんじゃないかと思つ。現実と分かつてているのに、脳が覚醒を躊躇つているみたいだ。それもその筈、そこに居たのは技工士クラフトマン^{クラフトマン}クエストをよく利用するお得意様にして、リザリア地域の有権者で、僕の遠戚にあたる人物だった。

「あ、の。……どうしてここに？」

「君が倒れたとマルガレットに聞いてね。友人の診療所に運ばさせて貰つた」

「マルガが……？」

「アレは私の娘だよ。もつとも、私の言つ事も聞かず自分勝手にやつているみたいだが……」

少し悲しさを含んだ複雑な表情が見えた。

「ところで、私の情報は役に立たなかつたのかな？」

「あ、いえ、そんなことは」

役に立つたかどうかで言えば正直、何の役にも立つてはいない。「冗談だ。あの程度の情報でどうこうする方に無理がある。……しかし酷くやられた様だね、すまなかつた。もつ少し早く探しを入れるべきだった」

マルガの親と名乗る有権者は、一度深く目蓋を落とし、キッと力強い眼つきに変える。

「さてこの件、君は何処まで知つていてる？」

沈黙が流れる。

「……友達が魔力抽出所に行つたんです。レー、デを止めないと」
僕は強く目を閉じ、拳を握った。悔しい。止められなかつた事が、事情を知らないことが、それともそれ以外の何か……わからない。ただ、後悔を感じる。

「そうか。……奴らのやり方は気に入らないが、事態が事態だけに彼らへの協力も吝かではない。……君の友人には、生きて裁きを受けて貰う事になりそうだが」

いつもの柔らかい表情に戻して、続ける。

「後は我々に任せて、君は療養に専念したまえ。リキット君

そう言つて僕の肩を叩き、席を立つ。

確かに、気を失つて倒れた。けどそれは契約によるもので、体調はすこぶる……ではないにしろ、背中の痛みを除けば良好だ。

「僕は……魔力派出所に行きます。……間に合わなくとも、何も出来なくとも、邪魔だと言われても、構いません。僕は行きます！」
焦りが先立つ。どうせここで嘘を吐いても、マルガを通して知られる。それならば正直に言つて、認めてもらう方がいい。それにミシェルの事で、助力を得られるかも知れないと思つたからだ。こんなに信頼できる後ろ盾は、僕の知る限り他に無いだろう。
立ち上がろうとする僕は手で制される。

「無理をするのは止めたまえ」

「……友のため、家族のためと。散々、無茶してきた貴方が言つ台詞ですか？」

扉の無い室内に見覚えのある男が入つてくる。僕が世話になつた診療所の医師が入り口の壁に背をもたれていた。

「そうだな、そう言う資格が私には無い。……私と同じか。わかつた、協力しよう」

そう言つて、少し離れた場所にぼつりと置かれた白い戸棚に向かい。胸ポケットから取り出した筆を使って、手紙をしたため始める。

「オスリーさんが協力を惜しまないらしいから、これを持って行くといい」

医師から布袋を渡される。中には二叉矛の形をした小さな葉っぱが数枚入っていた。

「これは？」

「トライスピード。神経が過敏になる反面、麻酔効果を無効化、若しくは軽減する。覚醒薬の一種だ。……麻酔香を持っているという話だから、その時は葉を噛めばいい。中毒性があるため多用は勧めないが」

「……ありがとうございます！」

僕はベッドから飛び出して、深々と一礼する。

「残り物だ。礼には及ばない」

改めて認識させられる。僕は考事が全然足りていなかつた。本当に魔力派出所へ、ただ行くだけになつてしまふ所だつた。

そうこうしていると、手紙を書き終えて来て、

「間に合つたならば、マセル・ルイラフという男を頼るといい。筋肉の塊の様な大男だ、会えばすぐ分かる」

「ギルドで見かけたので分かります」

「彼を聴聞委員に紹介したのは私だ。きっと力を貸してくれるだろう」

そう言つて、先程書き上げられた手紙を差し出す。僕は指輪で封蝋印された二通の手紙を受け取つた。

一通はマセル宛、もう一通は先行している軍隊宛だ。軍宛の手紙には、馬を一頭手配するよう嘆願書が入つてゐる。軍には出兵を要請したけど、監理外という事で、協力されない可能性もあると説明された。

長距離を人を乗せて、尚且つ、それなりの速度で長時間走るには、パカパカのようなサラブレッド種には厳しい。脚の太く安定感と持久力に優れた馬が必要になるけれど、最初から同じ条件で進むには

僕は出遅れすぎている。軍に追いつくまでパカパカで走り、そこから馬を乗り換えるのが妥当だ。

「マルガは子どもと一緒に君の家で、預かり支度ついでに待つていいやうだ。元気な顔を見せてから出発する事、それが私が君に協力する条件だ」

既に協力を受けているけど、そう言ったのはやっぱり親心なのだろ。マルガにもミシェルにも心配を掛けているに違いない。ミシェルが居るならパカパカも一緒だろうし、どちらにしても家に戻る事になる。

仮住まいの家屋の玄関口に近付くと、ドタバタという物音が中から聞こえてくる。

「ただいま」

「リキットー！ おかえりー！」

まず飛び込んできたのがミシェルだった。

「おかえりなさあい。えへへ」

どこか照れくさそうに笑うマルガの服にはあちこちに埃がついている。

「リキット、コイツが誘拐しようとする！」

何があつたのか聞こうと、口を開きかけたけど、その前になんと

なく状況が掴めた。ミシェルには何も言い含めてはいなかつた。

「コイツじゃなくてマルガ、ね。……それに僕は少しの間、街を出るから」

「うん！ 一緒にレー・デ助けに行く！」

全く何も聞いていない訳ではなかつたみたいだ。

「ミシェルにはね。マルガたちと一緒にいて貰いたいんだ」

「一緒に行く！」

「駄目だつて。ミシェルが危険な目に遭うのは見てられないよ

「リキットの方が弱いもん！ 一緒に行くの！」

ううん、どうなんだろう。ミシェルには負けた相手に向かって行

く勇敢だと、武器として精靈としてパンサーという秀でた力を持っている。反対に僕には運動神經はまるで無いし、チコメコの力だけで戦闘向きじゃない。だけビリ・シェルぐらの子供にやるものだろうか。

いやいや、そういう事じゃなくて。

「ミシェルを危ないと分かってる場所に連れて行くわけに行かないだろ？」

「リキッドが危ないから守つてあげる！」

駄目だ。完全に強弱で見ているミシェルに、危険だとか言つても逆効果だと感じた僕は、味方を一人増やす事にした。

困ったのと同じくらい微笑ましい視線を送つて、黙しているマルガに話しかける。

「ごめんマルガ。説得するから少し一人きりにさせてくれない？」

「はいー！ ミシェルちゃんの衣服はもう支度してあるので、表で待つてますねえ」

束ねられた一本の水色の髪をゆさゆさとなびかせて、ミシェルの服が入つているだらう鞄を抱えて出て行く。

「ミシェル、パンサーを出せる？」

ん。と軽く返事をして目を閉じ祈るように手を前に据えて、パンサーを具現化する。パンサーこそがミシェルを説得する一番の味方だ。

今まで何度も見てきたそれを不自然に思つたのは、パンサークロ一が見え始めてからだつた。爪状の武器が見え始めると、それとともに武器の真横に黒くてもやもやとした物体が濃くなつていいく。まるで視界に墨がこぼれ出したみたいだ。

わざとらしいほどに、何度も目をぱちくりと開閉させても、それは消えることが無かつた。より黒くより大きく、最初は虫かと思ったけど、僕のこぶしだほどになる。

（話は聞いておつたが、どうした。何を呆けておる？）

(何かパンサーの横に丸くて黒い何かが……)

(見える様になつたか。それは儂だ)

精靈としてのパンサーということだらう。チコメコと契約したことによつて見える様になつたみたいだ。

(これが、パンサー？……ずいぶんと可愛いんだね)

すすの塊が浮き上がつてゐるだけのようなそれを見て、パンサーの今までの言動が滑稽に思えてしまう。

(む？)

(そうだ、そんな事よりミシェルの説得に協力してよ)

(良かるう……ミシェルよ。リキットはお主が居ると本氣が出せぬのだ)

ミシェルと僕へ併せて念話を送つてゐるのだらう、そのまま念話が脳に響く。

(リキットの天地を震わせ山河を裂くその本気の力も、お主が隣に居ては使えぬのだ)

「そ、そう。その通り！」

胡散臭い説得が始まつたけど、今のミシェルには一番効果的なかもしね。筋肉を盛り上げるポーズとでも言うのだらうか、これでもかと間接を曲げる。勿論、盛り上がる筋肉なんて全然無い。けどロープがそれを隠していた。

ミシェルはこちらを眉をひそめてこちらを見つめている。完全に疑つてゐるようだ。

「僕が嘘を吐いてるよう目に見える？……ミシェルを騙したことがあつた？」

大人つて汚いよね。誤魔化したり、嘘吐いたりしていない訳でもないのに、知つた上でこんな風に詰め寄るんだ。でも今回はミシェルのためつて事でどうか許して欲しい。

(所詮、リキットの事だ。……ただ街を出て　　ただ戻つて来る、それだけの話。……そう、所詮はリキットだ)

一度も言つのか。さつきの引っ掛けたものをここで吐き出そう

としているパンサー。精靈にも自尊心というものがあるみたいだ。

「いやいや、僕は必ずレーデを助けて帰つてくるからね」

ミシェルは口をつぐんで、じつとこちらを窺つていた。

「……絶対、レーデを助ける?」

しばらくして開かれた口からはそんな言葉が零れ落ちた。

ミシェルもレーデを助けたいと心底思つてゐる事に気が付いた。だからこそ真剣に応えた。

「絶対にレーデを助けて連れて帰つてくる。約束だ!」

「ん~~……ん、待つてる」

急ぐという理由で、家を出て同時にそれぞれの目的地を田指す。追い縋る様な形でミシェルたちは、いつてらつしゃいと叫んだ。そう、行つて来る。僕はレーデを連れて戻つて来なければならない。そういう約束を交わした。例え何が待ち受けようと、僕の目的はそれだけだ。

魔力派出所を目指す。レーデは恐らく一日前に夕方以降に発つた。それを追つ形で、聴聞委員とマセルそしてネスティ一行が一日前の夕方に、軍が今朝の未明に、僕は日の出後にヨツザベリザリアを出発した。

行程だけと言えば既に一日と半分遅れている。間に合ひだらうか、それだけが心配だ。

第一一日 ギルド職員の眞実～白い暗闇の先～（約4000字）

例の植物を燻されて、白く薄い煙が幕となつた渦の中を、パカパカの背に乗つてひた走る。トライスピードを強く噛みつけてスピードを上げる。煙の渦を一つを抜け切ると、またスピードを落とす。さつきからこればかりを繰り返している。

前にも後ろにも視界は白く濁つていて、煙の迷路に迷い込んだようだ。

「パークポ力、パカパカの脚は大丈夫？」

「ん？ おいらを馬鹿にしてるのか？ 大丈夫に決まつてるぞ。…
…それにしても、臭くて煙たいぞ」

パークポ力が片手で鼻を摘まんで、片手で目の前を扇ぐ。

パークポ力はパカパカと契約した地属性の精霊で、大きな頭をしている。全身合わせても僕の顔と同じか小さい位の小さな人型精霊。全身緑の衣服を着ている。勿論、着ているのか服自体も精霊の一部なのは、よく分からぬ。そして半分ほどもある頭にも緑色の三角の頭巾を被つてゐる。

「折角いっぱい走れたのに、気分悪いぞ。戻つて別の道行こう！」「地の精霊なのに走るというか、風を感じるのが好きらしく、走る動物と契約を交わしながら生きてきたらしい。

「もう少しだよ。もう少しだけ我慢して」

「んー。しようがないなあ。まーあんたがあの廐舎から出してくれた訳だし。こんなに走つたの久しぶりだし。でも、臭いんだぞ」

「ごめんね」

パークポ力は不満そうに締めくくつたが、それ以上文句を続けることはなかつた。

言葉で話し掛けてくるパークポ力だけど、それはパンサーの言つところの、通じていないからだと思う。チコメコと違つて話すことが出来るのは、相応に生きてきた証なのだろうか。言葉を理解し念

話するパンサーと、普通に話すパークポ力の違いを考える。やっぱ
り、精靈の形狀に關係が有るのんじゃないかと思い至る。

（契約は人間にだけ許された特権などではない。儂のように武器に
宿る精靈がいるのと同じく、動物に宿る精靈とている。……なれば
馬と契約する精靈がいてもおかしくはなかろう）

パンサーにそう説教されたのは、もう一回も前の話だ。

チコメコと契約以後、始めてパカパカを見て驚いたのは、緑の小
人がパカパカの頭にちょこんと乗っかっているからだつた。飲食料
を確保している最中、ふいに窓から外を見るとそれを見つけた。パ
ンサーを見た時と同じように呆けていたらしく、パンサーに声を掛けられた。

（どうした。また呆けているのか？）

（あ、あそこに小人が……）

僕が指差す先はパカパカの頭上、緑の小人。

（パークポ力の事か。地属性の精靈だが、詳しい事は本人に聞くが
良かろう）

その濁すような言葉は、パンサーが自身の事を話そうとしないの
と結びついた。けれどそれを聞いている暇はなく。それよりも、パー
クポ力に関する期待を感じていた。

パンサーが言うには、僕が精靈を見ることが出来るようになつた
のは、チコメコの影響によるものだという事。それは精靈の中でも
非常に若く力の弱いチコメコが、感知する能力に長けている証。契
約をしても全員が精靈を見るようになる訳ではないらしい。反対
に、精靈契約をしていない人間の中にも、稀に精靈を見る事が出来
る人間がいるという。

荷造りを早々に済ませて、パークポ力の下へ向う。

「おはよー、パークポカ」

「おー。おはようだぞ！……今日は走れるのか？」

僕に見られている事に関して、全く違和感を持たなかつたようで、
平然と話してくる。今までミシユルがパカパカの首に巻き付いたり
していたのは、パークポカと話していたのかも知れないと思つた。
「う、うん。南西へ三日程走つた距離にある魔力派出所へ行くんだ」
「ほんとか！ 三日も走れるのか？ やつたぞー」

一瞬、走るのはパカパカだらうと思つたけど、チコメコと知覚を
共有できる僕には、なんとなく理解できた。

「それで、パカパカの事なんだけど。……三日間も駆足。いや、速
足で走り続けられるものなの？」

「駆足だつて、出来るぞ。……ん？ まさか寝ないわけじゃないよ
な？」

「まさか。……そんなに走つて、パカパカの脚は大丈夫なの？」

「おいらの事を舐めてるのか？ 出来るつたら出来るし、相棒に無
理なんてさせないぞ。おいらの力は衝撃を強くしたり弱くしたりす
る事なんだぞ！……そんな事より行くなら早く行こう！」

願つてもない事だつた。僕は運が良いのかも知れない。情報を手
に入れたのも、パークポカの事を知れたのも、チコメコのお陰だ。

僕の相棒はそこが自分の席であるかのように、僕の頭の上で舌を
ちろちろと出している。この煙の中でも、それは変わらない。

街を出てからといつも、出来るだけ平坦な道を選んで走つてき
た。その所為か、軍隊の影を遠目にしか見る事ができなかつたのと、
もう一つ。盗賊に襲われかけた。

チコメコの目と自分の目を交互に見やれば、飛んでくる矢も楽に
見つけられた。その上、飛んで来る矢も緩急をつけて走るパカパカ

を的確に射止める事など出来なかつた。長距離も荷を引くよつた馬とは最高速度が全然違うから、盜賊も勝手が違つたのだろう。何より荷をほとんど積んでいないからか、すぐに諦めたみたいだつたけど。振り返る事無くチコメロの田を通して、後ろから飛んで来る矢がどれだけ止まつてゐる様に見えたことか。小気味良かつたのは確かだつた。

ぱつりと白い煙の中に建物の影が見える。そこが確かめるまでもなく魔力抽出所だと分かつた。

白い煙が立ち込める中、灰色の外觀全部を見通すことは出来なかつた。けれど、入り口はすぐに見つかつた。誰かの影がそこへ入つていつたのが見えたからだ。

「レーーデ！」

僕は叫んだ。パカパカが想像以上の長時間を走り続けてくれていた事。それで僕は追いついたと思ったからだ。

影は一回り小さくなつて以降、こちらを向いて構えて動かない。距離を取つて、警戒している。レーーデ本人では無さそうだ。流石にそんな都合よく進むとは思つてない。相手を確かめるためにゆっくりと近寄る。

「リキット……さん？」

煙を纏つている様な白い服装のネステイがそこに居た。それを聞いて、僕とネステイの間にある入り口から、次々と出でてくる。マセル、ハイブマン、エクシス、ケッペン。

「リキット君、どうしてここがわかつた？」

ハイブマンが短剣を鞘に収めながらそう尋ねてくる。

「オスリーさんから聞きました」

勿論、嘘だけど今はそう言つのが最善だと感じた。

「あの、マセルさん。これを」

オスリーさんから預かつた手紙をマセルに渡す。マセルは不思議そうにその手紙を読む。

「……なるほどな。同行人が一人増えるぜ？ 問題ないよな、ヘイブマン」

「いいだろう。その代わり仕事は、より迅速にやつてもいいわ」

「じゃあ、くつちやべつてないで行くとするか！」

マセルが先頭を歩き、ヘイブマンが続く。エクシスがこちらを警して後を追う、それにケッペンが従うようついて行く。僕とネスティが並んでそれに続く。

設置された魔光灯の明りで中はくつきりと見えた。魔力抽出所の入り口から部屋までは大人一人が並んで歩く事ができる通路だった。マセルが一人だけ窮屈そうに進む。土壁の所々に金属の柱が立っていて、不自然さと不気味さを醸し出している。

入口通路から少し開けた空間には、真正面に扉がある部屋。他に出入り口は無い。叩いてもまるで音を反射しない重厚な扉は、全員で押しても動く気配がない。

「やつぱりこの盤が鍵になつていいんでしょうか？」

ネスティが示す盤は、扉の隣にあった。

盤には上下左右の四箇所に鐘形の穴が開いていた。

「どうやって開けるんだ？」

マセルはしばらく盤を見て、聴聞委員の面々を見渡しながらそう言った。

「知つてゐる訳が無い。……通信も遮断されているし、氣を失つた奴からは聞く事も出来ん」

代表して答えるヘイブマンは、氣を失つた抽出所の警備員を外で見たと説明を足した。僕に氣を使つたのだろうか。

ともあれ始まって早々、行き止まりに当たった様なものだった。僕はその盤にある穴に何故か見覚えがあった。

「この穴。……ちょうどピースオブオレンと同じ大きさですよね？」

そうピースオブオレンだ。鐘形の銅貨。

「なるほど。だとしたら警備員がピースオブオレンを持っている可

能性が高いな」

俺が見て来よう。そう言ってヘイブマン独り入口へ向かって走り出す。

戻つて来たヘイブマンは六枚のピースオブオレンを手にしていた。三人の警備員が各一枚のピースオブオレンを持つていたという話だ。「入口である事を考へると、四つの穴のどこかにピースオブオレン一枚を差し込む事で開く仕掛け。……という事で御座いましょう?」エクシスの問い合わせに頷いて納得する。

扉盤の仕掛けを間違えると、何処からともなく毒の塗られた矢が飛び。けれどマセルとヘイブマンがそれを「ことり」とくち落した。四度目にして扉が左右に開く。

その後も罠の出迎えがいくつかあつた。それらは急いでしらえの罠ではなく、設備と一体化していて、以前から機能していた物だと物語ついていた。正直うんざりしてきたけれど、警備員や所員を全然見かけない理由がなんとなく分かつてきただところだ。

進むべき道筋をようやく発見して、抜ける床のある部屋を進んでいたところだつた。この部屋だけ魔光灯がなく、少し薄暗い。これも罠の一部なんだろう。

突然、地面が揺れ動く。地震だ！

僕とエクシスが地震の影響を直に受けよろける。僕の身体をマセルが難なく支えた。エクシスは抜けない床から、抜ける床へと足を踏み外す。床が落ちるより先にエクシスに手を差し出し、思いつきり引つ張るケッペン。エクシスを救うのと引き換えに、一言も發せずに落ちていく、ケッペンの後姿。誰もがどうする事も出来なかつた。

ケッペンがエクシスの雑用奴隸と聞いていた僕は、その忠誠心に感服する。それと同時にケッペンを助けられなかつたという事が、レーデを助けられない事と重なつて、恐怖と悔しさに襲われ始めていた。

ケッペンに助けられ、ヘイブマンに身体を支えられていたエクシスだつたが、すぐに姿勢を直す。そうだ、いくら奴隸と言い切るといえ、彼女の方が辛いに決まつてはいる。

エクシスが、ケッペンの落ちて行つたその先を見つめる。僕の居る場所から見ても、その先は深く真っ暗だ。　彼女はその暗闇の中へ飛び込んだ。

一同が唖然となつて消えた姿を追つていた。どう声を掛けようと考へていただろう。生きていると安心させる言葉だとか考へていた筈だ。だけど彼女はそんな言葉を聞く事は無かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7196w/>

OLFEED ~ギルド職員の仕事~

2011年11月23日06時54分発行